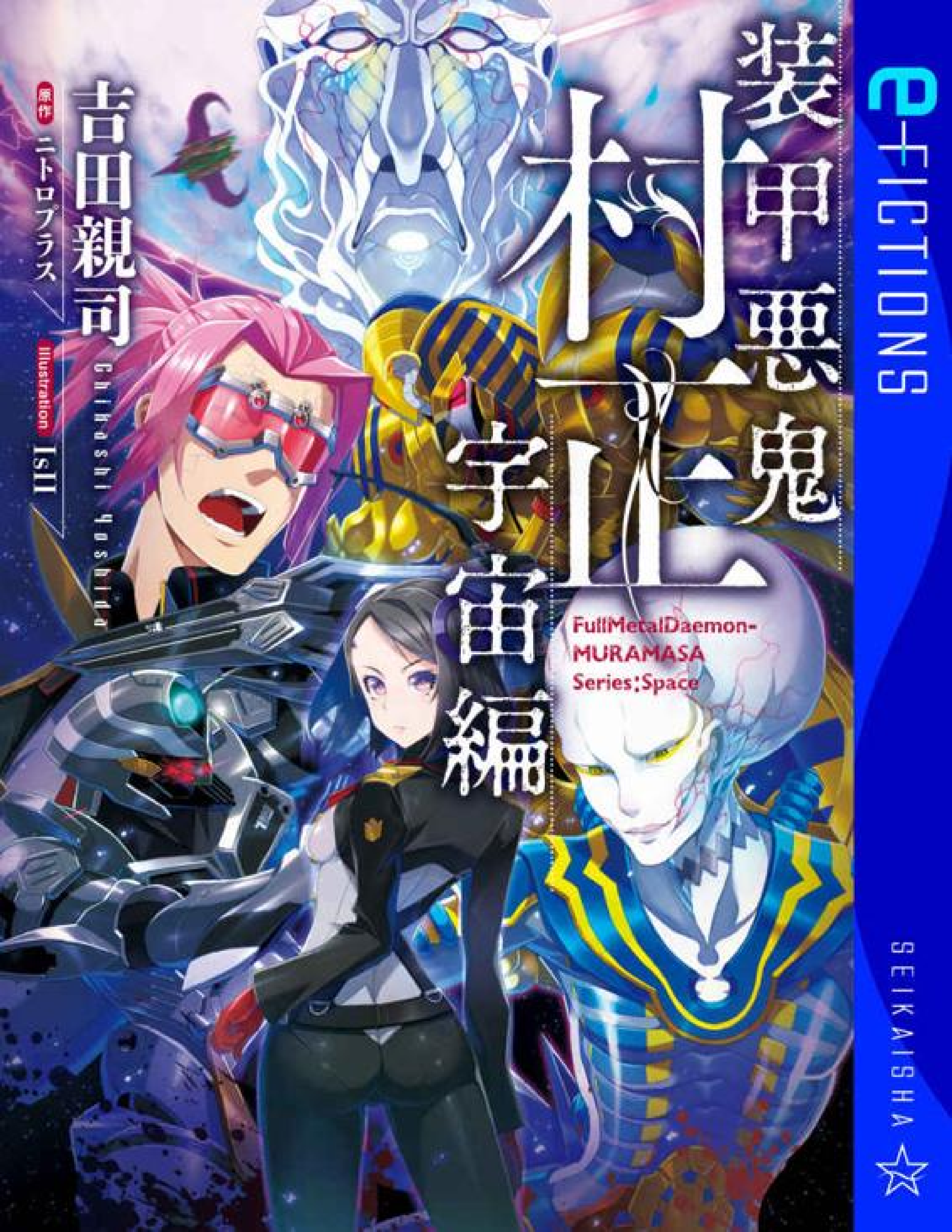

装甲悪鬼村正
宇宙編
吉田親司
Chikashi Yoshida
原作 ニトロプラス
Illustration IsII
FullMetalDaemon-
MURAMASA
Series:Space
e-FICTIONS
SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

星海社
FICTIONS

装甲悪鬼村正　宇宙編

吉田親司

原作／ニトロプラス

Illustration／lsll

星海社

装甲悪鬼村正 宇宙編

FullMetalDaemon-MURAMASA Series:Space

吉田親司
Chihashi Yoshida

原作 ニトロプラス

Illustration IsII

Contents

序章 出エジプト記——THE EXODUS
第一編 自衛騎——THE SELF DEFENCE CRUZ
第二編 即身騎——THE MUMMY CRUZ
第三編 敗残騎——THE LOSER CRUZ
第四編 孤島騎——THE ISLAND CRUZ
第五編 月読騎——THE TSUKUYOMI CRUZ
終章 母なる地、母なる人——THE MOTHERLAND, MOTHER…

《……汝に永遠の栄えあらんことを。大神に栄えあらんことを。

真実と正義の女神マアトの主よ。我、ここに導かれしは汝の業を披見するためなり。

我、いま汝を知り、汝いま我を知る。また我は、汝のもとに集いし四二神の御名を知悉（ちしつ）するものなり。最後の審判の日、罪人の血をすする神々の名を。

我、弑逆（しいぎゃく）の罪を犯さず、他者をして弑逆を命ぜず、出現せる神を追い払いしことなし。

序　章

出エジプト記

——THE EXODUS

1

衛星が惑星を、そして惑星が恒星の周囲を巡る糧（かて）が万有引力であるならば、物語が巡り続ける糧は人の魂に他ならない。

太陽と月と地球があるかぎり、そして世に諸行無常の理（ことわり）が続くかぎり、これは鉄則である。運命と因縁は絡み合いながらも、常に繰り返し、紡がれていく。

であるならば、やはりこの物語も次なる言葉から始める必要があるだろう――。

この日の舞台は、計四幕。

第一幕は、決闘であった。

第一幕は　沈黙であった

舞台となる海沿いの地には群衆がひしめいていた。

その数、約六〇万人。一昨日まで希望に輝いていた表情は、さながら幽鬼のように暗く沈んでいる。空腹と疲労は極に達しており、疑念と恐怖がそれを強烈に後押ししていた。

自由を求め、国を逃げ出した者たちであるが、完全な一枚岩ではなかった。彼らは四つの集団に分かれていた。

飢餓に苦しむあまり、虐げられた国に戻ろうとする者たち。死中に活を求め、闘いを欲する者たち。ひたすら祈り、死後の世界に救済を求める者たち……。

そしていちばんの少数派は、奇跡を信じる者たちであった。己こそ選民なりと思い込む彼らの中にも、沈黙を決め込むだけの神という存在

に辟易する輩が、徐々にではあるが数を増やしていたのだ。

「神の代弁者に問おう。救いは何処（いずこ）に？」

怒気と共に疑念を投げつけてきたのはディサンという名の男であった。かつて奴隷斡旋業者であった経験から群衆の誘導には長（た）けており、あわよくば指導者の地位を簒奪（さんだつ）しようと画策する俗物だ。

問いかけられた指導者はディサンの野心を承知していた。だからこそ、あえて口を開かなかった。弁舌鮮やかな男に言葉で斬りかかるのは無謀すぎる。どう応じても揚げ足を取られてしまい、不安の種を民に蒔くことになりかねない。

「何故（なにゆえ）にお答え下さらぬのか。黙示は神にのみ与えられた特権ぞ。代弁者に過ぎぬ貴公にそれを行使する権利などあろうはずもない。答えられぬ理由はひとつ。この道に救いなどないのだ！」

声量に秀でたディサンの叫びに、群衆はどよめき、重い足を止めた。誰かが悲嘆の泣き声を発するや、悲観的な雰囲気は一気に伝染していった。

それに追い打ちをかける者が現れた。先行させていた物見が、息を切らせながら戻って来たのだ。

「申し上げます！　海は……海は依然として健在なり！　神の御業、いまだ見えず！」

半(なか)ば予期していたとはいえ、不吉な報告を鵜呑みにはできない。神の代弁者は真偽を確かめるべく、傍らで控える黒きジャッカル(ウプウアウト)に命ずるのだった。

「ネイトよ。行くがよい。その清き瞳にすべてを焼き付けてまいれ」

その途端、漆黒の四本足が大地を蹴った。それこそが神の代弁者に授けられたケペシュであった。

ケペシュとは、狭義では三日月の形をした曲刀を指すが、広義では刀剣類全般を示す単語である。
つまりは〝劒冑（ケペシュ）〟だ。
十数世紀を経たのち、東洋では〝劒冑（つるぎ）〟と、そして西洋では〝劒冑（クルス）〟と呼称されることになる最強の甲冑（かっちゅう）であった。
誓約した仕手が装甲する前、すなわち待騎時は独立形態を保ち、仕手の命令に基づいて各個に動く。鍛冶の魂を宿した劒冑（ケペシュ）は高度な知性を持っており、会話さえ可能だ。そして神の代弁者に付き従う劒冑（ケペシュ）は、通常は黒きジャッカル（ウプウアウト）の姿をしていたのだった。
金属質な相手の声が、契約者たる代弁者の脳内にだけ響く。

《承知いたしました。これより私は唯一の務めを果たしてまいりましょう》
鋼の獣(ネイト)は群衆の間を縫うように走り抜け、たちまち遠山の頂に達した。すぐさま報告が頭蓋に響いてくる。
《残念ですが、物見の報告に間違いはございません。マンザァラ湖北部は冠水したままでございます。大人でも歩いては渡れぬ深さと見ました》
凶報だったが、絶望する余裕などない。詳報を求めるべく、ネイトと交信を重ねた。
「懐かしの故郷(クレタ)を壊滅させた地震の余波が海岸を洗ったのだろう。だが、これでファラオの軍に待ち伏せを食らう公算も少なくなった。あとはどうにか海水を引かせれば、徒歩で渡れよう……」
その声は居合わせた民には聞こえない。彼らの表情が土気色に変化し

ていくのを悟ったディサンは、勝ち誇ったように言い放つ。
「そらみたことか！　やはり私が主張したように南回りで〝紅い海〟を渡るべきだった。せっかく金をばらまいて船団を用意させていたというのに！
約束された新天地への最短路を選ばなかったのは、すべて神の代弁者の責任だ。まさかそれを否定はなさいますまい！」
民が渇望する〝約束の地〟への脱出経路は、北方経由と南方経由の二種類が考えられていた。距離的に短いのは南方だったが、神の代弁者はあえて北方に針路を取った。
理由は単純明快。相手の裏をかくためだ。
敵は大都市アヴァリスの東側に二個軍団を集結中だった。彼らが幹線

道路に沿って南進して来たなら、追いつかれるまで半日とかからない。民は文字通り根絶やしにされよう。
いっぽうの北路は道が整備されておらず、荒れ果てている。先年勃発した大地震の結果、海岸線は乱れに乱れ、かつて入り江を形成していたマンザァラ湖は〝偉大な海〟と連結し、半ば呑み込まれてしまった。これではファラオ自慢の戦車隊（チャリオット）も繰り出せない。
しかし潮と風に恵まれたならば海が干上がり、道が開けることもある。その間隙（かんげき）を突き、隘路（あいろ）に挑む決断を下したわけだが、現状では裏目に出たようである。
敵と味方を混同して恥じないディサンは、声高らかに宣言する。
「神の代弁者はこう断言なされたではないか。懸案の〝偉大な海〟は必ずや神の御業によって吹き分けられようと！
現実はどうだ！　海水は引いておらんぞ。この者は虚言を弄し、我ら

を誑（たぶら）かしたのだ。もはや貴様に神の代弁者を名乗る資格などない！　皆の者はまだこのペテン師についていく気か！　この道に救いなどない。地獄へと進軍するも同然なのだぞ！」

一度も土いじりをした経験のない白い指で神の代弁者を指したディサンだが、彼はすぐに発言を悔いることになる。

罵倒した人物は、悟りとも殺気とも解釈できる表情を携え、睨みつけていたのだ。

「……神は我らを見放したのではない。さらなる試練を与えたもうただけ。であるならば歩むべき道はひとつ。神の代弁者たる私は、これより神の代理人として奇跡を発動する。全員、私の側から離れるがよい」

2

これより第二幕。
巨（おお）いなる奇跡と、小さな悲劇が始まる。

原初の水（ヌン）の力よ　この身に宿れ
我の指に触れよ　いざ土と共に生きん
死と再生の御業（オシリス）　ここに開眼す

詠唱が終わらぬうちに変事が出来（しゅったい）した。頂から黒きジャッカル（ウプウアウト）が稲妻の速度で舞い戻ってきたかと思うと、神の代弁者に飛びかかったのだ。

誰が見ても襲撃行動にしか解釈できない所作であったが、実際は違った。仕手に衝突する直前、黒光りする金属生命体の継ぎ目が弾けたのだ。数百の鋭利な断片になったそれは、惑星を巡る衛星のように、神の代弁者の躰を取り巻き始めた。

その刹那――光があった。金色（こんじき）の輝きが一瞬だけ周囲を照らしたかと思うと、光点は神の代弁者へと集約した。畏敬と恐怖を示す声が群衆の狭間に響いていく。それが終熄するのを待たずして、仕手は装甲を完了した。

出現したのは黄金の英雄（かいぶつ）であった。右手に弓を、左手に銀十字（アンク）を持ち、大地に屹立する優艶（ゆうえん）な劔冑（ケペシュ）だ。

戦争と狩猟を司り、王国（エジプト）の守護者と崇められている女神ネイトの芳名を頂戴したそれは、朗々とした口調で、こう発したのだった。

「ディサンに命じる。私はこれより海を切り開く。貴様はその舌端をもって民を先導し、対岸に渡すのだ。さすれば神の代弁者を奸物扱いした罪など忘れよう」
鍛冶師が自らの肉体を心鉄として打ち込んだ劒冑に太刀打ちできる生身の生命体など、地球上に存在しない。生身の奴隷商人は腰を抜かしながら首を縦に振るしかなかった。
そして――飛翔。
装甲を終えた神の代弁者は土埃など微塵も巻き上げず、軽やかに地を駆けていく。一歩ごとに開脚の幅は広がり、飛翔は大きくなった。
ネイトは鮮やかな舞を見せつけるかのように跳ね続け、数分後、海水に爪先を浸す位置に到着した。民の遠き子孫らが地中海と呼ぶことになる海は、かつて湖だった場所を縦横無尽に浸食している。

ネイ流は　ネイこそ流水、水場所を結構集めは侵食しているネ
「ネイトよ。秘奥の陰義を発動させる。すぐ準備を」
《よろしいのですか？　あれの消費熱量は経験なきもの。発動中は身動きさえ難しくなりましょう。敵襲があれば防ぎきれませんが》
「逡巡したあげくに機会を見失うほど暗愚にはなりたくない」
迷いなき仕手の台詞に劒冑も腹を据えた。
《そこまでの御覚悟であれば、もはやなにも申しません。では……流れを、変えます》
直後のことだ。ネイトの総身は青白い燐光に覆われた。目視できない球体の壁が、その周囲に形成されたかと思うと、海面が弧を描いて切り裂かれていく。
「原初の水よ。いまひとたび朝日を産むがよい。そしてこの海を割るのだ！」

の力」
詠唱が終わると同時に、中空に光球が誕生した。まともに見れば失明しかねないほどの輝きが曇天を駆逐した。
それを両手で構えるネイトは、裂帛（れっぱく）の気合いを込めて投擲（とうてき）する。真一文字に海面を走破した光球は、海を一刀両断にし、汚泥を清き砂浜に変貌させた。現出したのは、軍用路に転用しても差し支えないような走路であった。
やがて民の間から崇拝の唱和が始まった。居合わせた誰もが口を揃える。まさしく救世主だと。我々は神の現出に居合わせたのだと。
「愛する民に告げる。吾は救世主に非ず。ましてや神にも非ず。あくまでその代弁者なり。約束の地へ続く道はいま切り開かれた。この機を逃さず、歩を進めよ」
堰を切ったように群衆は希望の道へ向かう。我に戻ったディサンが

荒々しい調子で彼らを急かしているが、それさえあまり必要なかった。老若男女のみならず、馬や羊、荷車の行列によって、海に敷かれた道路は埋め尽くされた。

ネイトはその入口付近に陣取り、身動(みじろ)ぎもせず陰義の発動を続けていた。騎体が発する熱量が尋常ではないため、近づくことはできないが、その脇を歩む避難民は必ず足を止め、深々と頭を下げる。潮気を含んだ大地に平伏する者も少なくない。

彼らにはこう言ってやりたかった。「礼など無用。早く行け」と。

だが、そんな余裕はなかった。陰義の発動と維持には膨大な熱量が必要とされる。五体に人外の力を隠し持つ神の代弁者といえども、長時間は耐えられない。海の道を一分一秒でも持続させるためには、舌を動かすのさえ惜しかった。だからこそ脳内でネイトに呼びかけてみた。あとどれだけ持つのかと。

た。あとどれだけ持つのだと非情な報告が頭蓋に鳴り渡る。

《残念な試算結果を述べなければなりません。現状維持は五五分が限界かと》

足りない。とても足りない。すべての避難民が渡海行動を終えるには、最低でも二時間はかかりそうだ。

「その倍の時間を稼がなければ。私の脳と心臓から熱を奪って回せ。それでも足りなければ大腸も冷やしてかまわない」

《推奨できません。脳が冷えれば思考力が、そして心臓が凍れば四肢が麻痺します。また大腸が体温を一〇度も下回れば、生命活動そのものに支障が……》

ネイトは共に通達を最後まで続けることはできなかった。契緊の脅威

が出現したためであった。
死闘の場数を踏んでいる神の代弁者もまたそれに気づいた。禍々しいなにかが地平線の彼方から突き進んでくる。
《南西の方角から急速接近する物体を捕捉。速度と質量から判断し、剱冑（ケペシュ）以外のなにものでもありません》
慇懃な調子で告げられた悪夢めいた事実に、神の代弁者は眉を歪めるだけだった。逃げる群衆に味方する剱冑（ケペシュ）はこのネイトのみ。つまり敵ということになる。
「騎種の判別は可能か？」
《はい。この波動から推して九割九分九厘の確率で〝ケプリ〟だと思われます》
「残り一厘の可能性は？」

「残る一隻の可能性は」
《我らの出奔後に完成したと聞くケプリの後継機かと》
「どちらにしても嬉しくない相手というわけだね。現状で勝機は？」
《充分にございます。陰義の発動をすぐに止め、機動戦に持ち込んで距離をとれば勝ったも同然です。大弓の狙撃精度で我らに勝てる劒冑など、この惑星には存在しません》
「我が役目は無辜（むこ）の民を約束の地へと導くこと。ここで戦闘態勢に移れば、彼らはひとり残らず波に呑まれてしまう。最初から不可能とわかりきっている提案などまったく時間の無駄。そうは思わない？」
《民の命を守らんとするお心は貴いと思います。ただ、その百分の一で構いませんから、私の命にも重きを置いてはいただけませんでしょうか？》

「……あなたのような劔冑（ケペシュ）が生命体か否かは、神官や鍛冶師の間でさえ意見が割れているじゃない。いいえ、あなた自身にも自覚できていないはず。違う？」

《否定はできません。しかしそれを言えば、己をヒトだと認識できている人間もごく少数なのではありませんか？》

「そのとおり。わたしもそうだし」

《正確には貴女（あなた）は人間ではございません。だからこそ禁忌にも正面から立ち向かえるのでしょうが。あのケプリの仕手は……》

冷酷さを極めたネイトの指摘に、神の代弁者は少しだけ良心の呵責を感じたが、責任感に身を委ねることで、くじけそうな自己を立て直すのだった。

「いまさら言わないで。まずは生き残らなければ、悔いる資格さえ得

られないのだから。では……始めようか。劍青の真髄を披露し、聞き分けのない坊やに折檻を」

《折檻とおっしゃいましたか。現状維持を試みる以上、鞭を喰らうのは我らです》

「勝とうと思えば負ける。そして負けないためにできることがまだある」

《腹案か秘策をお持ちならば、ぜひお聞かせ願いたいものです》

「戦わないこと。ただ、それだけよ」

《話し合いで解決を図ると？　僭越ながらそれは的外れな行動力しか持ち得ぬ弱者の自己正当化にすぎません。人類は有史以来、直面した問題のすべてを暴力で解決してきたではありませんか》

「話などするものか。相手に由がある限り、勝機も色褪せてしまう

「認めようそのため　相手は油断あるまじき　勝機を結集しなけれ

ない。失策で負けてもらえば諍いは消え失せる……」

余裕を示すことが許される時間帯は唐突に終わりを告げた。暴力ですべてを解決せんと欲する輩が、その恐るべき姿を現したのである。

ピラミッドを構成する巨石の運搬に用いられた動輪めいた物体であった。それが物凄い勢いで回転し、突撃して来た。

黄金色の光を乱反射しているが、色彩でより目立ったのは轍（わだち）である。奴が転がりながら通過した地面には、真っ赤な帯が描かれていた。

それは血の絨毯（じゅうたん）であった。染料に用いられたのは罪なき民だ。阿鼻叫喚の渦が遅れてやって来たが、どうすることもできない。

「敵襲！　槍兵は円陣を組み、神の代弁者を死守せよ！」

それなりの練度を維持する近衛部隊が得物を構え、勇敢にも敵騎に穂先を向ける。無駄な足掻きだが、名誉ある死こそ彼らの存在意義で

ある。神の代弁者も孤高な覚悟に水を差すような真似はしなかった。
血塗れとなった敵騎は眼前で停止した。回転中は寸胴な円柱を横倒しにした恰好だったが、格納されている手足が展開されるや、正体は一目瞭然となった。
巨大なスカラベだ。太古より神のひとつとして敬われ、冥界からの蘇りを象徴する聖なる虫である。それがケプリと呼ばれる劒冑の正体であった。
しかし、近衛部隊は敬虔な心持ちなど捨て去り、穂先を敵騎に向けた。もちろん蟷螂の斧に等しい愚行にすぎない。案の定、刃は敵騎に触れると同時に融解し、引っかき傷さえつけられなかった。
すぐさま無謀な行動に対する請求書が叩きつけられた。ケプリの鋭い爪が宙を一閃し、十数人の近衛兵の首と胴はたちどころに分断されて

いく。切り株状になった頸部から血が噴水のように噴き上がり、頭部を失った遺骸は次々に崩れ落ちていった。

もはや闘いとは言えなかった。殺し合いでさえなかった。一方的な惨殺であった。

正視するに堪えない光景だが、神の代弁者はありのままの現実を見据え、こう告げるのだった。

「無益な殺生はそのあたりで止めるのが賢人の道であろう。あなたは人間のことを、生命体としての水準が劣ると公言していたではないか。そんな者どもの命を奪うのは、あなたの矜持に癒えぬ傷を残すのではないか?」

そんな正論にケプリの仕手は動きを止めると、〝金打声(セジェムネベウ)〟と呼ばれる通信を飛ばしてきたのだった。

『お迎えに参上いたしました。多くは申しません。どうか僕と一緒にお戻りを』

3

悲劇は終わらず、
続いて第三幕。

それは当事者にとってのみ喜劇であり、
大多数にとっては単純なる惨劇であった。

沈黙したままのネイトに、スカラベの劒冑（ケペシュ）は言葉を繋げていく。
『偉大なるファラオはアテン神と同様に慈悲深き御方。頭（こうべ）を下げ、言

葉を尽くして詫びを入れたならば、きっと憐憫の情をお示しになられましょう』
相対するネイトは、身動ぎもせずに冷たく返す。
「それができるのであれば最初から出奔などしておらぬ。わたしが戻るべき場所は、民が進むべき場所。約束の地に導けるのであれば、この身が朽ち果てても構わない。どうしても首都アケトアテンに戻れというのであれば、亡骸にして持ち帰るがよろしかろう」
『お戯れを。僕や貴女、そしてファラオは死を超越した存在ではありませぬか。亡骸にするのは不可能です。いざとなればミイラにはできますが、そんな悲しい真似を僕に強いるのは御再考くださいませ。
思いますに、貴女は羽虫と長きにわたって行動を共にした結果、死という単なる生理現象に対し、恐怖心を抱くようになられたのでは？
この羽虫どもは実に欲が深い。死とやらを恐れているくせに、そしてに

この羽虫どもは美と欲に溺れ、死とやらを忘れているくせに、それと直接向き合おうとする気概さえないのですから。連中が身分不相応にも永遠の生命を寄越せと言い出さなければ、ファラオの統治もより穏やかなものとなったでしょうに』

「もしもの話に意味などない。我が夫であり、ファラオでもあるアクエンアテンは、国の根幹を成す民に刃を向け、虐殺を試みた。為政者としては申し開きのできぬ悪事に荷担するのは、わたしの望むところではない」

『仕方がないでしょう。羽虫は繁殖力だけは我らを凌駕しているのですから。このままでは我らは支配層から蹴落とされますし、そもそも地球は増えすぎる羽虫を収容できるほど大きくはありません。適切な数に間引くのも我ら生械体（エジプシャー）の責務かと』

駄目だ。この子は成長すればするほどそっくりになっていく。

[illegible]

あの男に、そしてかつてのわたしに……。

「もう少し大人になっているかと思っていたが、存外に子供のままであった。駄々に興じてやる暇はない。いざ、武をもって雌雄を決するのみ」

その一言にケプリは剣先を擡げた。砂漠の秘所から盗掘した〝セトの骨〟と呼ばれる鉄器を鍛え直し、打擲にも斬鉄にも使えるように仕立てた一振りである。

『無念ですが、僕の舌をもって説得を成し遂げるのは無理なようですね。ならば成長している証を示し、御身をファラオのもとへ引きずっていくのみ！』

神の代弁者は失望した。殺生が始まる予感にではない。見え透いた挑発に簡単に乗ってきた豚児の行く末を、肉親として憂えたのだ。

[illegible]

てに参ります　ネフェルティティさま……それともエジプトを
父上(ファラオ)と共同統治した頃の御名であるスメンクカーラーさまとお呼びし
たほうがよろしいでしょうか？』
「それらはいずれも棄てた名。いまはただのモーセと呼んでもらいた
い。我が息子よ」
『母上。羽虫らの単語などお捨て下さい。そして僕のことは〝ツタン
クアテン〟とお呼びいただきたいものです』
直後、ケプリの総身が揺らぎ、裂帛の波動が四方八方へ放出された。
虹色に染められた騎体が妖しく歪んで見える。
露骨すぎる戦意の発露に、ネイトも闘気で応じた。すでに発動させて
いる陰義を一段階強化する。騎体の表面から蒸気が噴き上がる。
『ネイトの劒冑(ケペシュ)を装甲した母上を見るのは初めてですが、醇美(じゅんび)その

もののお姿です。ただ戦える状態ではありませんね。水を割る陰義を発動したままでは弓を番（つが）えることもできはしますまい。もっとも間合いを詰めさせた時点で、弓は役に立たないのですが』

一四年前、この世に産み落とした生命体は若さ故の傲慢さをひけらかすばかりだ。暴力は好むところではないが、そうした輩に通用する処方箋は暴力だけである。

ネイトは迎撃の態勢を整えるべく、戦弓の弦を片方だけ外し、力強く振った。太い銀糸が空間を切り裂く。そう。まるで蛇の御使いのように。

「これは単なる弓に非ず。太陽神（ラー）が宿敵アポピスを射貫いたウラエウスの得物なり」

『存じておりますよ。いかようにも姿を変えるコブラの化身ではありませんか。ある時は弓に、ある時は鞭に、またある時は小刀にもな

る。我がセトの骨を鍛えた刀でさえ打ち砕くのは容易ではなさそうですな』

「ツタンクアテンよ。訊ねるが、母の陰義がなんであるか見抜いているのか？」

『もちろんです。辰気（しんき）を操っておられるのでしょう。モノとモノが引き合う力を反発させ、海水を左右に切り裂いているだけ。哀れな羽虫たちは、それを神の力だと誤解しているのですね。これより母上さまを斬り伏せ、連中に知らしめてやりますよ。我ら生械体（エジプシャー）こそが神に迫る存在であり、崇拝すべき神聖な対象であることを！』

ケプリの太刀が潮気に満ちた空気を切断し神速で迫る。だがモーセは微動だにしない。それまで沈黙を保っていたネイトが危険を告げた。

《モーセさま。切っ先が来ます。どうしてお避けになられませぬ⁉》

「息子を斃(たお)すのだぞ。その程度の痛みは代価として受け入れねばなるまい……」

ネイトの肩口に刃が食い込む。仕手の技倆(ぎりょう)しだいだが、セトの骨は輝彩甲鉄(オリハルコン)でさえ切断可能だ。耐えきれるはずもない。

誰もが一刀両断にされるネイトの姿を思い描いた刹那であった。

『ぎゃぐごぁきひひひひひひひひひ！』

その叫びは獣に非ず。また人にも非ず。機械仕掛けの弾み車が壊れたような噪音は、避難する民の足を竦ませた。

彼らの視線はケプリに集中する。スカラベの剱冑(ケペシュ)は明らかに異常を来していた。

艶やかに濡れて輝いていた騎体の表面は、粉がふいたように乾き、罅(ひび)

が走り、ささくれだっている。完全に静止したケプリは、背中から濡れた地面に崩れ落ちるのだった。

「ネイトよ。敵騎の心の臓は？　血の巡りは？」

《簡易精査を完了しました。呼吸も脈拍も血圧も皆無に等しい様子です。すでに血抜きが始まっております》

ここエジプトで鍛えられた劒冑（ケペシュ）は、仕手の生命が危機に瀕した場合、己の判断で休眠に入り、完全死だけは回避しようとする。永遠の生命を得るための手段はひとつ。ミイラ化が解答であった。

ケプリの仕手はすでに虫の息だ。かろうじて動く舌を使い、彼は行き着いた正解を口にするのだった。

『……僕は誤った。母上さまは常に簡単な方法を望まれることを忘れ

ておりました。これは辰気ではなく、単なる熱の相転移ですね……』
それが正解であった。装甲通信を極低度に設定し、集約して発信すれば、対象物の分子構造を瞬時にして加熱できる。陰義に指向性を持たせ、海水のみに反応するよう沸点を細工しているため、ネイトに直(じか)に触れないかぎり実害はない。
そして直に触れたケプリには、それ相応の作用が生じたというわけである。
モーセは、自分の思惑どおりに事態が推移したことに安堵しつつも、母を超えられない息子に軽い失望を感じていた。
「あなたはアメン神へ一定の敬意を示しつつも、その奥義を学ぼうとしなかった。太陽神(ラー)の偉大さを理解していれば、熱量で海水を気化させる陰義に行き着いたとしても、不思議はありますまいに」
水分を失い、しおれていく実子へとモーセは続けた。

「そして人体の六割は水。あなたが即死しなかったのは、ひとえにケプリという劒冑（ケペシュ）を装甲していたため。おかげでわたしも子供に刃を突き立てずにすむ。戦わずに勝つ。これぞアメン神の陽報なり」

振り返ったモーセは、横たわったままのツタンクアテンを尻目に、民のほうへと闊歩する。すぐにネイトが、

《念のためにお伺いしますが、トドメは刺さなくてもよろしいのでしょうか？》

と訊ねたが、モーセは淡々と言い返す。

「まだ利用価値がある。追跡してくる敵軍にケプリを回収させて時間を稼ぎ、ひとりでも多くの民を対岸へ渡さなければ。それに……」

《その先はもう結構です。子を殺すのは親として忍びない、とおっしゃるのでしょう》

「ええ。たとえ愚息といえども、ね」

4

最後に第四幕――この日最後の一幕は、最初の幕に倣っての決闘か。
否。
そうでは、ない。
これは処刑であり、鏖殺（おうさつ）であった。
かつて交情（まじわり）を結んだ相手による問答無用の血の宴が展開されていく――。
切り開かれた道を避難民が渡り終えるまでには、結局二時間が必要

だった。
海を割るという虚外な陰義を用いた結果、さすがのネイトも気骨が折れかけていた。仕手であるモーセも脳と心臓から熱量を転用したため、疲弊しきっていたが、それでもなお自騎に鞭を入れなければならなかった。
遠方から嫌な地響きが聞こえてきたのだ。
それは馬を動力とする戦車だけが奏でることを許された戦場交響曲であった。将軍パロが率いるエジプト軍の本隊だろう。剱冑(ケペシュ)こそいないが、手をこまねいていれば避難民など皆殺しにされよう。
「このまま隊列の殿(しんがり)を維持し、東進を続ける。陰義の解除は対岸に渡ってからだ。それまでなんとしても踏ん張るように」
《お心遣いに感謝いたしますが、どうやらもう一戦覚悟しなければなりません。真南から邪悪な気配が急速接近中です。速度から判断し、

飛行物体かと》

「新手の劒冑(ケペシュ)！」

《その公算が高(たこ)うございます。負荷は強うございますが、信号探査を推奨します》

思い切って電波を飛ばし、対象物までの距離や敵速を精密に計算すべし。そうネイトは進言しているが、相手が劒冑(ケペシュ)であれば逆探される危険性も無視できない。信号探査はまさに諸刃の劒冑(つるぎ)だ。

逡巡するモーセであったが、そんな贅沢など許されるはずもなかった。一〇秒と経過しないうちに、敵騎が碧空を切り裂いて飛来したのだった。

総身に炎をまとった火の鳥だ。これは比喩的な表現ではない。あまりの高速ゆえ、空気との摩擦熱で騎体が炎上しているのである。

それが天の一角で静止した。視覚強化を施してあるネイトの眼力をもってすれば、その細部を見極めることは容易だった。
下界を睥睨するやぶにらみの目玉。紅蓮の嘴（くちばし）と翼。水色の頭頂部と輝く角（つの）。あらゆる楯を引き裂く鉄の爪。上部に屈折した両脚に秘された推進器。
もはや電波を投射する必要もなかった。あんな芸当が可能な劍冑（ケペシュ）はこの世で他にない。
《モーセさま。あれは……》
「考えたくはないが〝マアト〟であろう。まさか奴（ファラオ）が直々にお出ましとは」
宇宙秩序そのものを意味する女神（マアト）は巨大な翼を携えた姿で描かれることが多い。その名を頂戴した劍冑（ケペシュ）もまた怪鳥を模した姿をしている。

モーセが知るかぎり、その仕手はあの男だけだ。
状況は刻一刻と悪化していたが、まだモーセは絶望していなかった。
あの男なら、わたしの捕縛よりも息子の救助を第一に考える。それにパロ将軍の戦車隊は海の道を渡り始めていた。ここでわたしを屠れば味方が波に呑まれよう。
これで時間は稼げた。少なくとも民の大部分が逃げ出せるほどには。後は交渉しだいでどうにでもなるはず。奴(ファラオ)はまだわたしに未練があるのだから……。
モーセは確信した。ここに出エジプトは成ったと。

だが、甘すぎる目論見は木っ葉微塵に砕かれた。モーセは忘却していたのだ。肌を合わせたあの男は、目的のためには手段を選ばないこと

を。
《マアトに陰義の発動を確認。撃って来ますぞ！》
凝視するモーセは目撃した。空中に静止していた敵騎の嘴が裂ける場面を。
喉奥から吐き出されたのは朱色に輝く火弾だった。一発だけではない。首を器用に振り回すと、正反対の方向へと次弾を放った。
「まさか！　味方ごと屠る気か！」
《そのようでございます。第一射は避難民へ、第二射はケプリに向かっております！》
究極の二択を迫るつもりだ。民を助けるか、子を助けるか。好きなほうを選べと。
モーセは迷わなかった。騎体を一気に跳ねさせ、避難民へと突き進む火弾の前に、自分の身を曝（さら）す。その途端、経験したことのない衝撃が

両膝を襲った。

痛くはなかった。熱波と冷気が同時に押し寄せ、脚の感覚が消え失せた。

《大腿部装甲に甚大な裂傷。頸骨が複雑骨折。動脈、静脈ともに断絶。短時間での治癒は不可能。両足を膝下で切断のうえ、止血を試みます》

残酷すぎるネイトの進言だが、モーセは衝撃を感じなかった。そうしなければ生命活動維持のため、ミイラ化が始まってしまう。ネイトは他に方法がないと判断したのだろう。

「すぐにやって。ファラオ自慢の〝アテンの怒り〟を喰らい、足がなくなった程度ですんだのは幸運。そう思わなければ」

《仰せのままに。足の代替品などいくらでも用意できまする。まずは生き延びましょう。それこそが勝利なのですから》

剱冑（ケペシュ）には自己修復の機能がある。仕手が深手を負った場合には、まずもって治癒に注力する。特にネイトはその能力に秀でていた。脳内に快楽物質を流し込んでいるのか、両足を失ったというのに、痛みはまるで感じない。薔薇の風呂に入っているかのような快適さが下半身を包みこむ。

そして――。

うたが聴こえた。
それは海の道が閉ざされる波の音だ。
うたが教える。

数千のエジプト兵が海に呑まれ、その命が潰えていく現実を。
おびただしい数の悲鳴と怒号が溢れ、瞬時に消えた。発動していたネイトの陰義が消失した以上、それは当然の帰結であったが、事実を認めたところで大勢を死へと導いた結果責任は残る。
見届ける義務を痛感したモーセは、視界を欲し、仰向けに倒れていた躰を起こし、腹這いになった。
その直後であった。神の代弁者は見たのだ。頭上で静止しているマアトの姿を。
巨鳥（マアト）がいままさに骸（むくろ）を啄（ついば）もうとしている。贄にされようとしているネイトに向かい、金打声（セジェムネベウ）が投げかけられる。
『どうして息子ではなく、羽虫どもを助けようとしたのだ⁉』

重低音の詰問に、モーセは答える。
「知れたこと。あなたが愛息を殺(あや)めるはずがない。ならば確実に命を奪われる者を助けるのが常道。違いますか？　我が背(せ)の君(きみ)よ」
『見透かされるのは面白くないな。我が后(きさき)よ。お前が羽虫の命を優先した事実は息子にも伝えよう。さすればお前を母と呼ぶこともなくなる。
愚母の暴走を止められぬとは、我が息子ながら情けない。新たな主神アテンを名に据えることはもう許されぬ。古めかしいアメン神こそが息子には相応しかろう。余はファラオとして改名を命ぜねばならん。
〝ツタンクアテン(生けるアテンの姿)〟から〝ツタンクアメン(生けるアメンの姿)〟へな……』
その後、数千年の長きにわたり〝ツタンカーメン〟として語り継がれる人物の名が決定した瞬間であった。
かつて彼を産み、神の代弁者として彼を誅したモーセことネフェル

ティティは、まだ舌戦を諦めなかった。

「人間のことを羽虫と見下すのはおやめください。あの子もそう呼んでいましたが、悪い教育だけは熱心ですのね。だからこそ味方を殺し、捨て駒にしても恥じぬのでしょう」

『知らぬとは言わせぬ。余の劔冑（ケペシュ）にかけられた誓願は〝多殺多生〟なのだ。多く殺める者こそ、多くの命を救う資格がある。ならばこそ数限りなく命も奪おう。一人でも多く生かすために』

「殺生の理屈にはなりません。あなたに熟慮を望みたい。人間はすでに個体数で生械体（エジプシャー）を凌駕しています。いくら殺そうとも天秤が我ら有利に傾くことはありません。どうか認めてください。この惑星の主はもはや彼らなのです」

眼前に浮遊したまま、マアトは発した。

『だからこそ羽虫なのだ。個体数でいえば昆虫こそ地球の支配者に他なるまい。繁殖力で我らは敗れた。それだけの話よ。増える数で歯が立たないのであれば、向こうを削るしかあるまいな。羽虫どもが地球を覆い尽くす前に』

「私の祖国(アトランティス)を沈めたように、ですか」

『いかにも。クレタとサントリン島を海没させたのはその試験に他ならない。月神の劒冑(コンスケペシュ)は我が意のままに動くことが実証された。潮を自在に操れる以上、地を水没させる権限はこの手にある。輝彩甲鉄(オリハルコン)さえ獲得できれば、あんな島など無用であるしな。

しかしながら同じ衰滅ばかり繰り返すのは滅びの美学に唾する行為。破壊者たるもの、常に新たな蹂躙(じゅうりん)の術(すべ)を模索しなければならぬ。それに……』

珍しく間を空けてから、相手は続けた。
『いささか飽き、疲れもした。もしも息子へ向かう火弾の前に身を投げ出す母の姿を見たならば、余も生械体（エジプシャー）のファラオとして羽虫の間引きを実行したろうが、それもやめることにした。羽虫どもに新たな存在価値を見出したものでな』
「なぜそこまで人類を憎まなければならないのです？　彼らが不完全な生命体であることは認めますが、我らとて不完全ではありませんか」
『そのとおり。死を超越した生械体（エジプシャー）とて闘いは根絶できぬ。父と母と子。社会を構成する最小単位でさえ不和は絶えん。我らが完全体となるには踏み台が必要だ。
羽虫……いや、人間とやらに存在価値があるとすれば、生械体（エジプシャー）を一枚岩とする〝天敵〟としての役目を果たすこと。それのみであろうよ』

ファラオの言い分は物騒であり、意外なものであった。
「外敵を造りあげ、種族の結託を図る。政治の手法としては下策の部類でしょうに。また剣冑（ケペシュ）を持たず、哀れなまでにか弱い種族が天敵になれるとは思いませんが」
『そうだ。だから待つことにした。何千年でも、何万年でもな。幸いにして時間は我らにとって信じるに足る味方。今後、生械体（エジプシャー）は種をあげて休眠期に入る。人類が天敵たる力を身に付けるまで』
「何処（どこ）で眠ると？　王家の谷ですか？　ピラミッド？　地球の技術ではそんな長期間持つ物質は作れませんが」
『そうだ。こんな騒々しい惑星では安眠などできぬ。我らが安息の地とするのは、冥府と現世の狭間にある冥王（オシリス）の星だ。
時機が到来するまで地球は羽虫どもに預けよう。連中が重力の軛（くびき）を断

ち切り、大気圏を抜け出すのが頃合いであろう。月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）がそれを察知するまで、我々は待つ。そしてもういちど試みる。宇宙の終焉に立ち向かえる生命体は我ら生械体（エジプシャー）のみ。それをわからせてみせよう』

「再考の余地はないのですか。我が背の君……アクエンアテンよ」

かつてアメンヘテプ四世を名乗り、現在はアクエンアテンと名を改めた怪人は、恨みのすべてを吐き出すように告げた。

『ない。余は妻に捨てられた男として、潔く去る。このような地になど、このような惑星になど、もはや未練などない！　あろうはずもない！　お前は王にでも皇帝にでもなるがいい。羽虫どもを導くのが望みなのだろう。

さらばだ。我が妻であった女よ。もはや二度と会うこともあるまい！』
マアトは静止したまま一八〇度旋回し、空へ舞った。爆発的な加速で間合いを取ると、そのまま海中へ突っ込み、数秒も経たぬうちに再浮上する。その爪の先に抱かれているのはケプリの残骸だ。父は敗残兵となった息子を回収したのだ。
怪鳥の剣冑（ケペシュ）は、スカラベの剣冑（ケペシュ）を抱いたまま、高度を上げていく。その向かう先には、遠近感を狂わせるなにかが浮いていた。
モーセにはすぐにわかった。あれはアケトアテン（アテンの地平線）だ。アクエンアテン自らが建造させた人工の、そして究極の都だ。
生械体（エジプシャー）のすべてが居住する球形都市が、辰気に逆らって浮上してい

く。
輝彩甲鉄（オリハルコン）と焼き煉瓦。新旧の素材を混合させて生まれた奇怪な街であった。前者はネフェルティティの祖国（アトランティス）が海没する前に回収した希少品であり、後者は生械体（エジプシャー）が羽虫と呼ぶ奴隷に焼かせた代物であった。

アクエンアテンの操るマアトは光点となり、その一角に着地すると、姿をくらました。都市はそのまま遥かな高みへと昇り、やがて見えなくなってしまった。

「……重力に叛逆（はんぎゃく）して、街ごと地球を棄てる。我が背の君らしき選択だこと。棄てられたのはわたしだったのかも知れないわね……」

それを問いかけだと解釈したのか、ネイトの劒冑（ケペシュ）が静かに応じた。

《失礼ながら、それは違いましょう。モーセさまはアクエンアテンさまを見限ったわけですが、ファラオは逃げただけでございます。気を

ミを見限ったわけではありません、ミラは逃げただけでございます。気をつけなければならないのは、見限った者は絶対に戻りませんが、逃げた者は未練がましく戻ることがままあります。どうかそれをお忘れなきよう》

5

うたが聴こえた。

それは民が発する感喜の叫び。生を喜ぶ者たちはネイトを取り巻きながら口々に言う。救世主が悪魔を追い払ったと。

「どうやら……まだまだこの身は死ねぬらしい」

疲労感、開放感、爽快感、そして軽い絶望を同時に抱いたモーセは、

治癒が部分的に完了した両足をさすりながら、こう訊ねるのだった。
「教えてほしい。我が剱冑（ケペシュ）よ。愛すべき人類を導くためには、そして遠き未来に再来するであろう生械体（エジプシャー）を防ぐためには、なにをしたらよいのだろうか？」
《回答は単純にして明快でございましょう。血と肉と魂を代価にお打ちなされませ》
「いったい、なにを？」
《このネイトに代わる真の剱冑（ケペシュ）を……》

その後の地上を語ろう。
ネイトという献身的な剱冑（ケペシュ）によって一命を取り留めたモーセは、民を導き、一二〇年の生涯を終える前にシナイ山に籠もった。

自らが鍛冶師となり、一領の劒冑(ケペシュ)を打つために。

そして完成した妖甲こそ〝破邪十戒(デカログス)〟である。

だが、歴史上初の〝真打劒冑(ブラッドクルス)〟と見なされるべき業物が起動するまでには、それから三三〇〇年もの歳月が必要であった――。

これは英雄の物語ではない。

己の意志に反し、英雄たる運命を課せられた犠牲者たちへの鎮魂歌である――。

第一編

自衛騎

—— THE SELF DEFENCE CRUZ

1

この世の因果の出発点があるとすれば、それはエデンの園だ。絶対的な管理下における安寧と、独善による叛逆。結果としての失楽園（パラダイスロスト）は、規格外の絶望とわずかな希望をもたらした。寛容と平等。不寛容と不平等。相反する要素が生み出す混沌（カオス）によって、エデンの価値は左右される。楽園追放という憂き目に遭った者とて必ずしも嘆く必要はない。破廉恥な女（イブ）が林檎（りんご）を囓った瞬間から、そこが楽園か地獄かなど、当事者でも判断がつかなくなっているのだから。

ひとつだけ言えるのは、エデンの園が没落した原因である。悪魔という外敵の侵入を許したことだ。その結果、内部から腐り果て、気づい

、分離の優先を許したことが、その結果、内部が腐り果て、気づいた時には手遅れとなっていた。その応報を繰り返さないためには、鎖国めいた封鎖が有益かも知れない。

そして二一世紀中葉、人類は天空に新たなエデンを手に入れていた。

地球の引力に支配された唯一の衛星がそれだ。

月――直径三四七四キロに及ぶ天体は、選ばれし者だけが居住を許される楽園(エデン)として、地を這う民から羨望の眼差しを集めていた。

楽園に選ばれなかった不運な者は、月世界の人々を心から羨んだ。犯罪も疾病も貧困も皆無。平均寿命は地球の倍はあり、パートナーに不自由する心配もいらない。勤労の義務こそあるが、常に賞賛を浴びる職務であれば、苦にもなるまいと。

それは誤解であり誤認であった。憧れの地に居する選民(エリート)にとって、月

はけっしてエデンではなかった。
むしろ逆である。月は地球(エデン)を死守するための最後の砦であったのだ。
そして――廻る因果の終着点を見つけ出すために必要なのは、やはり英雄の姿であった。

だが、これは英雄の物語ではない。
それでも英雄はやって来る。

＊

「独行無人探査機(ドローンプローブ)の反応が消えただと？」
疑念を無遠慮に声色に乗せたのはマルチネス・コーランド中佐であっ

た。
「芳しい状況ではないな。通信途絶からどれくらい経つのだ？」
監視網を管轄する東南アジア系のアイトー・サムプラヤ大尉が、それに応じた。
「最初の兆候は一一三八秒前であります。ＬＵＨ３４１７号が突如沈黙したため、バックアップのＳＥＮ５２４１号が自律判断のもと急行しましたが、そちらもロストしました。原因は鋭意調査中です」
唇を歪め、腕組みをしてからコーランドは先を促した。
「わからないという事実がわかったところで手の打ちようがない。もっとも可能性の高い推論でも述べたまえ」
索敵士官のサムプラヤが、あらかじめ用意していた回答を口にする。
「前例から探査機の誤作動と考えるのが妥当かと」
「そうか。本職としても貴官が責任をもって下した判断を支持した

い。上層部にその線で伝えるようにリーフレットを作成しよう。もちろん貴官の名前入りでな。信頼できる報告書の積み重ねこそステップアップの王道。本職のような戦術管制士官のポジションも近くなるぞ」

甘言を述べたコーランドだが、本気でそんなことを考えていたわけではない。失敗した場合に責任を押しつける相手を準備していただけである。

コーランド中佐は静かの海（マレトランキリタス）の北端に位置するH・G・ウェルズ基地の防空副司令官であった。

月面独立都市ハイ・ポーツマスに隣接するこの基地には、マス・ドライバーの発射装置が一五基も据えられ、交通の要衝となっている。

STARMY（スターミィ）こと連盟航宙自衛軍にとっても重要度は高い。その防空

副司令官ともなれば、輝かしい戦果をあげている軍人でなければ就任できない。

しかし、コーランドは違った。過去に大きな失敗をしていないという一点が評価され、このポジションに座ることを許された俗物にすぎないのだ。ここ半世紀以上、無茶と無理を重ねて発展してきた月世界では、人物月旦は悪しき減点方式に回帰しつつあった。

責任回避能力にのみやたら長けているコーランドは、なおも地歩を磐石なものとすべく続けた。

「ここ半年の間に地球から納入された探査機だが、故障が許容率を超えているとの報告も受けている。このままでは職責を全うできない。製造元はどこだ？　場合によっては圧力をかけてでもメーカーを変えさせてやる」

すぐさまサムプラヤが答えた。
「昨年までは大和(ヤマト)国の田村(タムラ)甲業製でしたが、今年度からムーンワン・カンパニー製の新型になっております。商品名は〈ザ・ゲイシャ〉であります」
「ふざけた名前だ。製造元は零細企業に違いあるまい。どこの国に本社がある？」
「新大陸(ネオブリテン)西海岸のシリコンバレー」
そこでコーランド中佐は押し黙った。部下の回答が皮肉に聞こえたからであった。
「そうか。君はマレー半島の出身だったな。だから新大陸(ネオブリテン)などという死語を用いても恥じないのだ。その表現は古いぞ。以後は亜米利加(アメリカ)もしくは合衆国と呼ぶようにせよ」

コーランドはいわゆる新大陸独立派(アメリカンドリーマー)の両親から生まれたアメリカ人であった。
彼の祖国が五度目の独立戦争で形ばかりの勝利を収め、念願の独立を果たしたのは一九七六年のことである。あれから七〇年近くが経過した現在でも、合衆国は戦後の荒廃から立ち直れていない。主要都市の多くに大英帝国製の鍛造雷弾(フォージド・ボム)を叩き込まれた結果、国土の大半は焦土のままだ。
人口だけは爆発的に増えたため、労働力の単価は安く抑えられており、近年は大量生産品の調達に経済の活路を見出している。残念ながら品質は褒められたものではなく、粗悪なレベルに終始しているのが現状だった。
ここで問題になっている独行無人探査機(ドローンプローブ)は、開発当初こそ超精密機器

ここで問題になっている[illegible]衛艦の探査機は、開発当初こそ超精密機器であったが、毎年のように小型かつ安価になっていき、やがて耐久消耗品と見なされるまでになった。
アメリカ製のそれは価格競争で大和国をねじ伏せたのである……。

シャム王国出身のサムプラヤ大尉は、静かな口調でこう言った。
「イエス・サー。以後、注意いたします。それにしてもムーンワン・カンパニーは詐欺まがいの悪徳企業(ブラック)ですな。東南アジアで部品を製造させ、本国で組み上げる。大和国の田村甲業とまったく同じことをやっているのに、これほど安定性に差が出るとは。
やはり国民性の問題でしょうか。新大陸(ネオブリテン)……いえ、失礼……合衆国(アメリカ)に自衛の一端を担わせるのは、時期尚早かと判断します」
不愉快な現実の指摘に苛立つコーランドだったが、それを咎めること

はできなかった。対処せねばならない事態が出来したのだ。
円卓に縦横表示されているホログラムが一斉に色を変えた。サムプラヤ大尉が表情と声を引きつらせた。
「ＳＲＴ方面の独行無人探査機（ドローンプローブ）十二基が同時に通信途絶！」
「なんだと。メイドイン・アメリカが劣化品ぞろいだとしても、それだけの数が故障するものか。運用システムに根本的ミスがあるか、さもなければ不穏分子のサボタージュだ。十字軍（クルセイダーズ）の連中は出しゃばりだからな」
状況を都合よく解釈するコーランド中佐だが、索敵士官はそれを否定した。
「違います。明らかに爆発反応です。ＣＣＱ９１０号から動画のデータが来ました。いま表示します」

サムプラヤが宙で指を回すと、切り取られた宇宙空間が卓上に再生された。閃光と煙が連続して出現し、立体動画がスローに移行する。三角錐の独行無人探査機（ドローンプローブ）が割れ、砕け、散りゆく様子がこれでもかと言わんばかりに展開された。

動画にはその犯人も明瞭に映っていた。

球形の光体だ。ボディの色は金銀銅。それらを交互に光らせているのも無気味だが、なにより悪趣味なのは片方の半球から生えた十数本の触手だ。それが鞭のようにしなり、独行無人探査機（ドローンプローブ）を打ち据えていたのだ。

メカニカルな海月（くらげ）といった印象を与える未確認物体だが、コーランドには正体が看破できた。過去に出現したそれと同一だったからである。

「うしま　三戒体（エジプシャー）つ　ー

「あれは……生物体の……」

「間違いありません。マッチング作業完了。アテン・ボールです。騎数は確認できるだけで一二体！」

「まずい。遂に本格侵攻というわけか」

生唾を呑み込むコーランドであった。それも当然だ。この七五年間にアテン・ボールは数え切れないほど地球圏に出現しているが、いずれも単騎であった。複数が確認されたのは今回が初めてである。

多大な犠牲を払い、撃破（その大半は自爆）と撃退（実際は自主的な帰還）を成し遂げてきた連盟航宙自衛軍（スターミィ）だが、たった一騎に苦戦したのも事実だった。そのアテン・ボールが一二体同時に姿を見せたとなれば、尋常の方法では対処できまい。ここはとっておきの精鋭を投入すべき場面だろう。

コーランドも軍人としての皮膚感覚でそれを理解したが、思い切るこ

とは難しかった。防空副司令官という職務にはあるが、階級は中佐にすぎない。望ましくない切り札を使い、後から責任を押しつけられては厄介だ。

「ティコ防空総司令部に緊急連絡。月世界全土に非常警戒を発令するよう勧告せよ。それから、いちばん早く出せる竜騎兵（ドラグーン）兵団は？」

「第八二空間猟兵旅団（ダークサラマンダー）の第二大隊（セカンド）〈マジカルアベンジャーズ〉が静かの海（マレトランキリタス）で実弾演習中であります。数打劒冑（レッドクルス）の竜騎兵甲二五式〝回天（かいてん）〟で構成された部隊です」

無表情を保つのに苦労するコーランドであった。それは訓練教官時代に、彼自身が所属していた戦闘部隊だったのだ。

当然、内情は熟知していた。はっきり言うと二線級の訓練隊だ。装備品が一六年前から更新されていない点から推して、実力の大幅な向上

は考えられない。
「よろしい。すぐに月軌道上に展開させよ。タートル・ブースターとドッキングし、すぐに敵勢力へ進軍開始だ。接触までの予定時間は？」
演算結果をサムプラヤ大尉が報告した。
「過去に収集したアテン・ボールのデータから推定し、約六〇分かかります」
「できるだけ急がせろ。時間は人類にとって必ずしも味方ではないのだから」
深遠なる真理をコーランド中佐が口にした直後であった。司令部の扉が重々しく開き、老婆の声が鳴り響いた。

「急ぐのであれば、どうして精鋭を投入しないの？」

視線を振り向けると、想定外の人物が入室したところであった。

彼女の名はヘローデ・C・コーセィ。独立都市ハイ・ポーツマスの市長を務める傑物である。

年齢は七五歳だが、月生まれで月育ちの人間の大多数がそうであるように、ヘローデもまた若々しい。重力が地球の六分の一の世界では、心肺機能への負荷が小さく、必然的に哺乳類は長命となるのだ。彼女は地球では四〇代といっても通用する風貌だった。

月世界の人間にしては小柄なほうだが、背筋はぴんと伸びていた。長い銀髪を編み上げ、軍帽の真っ赤なベレーに押し込んでいる。眉は切れ長で、両眼は牧羊犬のように鋭かった。薄い唇と四角い顎が意志の強さを物語っているようだ。

なによりも老いを否定しているのは声の張りであり、その舌鋒であっ

た。
「繰り返して聞くわ。なぜ十字軍（クルセイダーズ）に出動を求めないの？　こうした場合に率先して死んでもらうために、常日頃は多少の腕白（わんぱく）も大目に見ているのよ。いま投入しないでいつ投入するのよ」
コーランド中佐が敬礼をすませてから、
「ですが市長、連中は愚連隊（ラフネックス）そのものです。仮に勝利を得たとしても、さらなる権益拡大を要求してくるでしょう。政治的に面倒な状況を招くと、市長閣下のお立場にも差し障りが生じかねませんぞ」
と言ったが、ヘローデは意に介さず続けた。
「面倒な状況ですって？　月が陥落したら面倒だと嘆く自由さえ消え

失せるのよ。まずは全力で生き残るほうに舵を取るのが建設的でしょうに」
「状況は流動的なのです。決め打ちをするには危険すぎます。幸いにも接触まで小一時間ありますから、環境を調えることが可能です」
「面白いことを言うわね。環境を調えるというのは、十字軍（クルセイダーズ）を出撃させるだけの条件を満たす、ということだと解釈して間違いないかしら」

「左様でございます。正規軍の第八二空間猟兵旅団（ダークサラマンダー）で片がつけばそれでよし。手に負えない場合は十字軍（クルセイダーズ）を用いる強力な動機づけになります。まずは敵情を把握しませんと」
「複雑な、それでいて非情な任務ね。練度に劣る正規兵は全滅するかも知れない。きわめて優秀な指揮官を用意しておかなければ。ったくこんなが

を知れない。せめて優秀な指揮官を用意しておかなければ。わたしが推薦してもかまわないかしら？」

ローマ帝国がそうであったように、月世界は都市国家に近い。人口が限られている世界において、指導者は様々な責務を兼ねることが多いのだ。特に政治家、科学者、軍人の垣根は無きに等しい。

ヘローデもハイ・ポーツマス市長であると同時に、複合装甲素材の研究では第一人者であり、連盟航宙自衛軍（スターミィ）中将の位を持つ軍人でもあった。

発言には重きを置かれて当然だ。一介の中佐でしかないコーランドに、逆らう権利などありはしなかった。

「市長、いえ……中将閣下が、H・G・ウェルズ基地総司令官として命令を下されるのであれば、本職は従うのみであります。人選を願え

るとは誉れの至り。先鋒を任される光栄ある士官は誰でありましょうか」
「あなたよ。マルチネス・コーランド中佐。直ちに出撃準備に入りなさい」
厄災が突如降り注いで来た現実に気圧（けお）されながらも、コーランドは反論する。
「お言葉を返すようですが、本職はその適任ではないと判断いたします」
「わたしの記憶を甘く見ているようね。中佐は訓練教官として第八二空間猟兵旅団（ダークサラマンダー）に在籍していたじゃないの。できないとは言わせないわ。指揮官先頭を忘れた軍組織には崩壊する未来しか待っていないのよ。わかったらさっさと剱冑格納庫（クルスハンガー）に行きなさい。ここの指揮は

わたしが引き継ぎます」
あっけに取られたコーランドを尻目に、ヘローデは索敵士官に命じた。
「神酒（マレネクタリス）の海のピレネー基地（ベース）に連絡。十字軍（クルセイダーズ）のフォルサ准将に出撃要請を出すの。ありとあらゆる手段を用いて侵入者を撃退するように念を押して」
サムプラヤ大尉が緊張した声で返した。
「諒解しました。可能な手段をすべて行使するように文面を組みます」
「可能な手段だけじゃ駄目よ。不可能と思える手段も行使させるように命じなさい。全戦力を惜しみなく注ぎ込まないと、この危機を切り抜けることはできないわ。人類は時間を味方につけることに失敗しているのだから……」

いそのかなら」

自らが空気と化していく現場に居合わせたコーランドは、主役の座についたヘローデ・C・コーセィに背を向けながら、自嘲気味に思うのだった。

どうやら俺の居場所は消えたらしいと……。

2

《……奇妙な現実だが、月世界に存在する基地（ベース）の来歴は明瞭になっていない。

公（おおやけ）には、人類が初めて月に降り立った一九八九年のアマテラス計画が発端だとされているが、懐疑論者でそれを信じる者など誰もいない。

い
大和国と大英連邦、そしてドイツとの合弁プロジェクトが成功を収めたのは歴史的事実である。それ以降、基地開発が爆発的な加速度を示したのも疑う余地はない。
しかしながらペースが速すぎるではないか。月面到達からわずか一〇年後の一九九九年には、三一一名の人員を抱えるアルファベット基地が稼働を始めているのだ。
劔冑（つるぎ）を宇宙服に転用するという「瓢簞（ひょうたん）から駒」的なアイディアが実現した成果であると喧伝されたが、それだけであろうか？　大衆には公表できない真相が封印されてはいないだろうか？
……などと記せば、良識を売るほど持ち合わせている御仁から、またしても小言を頂戴するかも知れない。「予言者気取りめが。根も葉もない噂話に尾鰭をつけて人心を惑わし、小銭を稼ぐ気だな。証拠はあ

るのか！」と。

生憎と確証は持ち合わせていないが、もう知らぬ顔はできない。全地球市民を愚弄する隠謀の香りをかぎつけたからには、沈黙は罪であろう。

考えてみるがいい。月基地だが、その建設の理由も曖昧ではないか。常温核融合を可能とするヘリウム3を露天掘りするためとの説明も、どこか空々しく聞こえてならない。永遠のクリーンエネルギーをもたらすはずの核融合は、四半世紀前からずっと実験段階のままではないか。

またロケット工学的な見地から月開発に疑念を発する声もある。

琉球の嘉手納（かでな）射場から定期的に打ち上げられている〈雷蝶（らいちょう）〉型は約

一二時間で月軌道まで到達可能とされている美しきロケットが、積載量と推進剤の比率から逆算し、それは無理だと主張する数学者も存在する。

そうした声を妄想だと聞き流すのはたやすい。しかし国際宇宙ステーション〈グリーン・ドラゴン〉も実際の大きさは公表値の八倍であった。政府から入手できる情報を無邪気に信じるほど、大衆は子供ではないのだ。

また月という天体自体が奇妙な衛星である事実も、あまり知られていない。

その半径は地球の四分の一もあり、太陽の視直径と同一である。約三八万キロという遠距離を公転しているのも異例中の異例だ。そのいっぽう密度は信じられないほど軽く、内部に空洞が形成されているという説さえある。

う認されてある
そもそも地球型惑星は衛星に恵まれていない。水星や金星には存在せず、火星のフォボスとダイモスは極小サイズだ。地球は分不相応な月を持っていると言い切ってよい。
ただ、ここで類似性を指摘しておくべき天体がある。
冥王星（プルート）と衛星カロンがそれだ。カロンの直径は冥王星の半分にも及ぶ。準惑星に格下げされたとはいえ、冥王星は地球型惑星に極めて近い。その軌道と誕生の経緯を研究すれば、地球の月の成り立ちも説明できる。そう主張する科学者もいるようだ。
残念ながら冥王星は地球からは約五〇億キロも離れており、精緻な観測は不可能だ。今世紀初頭から何度も探査機を発進させているが、いずれも途中で通信を絶っており、データ獲得には至っていない。
木星から海王星までは、いずれも無人探査に成功しているのに、冥王星

水星から海王星まではいずれも無人探査に成功しているのに、第三星だけ失敗続きなのも不自然な話だが、現状で地球の月の特性を解きほぐすのには寄与できない存在だ。

今夜も月は謎を秘めたまま天空に輝き続けている。そこには知能、体力、経済に恵まれた九万人のエリート層が生活しているが、地球に降りてくる情報は泣けるほど少ない。

筆者はここで奇矯な説に飛びつく愚をあえて冒してみたい。月基地(ベース)の来歴を明瞭にするためには、一般に伏せておかなければならない想定外の要素が介在している。そう考えるとすべての辻褄(つじつま)が合ってくるのだ。

一〇年という短期間で基地開発を成し遂げたとすれば、無理に無理を重ねたはず。そうしなければならなかった理由はひとつしか考えられない。

敵の登場である。
国際統和協栄連盟の統率下、形ばかりとはいえ平和を享受している世界だが、それを成し遂げたのはなんであろうか？

素直に人類の叡智だと解釈したいが、それは難しい。ここ一世紀を顧みても、大和国の首都圏を瓦解させた内乱や、第五次新大陸(ネオブリテン)独立戦争、中東対欧州の宗教闘争など、人類は同族間での殺戮を放棄できていない。
なのに月開発は完璧なまでの国際協調が実現している。地球圏における騒乱は、一種の出来レースなのではないかと疑いたくなるほどだ。
ここに外宇宙からの侵入者という要素が介在していると仮定すれば、すべての謎は一気に解ける。

戦後から目撃件数が多発している未確認飛行物体――UFOの存在が
そのキーワードとなろう。近年ではなぜか〝アテン・ボール〟と呼ばれることの多いそれは、邪悪な宇宙人の尖兵ではなかろうか。
情報源は秘匿させていただくが、月基地（ベース）の開発は一九六〇年代初頭にスタートしていたとする情報さえ存在する。それが事実なら、我々は八〇年もの間、隠蔽工作の犠牲者であり続けたわけだ。
筆者は勧告したい。月から目を離すなと……》

五鳥免力（ごちょうめんりき）　『月面基地は昔からあったろう論』

＊

惜しい。実に惜しい。着眼点は悪くないし、推論もそれなりに的を射ている。ただ物証なしで読者を説得させることはできないな。

テキストデータに視線を走らせていた蒼海（そうかい）三樹夫（みきお）少尉は、割り切れなさと優越感を同時に堪能していた。

こうしたオカルト関連本には意地悪な読み方がある。的中したかハズレたかを、上から目線で検分することだ。幸いにして軍籍にある三樹夫はそれが許される立場であり、判断する知識も持ち合わせていた。

三樹夫は電子ペーパー端末を振り、語句検索を呼び出そうとしたが、反応は鈍い。何年も使っているため、タッチ画面の感度が悪くなっている。

西暦二〇四一年の読書は、個人認識タグを兼ねたブレスレットから空間に文字データを投影（アップライト）するのが一般的である。しかし三樹夫は、視力のハンディキャップからそれを苦手としていた。本音を言えば紙の

本が好みだが、連盟航宙自衛軍（スターミィ）は薄給で有名だ。希少価値の高い本物の書籍など、そうそう買えるものではない。

何度も液晶を押し、どうやら目当ての頁を呼び出す。それは月までの到達手段を記した場面であった。

《……月へと向かう飛翔体はいくらでも高速にできるが、そのぶん減速用推進剤が大量に必要となる。〈雷蝶〉型ロケットがその任にあるとすれば、貨物スペースがなくなってしまうだろう。役立たずな代物を打ち上げているはずもない。

可能性はふたつ。半日で月に到着するという情報が嘘か、それとも大衆に公表できない駆動システムが搭載されているのか……》

分厚い特殊レンズの向こうに並ぶ文章を読み解きながら、三樹夫は苦

笑するのだった。著者は真相に迫ろうと必死だが、この調子じゃ正解にはたどりつけないだろうな……。

なるほど〈雷蝶〉型は全長一一〇メートル、底部直径一〇メートルという超大型ロケットであり、五〇年以上にわたって開発と運用が続けられている。

どの飛翔体よりも巨大であり、華美すぎるデザインも評価されているが、結局は枯れた技術の集大成だ。

それが月まで到着した実例など五指にも足りない。〈雷蝶〉型は国際宇宙ステーション〈グリーン・ドラゴン〉への物資輸送と、その建設工事に用いられていた。

燃焼が終了した第二段ロケットを切り離さずに軌道まで運びあげ、そ

[illegible]

のまま宇宙ステーションに連結し、規模拡張のパーツとして流用するのだ。〈グリーン・ドラゴン〉が葡萄の房（ふさ）のような形状をしているのは、そのためである。

実際に月まで人員を運ぶのは、宇宙ステーションを母港とする〈エアリーズ〉だ。円筒を二つ束ねたフォルムを有するそれは、全長八八メートルの汎用輸送艦である。

現在一号艦から一八号艦までが就役しており、月までの往復はもっぱらそれで賄（まかな）われている。人員のみに限れば最大で二四〇名が乗艦可能だ。

これでは少なすぎると見る向きもあるが、実際問題として用は足りていた。天佑としか思えない超常現象により、月までは極めて短時間で往復可能となっていたからである。

蒼海三樹夫少尉はその五号艦に乗り、月を目指していたのだった……。

うん。月まで約一二時間というのは間違いだな。そんなに**時間がかかる**んじゃ、輸送艦の数を一〇倍にしなきゃならないぞ。たった一八隻の〈エアリーズ〉で基地を維持できているのは、〈グリーン・ドラゴン〉からその気になればたったの**一、二分**で到着可能だからさ。

そう思った三樹夫の耳に、合成音声のアナウンスが聞こえてきた。

『選ばれし戦士諸君に達する。〈エアリーズ〉五号はあと三〇〇秒で〝盟約の門（トンネル）〟を通過する予定。以後は手洗いの使用を極力控えよ。速やかに着席し、安全ベルトを……』

いけない。トイレに行くのを忘れてた。

壁の標識が空席（VACANCY）になっているのを確認し、三樹夫は立ち上がった。

ベルクロの床にグリップシューズを押しつけながら通路を進む。

これまでに都合四回、盟約の門(トンネル)を潜ったが、どうしても緊張してしまう。事故は無視できる件数しか発生していないが、時空の狭間で行方不明になるのはぞっとしない。出すものは全部出しておいたほうが、多少は楽になる。

無重力(ゼログラ)トイレは艦尾に設けられていた。名前に反し、そこだけは重力がある。円柱形の船体外廓に沿って個室ごと回転させ、遠心力で下向きの力を生みだす仕組みだ。

ドアには液晶プレートが塡め込まれており、細かい注意書きが絶え間なく流れていた。慣れていない者は熟読しなければ大変なことになる。仕様変更もたまにあるため、読み直したほうが無難だ。

三樹夫はプレートに指を滑らせ、文頭を出そうとした。すると画面が

切り替わり、黒地に赤の文字で【使用中――入室より七二二秒】と表示された。

おかしい。壁の標識と違う。ちぇっ。また色調是正が追いついていないらしいや。

両眼に装着しているハイドロゴーグルを軽く突いた。視野全体の色が薄くなる。この状態で凝視すると、空席（VACANCY）の前に小さくＮＯの文字が点滅していた。

常人とは異なる視力に悩まされている三樹夫は、この光学補正装置が手放せなかった。酷使がたたり、誤作動もたまにやらかすが、ハイドロゴーグルなしでは軍人としての職責を果たせないのだから仕方がない。

それにしても長っ尻だ。一二分も籠もられたのでは他が迷惑する。液晶を叩き、内部との通話モードをオンにして接触を試みる。

「誰だか知らないがトイレが長すぎやしませんか？　そろそろ盟約の門（トンネル）に入る頃合いなんだけどね。出て来たほうが無難だよ」

返事は、なかった。

「俺も用を足したいんだ。便秘で困ってるのかも知れないが、そろそろ交代しちゃくれないかな。これでも公共交通機関なんだから……」

言い終わる前に無重力（ゼログラ）トイレの回転が止まった。カプセルがハッチと連結し、電子音とともにドアが開く。

中から現れたのは連盟航宙自衛軍（スターミイ）の軍服を着込んだ若い女性であった。

背は平均よりやや高く、三樹夫とそう変わらない。顔立ちは極めて整っており、美人と称しても異議を唱える者はいないだろう。肩口で

切り揃えられている髪は、艶やかな黒。あえて露出させた広い額が印象的だった。

階級章は三樹夫よりひとつ上の中尉だった。年齢は二十歳そこそこだろうが、落ち着いた雰囲気を醸し出しており、大人の女としての魅力を垣間見せていた。

ただし、すべてを台無しにする要素に三樹夫は気づいてしまった。彼女が無言のまま、脇を通り過ぎようとした時、鼻孔を刺激臭が襲ったのだ。

けっして薄いとは言えないレベルのアンモニアの香りであった。

理由には思い至ることがある。無重力（ゼログラ）トイレの扱いに慣れていない者はたいていこれをやらかすのだ。回転が始まり、遠心力が安定してから排尿に及べば問題ないが、待ちきれなかった場合には小便が霧に

なって散布されてしまう。
カプセルに入るとそれが実証された。掃除をした形跡こそあるが、床や壁から馨しき匂いが漂ってくる。
こりゃまずいな。〈エアリーズ〉に乗る乗客は男女混合で三〇人弱だが、小便娘は恰好のネタにされてしまうぞ。野郎なら爆笑されて終わりだろうが、女子の間で醜聞は生死に関わる問題となる。今後の軍務に支障も来すだろう。
「仕方ない。女の子に恥をかかせるわけにもいかんしな」
独り言をつぶやくと、三樹夫はファスナーを開け、適当なタイミングで小便を撒き散らした。重力の枷がない現在、液体は珠になって飛び散る。全身にまんべんなく己の汚穢を浴びたあと、三樹夫はハッチを飛び出した。

「ＣＡを呼んでくれ！　トイレが壊れてるぞ！」
演技の怒号は客室に響いた。三樹夫は大股で艦首へと向かう。発する悪臭に誰もが顔をしかめた。これで注意は俺に集中し、彼女のことは乗客の記憶から消えるだろうさ。
やがてピンク色の制服に身を包んだＣＡ——カーゴ・アテンダントが姿を見せ、行く手を阻んだ。
艦内の警備保障を司るだけのことはあり、筋骨隆々たる女傑だった。男性社会の月でもサバイバルは容易だろう。顔立ちも態度も女にしておくのはもったいない。そう思わせる風貌であった。

「少尉。本艦は〈グリーン・ドラゴン〉のドックで入念な事前チェックを受け、合格証を頂戴したのちに発進しております。もし設備などで苦情があれば、法務部を通じ、上申書を提出してください」
口調は丁寧だが、目は笑っていない。これ以上文句を言うと絞め殺すぞと言わんばかりの圧迫感だ。三樹夫は口からでまかせで反論する。
「ユニットの回転が始まるのが遅すぎるんだ。おかげでションベンまみれだよ。栄えある液晶襟章まで臭くなってしまったぞ。下手すりゃ責任問題だがなあ」
指で襟章を軽く二回叩く。すると表面が黄色から緋色に変わった。あまり使いたくない手だが、使わない手もあるまい。
マウンテンゴリラのようなCAは、その意味するところに気づいた。
彼女は一段階上の敬語で、
「十字軍(クルセイダーズ)の竜騎兵(ドラグーン)とは気づきませんでした。失礼をお詫びいたしま

――士官の騎兵には気づきませんでした。失礼をお詫びいたしま

す。すぐにお召し物の替えを準備させてもらいますので、しばしお待ち願えますでしょうか。

また無重力(ゼログラ)トイレの件ですが、月到着後と同時に修理にかかり、状況は適宜報告させてもらいます。とりあえずはお座りくださいませんか。盟約の門(トンネル)まで三〇秒ですので」

現状で提示させられる条件としてはそのくらいだろう。トイレを調査ではなく修理すると断言したことから、ＣＡが十字軍(クルセイダーズ)の権力を認めているのは明らかだ。三樹夫は提案を受け入れ、手近な椅子に腰を落とした。

「貴官は最悪最低だな」

小声の譴責(けんせき)に横を見ると、先ほどの小便娘が横に座っていた。

「十字軍(クルセイダーズ)の名を出せば相手が簡単に折れる。それを見越しての発言

か。勝てる相手としか戦わないという根性が透けて見えるぞ」
堅い軍人調の台詞だったが、甲高い声のせいか、迫力はまるでない。
強気の陰に隠れているものは脅えだろう。三樹夫は軽い挑発を繰り出した。
「負けるとわかっている相手に喧嘩を売るのは賢くありませんなあ。こっちが強くなるか、相手が弱まるかを待たなきゃ、生き残れないだろ」
「身を捨てなければ瀬を浮かべることはできない。少尉！　私は中尉である。上官と話す際にはハイドロゴーグルを取れ。心の窓(めだま)を見せぬ奴とは共に語ることができない」
「申し訳ないが簡単には外せないんですよ。頭蓋骨に直接ビスで填め込んでいるんでね。ところで中尉殿、これまでに盟約の門(トンネル)を潜ったこ

とは？」
返事はやや遅かったが、期待どおりのものであった。
「一回だけ。シミュレーターで……」
「じゃあこれが初体験ってわけだな。大丈夫。怖がらなくていい。そんなに痛くないし、慣れてしまえばクセになる感覚だからな。俺はもう何回もヤッてるから、これが楽しみで月行きを引き受けているようなもんさ」
癇癪を隠そうともせず睨みつけてくる女に、三樹夫は続けた。
「前向きの姿勢を保持したほうがいいよ。油断してると首筋を痛めるから。真正面が向けない女とはキスがしづらくて困るんだ」
「貴官のような人物が十字軍（クルセイダーズ）か。呆れ果てて言葉もない。軍の風紀が乱れていると聞いていたが、よもやここまでとは。この私が任官の暁は必ずや粛清の風を起こし、膿を出し切ってみせる—

彼女はそう話すと、襟章を指で突いた。その色が真っ赤に染まる。
「驚いたな。中尉殿も十字軍（クルセイダーズ）かい」
「そのとおり。法務士官補佐としてピレネー基地（ベース）に勤務する予定だ。正確には、その瞬間から十字軍（クルセイダーズ）の一員となる」
「おっと。配属基地まで同じとはびっくりだぜ。そっかぁ。法務士官さまか。鎌倉（かまくら）大本営から派遣されてきたんだろうけど、内部改革なんか忘れたほうがいいぜ。十字軍（クルセイダーズ）から膿を出したらなにも残らないさ。いまやあの部隊は膿の塊だからなあ」
怒気が瘧（おこり）となって放射されるのを実感する三樹夫だったが、アナウンスがそれ以上の発言を押しとどめた。
『本艦はあと一〇秒で盟約の門（トンネル）に突入する。神仏の御業に感謝し、安全を祈念せよ』

全を祈念せん。』
三樹夫も生唾を呑み込み、衝撃に備える。隣の女は胸元で手を組み、躰を小刻みに震わせていた。
そして残り時間が零秒となった時――。
全身に波が走った。皮膚と筋肉と骨格が乖離するような錯覚。頭部だけが引っ張られ、脳髄だけがシートに釘付けにされる感覚。モノクロームと極彩色が行き来する視覚。天使の甘美な悲鳴と冥界の魔犬の咆哮が混濁する聴覚。それらが渾然一体となり、乗客の五感を刺激する。盟約の門（トンネル）を通過する際の副作用だ。
地球と月の距離を縮めたそれは、超重力特異点――いわゆるワープゲートである。
時空間に空けられた謎多き虫食い穴である。人工物なのか、天然のものなのかさえわからない。当然、原理も理屈も仮説の域を出ていいな

い。
人類に許された選択肢はその活用のみであった。肉体への違和感を辛抱すれば、月までの到達時間を一気に稼げる。使わぬ手はなかった。異変の体感時間もほんの数秒だ。意識しなければ、偏頭痛か立ちくらみで片づけられたかも知れない。とても三八万キロの長距離を跳ねたとは思えなかったが、眼前に迫る月世界の威容を見れば、疑念など雲散してしまう。
まさしく盆のような月であった。悪魔と契約した男にさえお前は美しいと言わせるだけの威厳に満ちている。
法務士官補佐の女も、不意に出現した神々しい天体に心を奪われ、目線を釘付けにされていた。三樹夫は彼女の耳元にささやく。
「中尉殿。月へようこそ。どうです。あなたと同じくらい美しいで

しょう」
華美すぎる天工の芸術品に見惚れていた彼女は、その台詞に我に返った。
「……否定はしない。私は見栄えがする大和撫子であるし、月世界は美しすぎる。ここを清浄な地に戻さねばならない。それが私の務め……」
無遠慮な言葉を並べつつも、その表情は悟りを開いているかのように穏やかだ。単なる男勝りではこうはいかない。
俄然、三樹夫は興味が湧いてきた。月は繁劇と退屈の同居する世界だが、この女の側にいれば暇に悩まされることだけはあるまい。
それは正解でもあり、間違いでもあった。蒼海三樹夫は今後、時間的余暇とは無縁の生涯を送ることになる——。
甲高い警報音がキャビンを満たした。すぐさま音声連絡が舞い込む。

『艦長より全員に達する。ピレネー基地（ベース）のフォルサ准将より入電。緊急度はトリプルA。十字軍（クルセイダーズ）の全将兵に即時出撃命令が下された。緋色の襟章を持つ竜騎兵（ドラグーン）は戦闘可能か否かにかかわらず全騎出撃。月軌道上で続報を待て。繰り返す。十字軍（クルセイダーズ）は……』

即時出撃命令。その指示に三樹夫は血が沸き立つのを感じた。

冷静に判断するならば、それは月に部隊配備されている十字軍（クルセイダーズ）にのみ向けられたものであったろう。三樹夫も正式な辞令はまだ頂戴していない。

だが、駒は多ければ多いほうがよいに決まっている。戦果は稼げる時に稼いでおかなければ、部隊内の発言権が失われてしまう。

連盟抗宙自衛軍（スターミィ）の中でも十字軍（クルセイダーズ）は超実力主義の組織だ。入隊も困難

遊星航宙自衛軍の中でも十字軍は超第六三号の組織大隊を困難

だが、隊員であり続けるのにも困難が伴う。苦労と苦難の末、ようやく復帰が叶った三樹夫には理解できていた。ここで日和見を決め込むようでは、また地球に逆戻りだと。

死線を潜る覚悟なくして、なにが十字軍(クルセイダーズ)だ。危急の際に真っ先に飛び出していくからこそ、多少の悪戯は目を瞑(つむ)ってもらえるのだ。

三樹夫はすぐさま席を蹴り、船筒中央へと急ぐ。

この〈エアリーズ〉五号は、左側の船筒が丸ごと格納庫(ハンガー)になっており、兵器や爆発物はそちらに詰め込まれていた。右側のキャビンと連結するチューブに手をかけた三樹夫は、固定ハッチを強制解除し、中に躍り込んだ。

意外にも格納庫(ハンガー)は閑散としていた。生鮮食品や煙草といった嗜好品のケースも見えたが、数は少ない。やはり存在感を放っているのは独立

形態で鎮座している兵器だ。
その名はズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)――人類が開発した最新鋭の数打剱冑(レッドクルス)である。
表向きはベストセラー騎として知名度の高いケーニヒス・レーベの改良型とされているが、実際は違う。サイズも一回り大きくなり、デザインも一新された。開発側からは求める騎影にようやく肉薄したという声が強い。
数打剱冑(レッドクルス)の独立形態は軽量自動車(バギーカー)や単輪自動車(モノバイク)が主であったが、近年は速度と安定性のバランスから自動二輪(モーターバイク)が評価されている。ズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)もまたその系譜に連なる一領であり、いまはアストロバイクの形態に落ち着いていた。
三樹夫はそれに片手を置き、感触を確かめた。手袋ごしにも、指が切

れてしまいそうな冷気が伝わってくる。こいつが人剣の究極進化形である証拠だ。

ただ、独立形態であるためか、外見の頼もしさはあまりない。アストロバイクとしての機能はお座なりであり、どちらかと言えば緊急時における救命カプセルの感が強い。

これではまるで……。

「棺桶(かんおけ)だな」

内心を見透かされた指摘に振り向くと、女性中尉がそこにいた。

「まさかとは思いますが、中尉殿も出撃するおつもりですか。再考を強く推奨しますよ。月に来たこともない人が、いきなり戦闘なんかできやしません。法務士官の戦場は法廷とデスクだけでしょうに」

「命令を聞かなかったのか？　緋色の襟章を持つ竜騎兵(ドラグーン)は戦闘可能か否かにかかわらず全騎出撃せよとの指示だ。私の眼前には初陣から

否だけだからです。全騎出撃せよとの指示だ。私の眼前には剱帽があり、私の襟章は緋色だ。出ない理由がない」

「いや……そのですね。中尉殿が発進すれば、俺がエスコートしなきゃなりませんよね。遠慮なく言わせてもらえば、新兵のお守りは勘弁して欲しいんですよ」

憮然とした表情のまま、中尉は言った。

「心配は無用だ。私が貴様を守ってみせる。機動戦は不得手だが、低重力での適応訓練はすませている。徒手格闘戦であれば、負ける気遣いなどない」

「そりゃ頼もしいけど、実戦経験はおありなんですか？」

「もしかして貴様はエル・アラメイン基地防衛戦を知らないのか？

私はあの合戦で敵騎を生け捕りにし、柏葉剣つき竜騎兵勲章を頂戴しているのだが──

「寡聞にして存じ上げませんなぁ。エジプトで戦闘があったという噂は聞きましたが、例によって完璧な情報統制が敷かれてますから、それ以上のことはちょっとね」

三樹夫は嘘はついていない。軍人という立場上、ある程度の機密情報を入手できるが、それにも限度はあった。

連盟航宙自衛軍（スターミィ）は国際統和協栄連盟の一組織である。しかし連盟平和強制自衛軍を管轄する中央大本営（バルベルデ）との関係はこのところ悪化の一途をたどっていた。そのためか戦況詳報はほとんど入手できていない。

仲違いしているのは軍内部だけではなかった。人類は、生械体（エジプシャー）という未曾有の外敵と直面しつつも、国家間の溝を埋められずにいた。この時代でも各国は独自路線を貫き、地球連邦政府など夢のまた夢である。これも未確認情報だが、敵対勢力と勝手にコンタクトを試みる組

織もあるらしい……。
電脳技師官は自衛軍専用ネットの〝ネオ・マミー〟を漁り、情報収集に躍起だが、成果は少ない。エジプトで小競り合いが生じたというニュースにも確証はなかったが、彼女の言葉からそれは事実と見ていいだろう。
三樹夫は相手を睨めるように見つめ、
「それにしても敵さんを生け捕りとは大したもんだぜ。俺もアテン・ボールなら二個撃破したけど、連中はすぐ自爆しちまうからな。にわかには信じられないね」
と言ったが、彼女の表情と声音は変わらない。
「信じるか信じないかはそちらの勝手だが、私の戦果で多くの情報が得られたのは事実。だからこそ昇進と転属が認められた。腕前は実戦で証明してもらう」

て説明してやろう」
彼女は両手で日輪印を組むと、厳かに誓約の口上を述べた。
「専守防衛」
その途端、アストロバイクが解(ほど)けた。順々に継ぎ目が外れ、帯状になった金属は、中尉の全身を螺旋状に取り囲み、そして一領の劒冑となって結実した。
真の威容を現した劒冑はズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)――ドイツのノイエ・ゼグラー社が生産ラインに乗せたそれは、白銀(しろがね)の女王蟻を連想させるフォルムを有していた。
能面のような顔立ちは、一見すると無個性を装っているかのようだが、いかなる状況にも冷静に対処せよと命じている風にも思える。細すぎる腕と比較して、アンバランスなまで太い大腿部は、蹴り技と機動力を優先させた結果だろう。

動力を優先させた細身たるそ

また母衣（ほろ）と放熱板を兼ねた羽翼の後ろには円錐形の物体が生えていた。蟻の括（くび）れた腹部に酷似したそれは一種のゲペックカステン（物入れ）だと説明されている。実際に得物を収容することも可能だが、本当の目的は秘中の秘だ。

三樹夫は銀色の劔冑に圧されつつ、自らも印を結んだ。現在の数打劔冑（レッドクルス）であれば、口上はヴォイス・インターフェイスの役割しか果たしていないが、装甲（ソウコウ）ノ構（カマエ）は竜騎兵の作法である。

「一騎当千」

弾けた甲鉄が仕手の三樹夫を取り囲み、そして包み込む。こうしてズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）が二騎、格納庫に顕現した。

『少尉。我らはまだ互いに名前を知らぬ間柄だったな。貴官が戦死した場合に備え、いちおう聞いておこうか』

飛んで来た装甲通信（メタルエコー）に三樹夫はすぐさま応じた。

「蒼海三樹夫少尉です。中尉の御芳名もお聞かせ願いたいですな」

『無用だ。私は戦死などしない』

「無重力（ゼログラ）トイレでオシッコ漏らしたのを庇ってあげたでしょうに。名前と連絡先を教えるくらいの義理はあると思うんですがね」

相手はしばらく黙り込んだが、やがてこう問い糾してきた。

『……余計な小細工をしたものだな。どうしてあんな芝居を打った？』

「女の子に恥をかかせるわけにもいかんでしょうに」

『ならば、どうして永遠に胸にたたんでおかない？　私を脅迫でもする気か？』

「そこまでゲスじゃありません。中尉殿を屈辱の憂き目から救うっていう初期目標は達成したから、内緒にしておく必要がなくなっただけですよ」

さらなる沈黙の末に、彼女は応じた。

『黒瀬由梨巴（くろせゆりは）中尉である。年齢は二二歳。恋人はいないし作る気もない。蒼海少尉の気遣いには感謝の意を表する。個人アドレスは生きて帰投した場合にのみ伝える』

「そりゃいいや。是が非でも生還しなくちゃ」

『蒼海少尉は必ず生還する。私の側を離れなければの話だが』

二人のズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）が〈エアリーズ〉五号を離れたのは、それから七〇秒後のことであった。

二騎は韋駄天ぶりを発揮し、集合ポイントへと急ぐ。各々の使命感と野心を成就させるためには、目に見える成果を残すしかないのだ。
だが、戦端は既に開かれていた。〝始まりの終わり〟は終焉を迎えようとしていたのである……。

3

『……こちら第八二空間猟兵旅団（ダークサラマンダー）の第二大隊（セカンド）〈マジカルアベンジャーズ〉指揮官マルチネス・コーランド中佐。月標準時二三二〇に敵勢力と接触。これと交戦す。戦果は不明、被害は甚大。我も行動不能状態で漂流中。収容を請う。繰り返す。収容を請う……』
泣き言のような装甲通信（メタルエコー）がヘッドセットに流れたが、幡田角蘭（ばんだかくらん）少佐に

とってそれは今朝食べたクローン和牛の味よりも関心の薄いニュースであった。

「ブロンズ隊リーダーより各騎へ。正規軍の騎影を確認できた者はいないか？」

部下に問いかけてはみたものの、回答を期待していたわけではない。むしろ発見できないほうが面倒がなくてよいのだ。無駄飯食いの正規軍に対する態度は鴻毛（こうもう）より軽くて充分。コーランド中佐だと？　訓練生時分、そんな名前の間抜けな教官がいたような気もするが、どうでもいい話だ……。

編隊の最右翼を飛ぶ弐号騎より返事が入った。副隊長の内裏金輔（だいりきんすけ）中尉である。

『隊長。[illegible]

『畜生　発見してしまいましたよ　四五度下方　距離一五〇〇にそれらしき光点あり。したくないでしょうが、確認しますか？』

一定の信頼を置いてよい副将の忠告に、幡田少佐は迷いを感じるのだった。

交戦規定（ROE）を墨守するなら、友軍からのSOS信号は無視できない。可能な限りの方策を尽くし、救助の手を差し伸べる。それが自衛軍に望まれるスペースマンシップだが、幡田少佐が籍を置いているのは十字軍（クルセイダーズ）なのだ。

「確認だと？　そんな余裕はない。敵編隊の進撃ペースは予想以上だ。ここで油を売ってしまえば、月面そのものが危うくなるぞ」

戦果をすべてに優先させて差し支えなし。そう叩き込まれている幡田は、SOSを無視することに違和感を覚えていなかった。すでにベテランの域に達する彼は、このエリート部隊の価値観こそが世界の価値

観だと信じ切っていた。
だが、空気を読めていない者はいつの世も存在する。
『隊長。どうやら第八二空間猟兵旅団の先発隊はボロ負けしたようですね。でも生き残りがいれば、敵情を聞き出せるんじゃないですか？　少しくらい寄り道しましょうよ』
参号騎の遠野斤洲少尉だった。栄えある十字軍に入営が認められてから半年経つが、まだ娑婆の固定観念に囚われているようだ。
叱り飛ばそうとした時、四号騎の金打声が割って入った。
『とても推奨できない。正規軍の練度は低すぎる。時間稼ぎさえできない連中を回収してやっても、技倆のめざましい向上など望むべくもない。結果的にここで間引きをするのも理に適っていると考える』
最年少ながらクールさを売りとする呉井修市准尉であった。こちら

は要領を心得すぎている。そのうち十字軍の幹部候補生になってもおかしくない器だ。もっとも戦死しなければの話だが。
幡田少佐もまた正規軍に価値など認めていなかった。月世界は弱肉強食の世界だ。実力なき者は生きていけない。たとえ味方であっても部下であっても、利用できるものは利用し尽くさなければ。
「救助はゴールド隊の判断に任せよう。我らの使命はあくまで敵本隊の討伐だ。密集隊形のまま前進を継続する」

公平に判断すれば、第二波として進軍するゴールド隊のほうが実力も実績も数段上だ。金（ゴールド）と銅（ブロンズ）の間には目に見える壁が存在する。だからこそブロンズ隊が先発を命じられたのだ。よく言えば一番槍、悪く言えば捨て駒の役割である。ここで手柄を確保して、初めて昇進の上昇気流に乗れる。
できることならゴールド隊には失敗してもらう、ブロンズ隊が

できることならゴールド隊には先鋒してもらい、ブロンズ隊がカバーする展開が望ましいが、そう上手くはいくまい。十字軍（クルセイダーズ）は敗者に優しくないのだ。全滅し、永久欠番になったシルバー隊と同じ道を歩ませるのは本意ではない。せめて一報だけでも入れ、第八二空間猟兵旅団（ダーク・サラマンダー）の救助要請をしておくべきか？

ちらりと考えた幡田であったが、状況がそれを許さなかった。内裏中尉から装甲通信（メタルエコー）がもたらされたのである。

『未確認飛行編隊が急速接近中！　一〇以上！　接触まであと二〇秒！』

予測より早いが、数から判断してゴールド隊じゃない。

「即時戦闘態勢！」

番目が合った直後、眼下をなにかが擦り抜けた。本体は[illegible]

幅日が合した画像　眼□をなにたた接け掛けた　本体は極彩色に輝
き、そこから伸びた十数本の銀糸が鞭のようにしなっているのが、あ
りありと見えた。
間違いない。アテン・ボールだ！
それは地獄からの使者。悪魔の御使い。終末の角笛を吹き鳴らす者。
地球と月に侵入し、その軍事拠点を視姦し、陵辱し尽くす破壊者だ。
人類はまだ正体を摑んではいない。それが有人か無人なのかさえ不明
とされている。
わかっているのは名前だけだ。撃破に成功した敵騎の破片に、ヒエロ
グリフに酷似した象形文字がいくつも刻まれており、それに〝アテ
ン〟という太陽神を意味する単語が読み取れたのだ。
現在、その件はウルトラ・トップシークレットに指定されている。古
代エジプトで使用され、遥かな昔に死語となったヒエログリフが、ど

うして現代の脅威対象に刻まれているのか？　その謎を解き明かせた者はいない。偶然の一致だと断言するにしては、あまりにもできすぎていよう。

空を飛び、地に潜り、海を泳ぐ妖球をしとめるべく、人類は七五年もの間、研鑽を重ねてきた。最初の四半世紀こそ手も足も出なかったが、次の四半世紀で初撃破に成功。この二五年では優勢に転じる場面さえあった。

たしかに恐るべき相手だが、動きには一定のリズムがある。過去の接敵データからそれは読めていた。対応は困難だが不可能ではない。また人類側が劒冑をヴァージョンアップさせていくのに対し、相手は同じアテン・ボールばかりを延々と投入していた。これでは戦局が逆転するのも時間の問題だった。

するのも時間の問題であった

だが、いままでに襲来したアテン・ボールは常に単騎であった。今度は一〇体以上だ。これは本格攻勢と考えなければならない……。

「敵との交渉はこれを放棄。最初から全力で潰すぞ。全騎抜刀せよ！」

幡田はそう命令すると、背のゲペックカステン（物入れ）を部分開放し、収納してある〝祥鳳（しょうほう）〟を抜いた。歴史ある打（う）ち物というわけではないが、切れ味は満足できる。

騎の右腕には実体弾を打ち出すF99式超電磁砲（レールガン）ウィズGが装備されているが、アテン・ボールは硬く、劣化ウラン弾でさえ簡単に弾かれてしまう。半端な火力に頼るより得物で直接斬りつけたほうが確実。そ

[illegible]

れが十字軍の解答であった。
部下もリーダーに倣う。内裏中尉はロシアの長柄戦斧(バルディチェ)を、遠野少尉は南地中海の櫛形短剣(マンゴーシュ)を、呉井准尉はヴェニスの翼つき長柄槍(ブランディストック)をそれぞれ構えた。
ブロンズ隊に所属する四騎はいずれも新鋭のズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)――その名を大和語に訳せば〝銀星弐号(ズィルバー・シュテルンツヴァイ)〟となるだろう……。

もう一世紀が経過したが、その悪名は人々の記憶にこびりついていた。
銀星号事件。それは大和の民を恐怖のどん底に突き落とした惨劇である。
白銀の武者。殺戮の天象。災厄の流星。

そう称された奇怪な劒冑が飛翔するところ、死体の山が築かれたという。人々は奇怪な詩歌（うた）で精神を汚染され、互いに殺戮のかぎりを尽くしたようだ。それは六〇〇年以上も昔に勃発した天災の再来という話もあるが、真偽は定かではない……。

鎌倉を焼き、普陀楽（ふだらく）山塞を壊滅させた大事件の最中、銀星号は多くの兵士や市民の目に触れ、その記憶に刻み込まれた。紅色の武者との死闘の末、ようやく銀星号は潰え去ったと思われたが、その後も不可解な目撃報告が多数もたらされた。

銀星号らしき複数の騎体が編隊飛行をする様子を見たと……。

それが星片八剣姫（スターダストブレイズ）という銀星号の複製体であると判明したのは、戦後一〇年が経過し、六波羅幕府の堀越公方（ほりごえくぼう）旧館より一定の資料が発見さ

れた時であった。
ようやく組織としての活動を始めていた自衛軍が、最悪かつ最強の劒冑に着目したのは当然の流れであったろう。
膨大な時と金と血と汗が費やされ、どうやら完成にこぎつけたのが、このズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）であった。

いわば量産型銀星号の、そのまたコピーである。外面を真似ただけの劣化版という声もあったが、過小評価と言わざるを得ない。さすがに精神汚染（メンタルペスティリエンス）の陰義（アウトロウ）だけは装備できなかったが、他は可能なかぎりオリジナルに肉薄していた。
特に高機動性は折紙つきだ。
状況証拠から判断し、銀星号の恐るべき身のこなしの原動力は辰気（しんき）、

ツヴァイ

すなわち重力操作が鍵となっている。ズィルバー・シュテルンⅡは
その再現に全力が注がれていた。
それに道筋をつけたのが、北曾（えぞ）に設置された超弩級ハドロン衝突型加速器である。蝦夷（えみし）の鍛冶師に協力を仰ぎ、完成に至った直径四五・六キロの円筒によって、人類は極小ブラックホールの再現実験に成功したのだ。ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）の背後から突き出た蟻の腹部状の構造体、いわゆるゲペックカステン（物入れ）の底部には、それを応用した推進機関が収納されていた。
これこそ〝重力機械（グラマシーン）〟である。
四六時中というわけにはいかないが、短時間ながら辰気を自在に操り、攻走守すべてに利用できる数打劒冑（レッドクルス）――それがズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）であった……。

足許に迫るアテン・ボールの影は四体であった。観測数と食い違っているのは、別方向から刺客が迫っていると見るべきだろう。

「上から来るぞ！　気をつけろ！」

幡田少佐が叫んだ。敵騎の連携は妬ましいほど巧みだ。ここはチームプレイに徹しないと生き残ることはできない。

『敵騎六！　一三五度上方（たつみのかみ）！』

参号騎の遠野が興奮気味に通達してきた。幡田は生唾を呑み込むと、

「挟み撃ちか。古い手だ。内裏中尉、呉井を連れて月へ落ちろ。手柄を立てさせてやる」

と命じた。頭上の半月の引力を利用して加速率をあげ、旋回して敵騎の尻を蹴り飛ばす腹積もりであった。

それまで二騎で六騎を食い止めねばならないし、下方の四騎も気にな

る。自衛軍の戦術ドクトリンでは、アテン・ボール一体に対し四倍以上の数的優位がなければ、退避しても敵前逃亡罪には問われない、とある。
ただし、それは正規軍の話だ。十字軍（クルセイダーズ）の称号が伊達ではないことを見せてやる。
「全騎散開（ブレイク）せよ！　クリムゾンフォーメイションだ！」
幡田の一喝で僚騎は二手に分かれた。隊長騎と参号機は左右に間合いを開けつつ、Ｆ99式超電磁砲（レールガン）ウィズＧを乱射する。
Ｇは拡散グレネード弾を指しており、強力な広域破壊兵器だが、間合いが近すぎ、現状では使い難い。幡田と遠野が撃ち放ったのは昔ながらの劣化ウラン弾であった。
毒々しい色彩のアテン・ボールに閃光が散る。しかし損害は皆無。長

すぎる敵の触手がそれを巧みに弾いているのだ。
銃撃は陽動である。攻守両面において強みを発揮する触手を守備に専念させる。これが功を奏した。弐号騎と四号騎が間隙を突き、妖球の尻を斬りつける。
敵と接触する直前、長柄戦斧（バルディチェ）と翼つき長柄槍（ブランディストック）の刃が紫に光った。収束レーザーを帯電させたのだ。これにより切れ味は格段にあがる。仕手の熱量を膨大に奪うため、限界まで辛抱しなければならないが、その価値はあった。
四体のアテン・ボールが風船のように脹らみ、そして裂けた。
残る二体は味方の危険に気づき、逃げにかかったが、幡田がそれを許さなかった。太刀を一閃させるや、アテン・ボールは二つとも祥鳳の錆と消えた。

我ながら惚れ惚れとする大戦果であった。
単独でしか襲来しなかった敵騎を一気に六つも屠ったのだ。これで英雄の称号は我が手に転がり込んだ。次は勝利を完勝とすべくアクションを起こさなければ。
「六体撃墜！　せっかくだから下の編隊も食うぞ。全騎反転して眼下の四体を……」
いない。
こちらに追いすがって来なければならない敵騎の姿が見えない。
直後、装甲通信(メタルエコー)が入った。聞き覚えのある、嫌な声だ。
『ゴールド隊リーダーのレイス中佐だ。敵騎四が月面へと急行中だぞ。撃ち洩らしのヘマをカバーするこっちの身にもなれ。以上！』
心臓がひとつ大きく爆(は)ぜた。もしや先の四体が本命で、討ち取った六体は囮か？

もしやあの四体は卵を抱いているのか？
それを確かめる術（すべ）は、いまのブロンズ隊リーダーにはないのだった……。

4

「まずいな。敵編隊（エネミー）の進軍ペースが速すぎる。これじゃ追いつけない」
舌打ちの誘惑を意識の外へ追いやりながら、ゴールド隊指揮官のギャビン・レイス中佐は現状打開の策を探った。
敵の数は四。そしてゴールド隊も四騎だ。数は互角であるし、操る劒冑がズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）となれば、一方的に苦汁をなめる心

配はない。

しかし、今回の相手は勝手が違った。加速が倍以上だ。ゴールド隊も必死に追い縋っているが、敵にタッチダウンされるのが一歩だけ早そうだ。

「重力制御を使っても、これ以上の増速は無理なのか？」

数打劒冑(レッドクルス)に組み込まれた人工知能(AI)に問いかけると、鈴を転がしたかのような少女の合成音声が耳元でささやく。

《不可能です。本騎の重力制御は格闘戦における小回りに最適解を得るようチューニングされています。加速には向いていません》

いっそⅣ番騎あたりを蹴飛ばしてみるか。語源は不明ながら、なぜか〝江ノ島大蹴撃(エノシマインパクト)〟と呼ばれている足技を駆使すれば、爆発的な速度が得られる。もっとも破壊力がありすぎるため、耐えられる劒冑など存

在しないのだが。
実際の話、ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）の装甲はかなり薄いのだ。
『レイス隊長。奴らはまたスピードをあげました。針路を変えないとすると、狙いはダイダロスでしょう』
副官のビッグ・ライター少佐が早口で報告する。嬉しくない知らせだ。ダイダロス市は月の裏側（ファーサイド）でも屈指の戦略拠点である。それが襲撃されれば十字軍（クルセイダーズ）の存在価値そのものが揺れてしまう。
『狙いがあの街であれば、やはり卵を抱いてますね。こりゃ大事（おおごと）ですぜ。あそこの風俗街には馴染みの嬢が多いんだ。僕はもてたいから十字軍（クルセイダーズ）に入ったのに』
下卑た声を発したのはⅢ番騎のロンガー・ネッター大尉であった。正直者だけあって、その言葉に嘘は微塵も感じられない。

ネッターに応じたのはⅣ番騎のエッジ・エンティルスス中尉だ。
『基地が襲われるよりマシですよ。それに大尉は借金がたまっているんでしょう。風俗嬢がミイラになってくれれば帳消しになるんじゃありませんか？』

卵とミイラ。この二つの単語が重なると破局を意味するようになる。レイス中佐が恐れていたものはそれであった。
自衛軍は昨年暮れのエル・アラメイン基地防衛戦で、初めてアテン・ボールの生け捕りに成功したわけだが、その解体作業中に事件が発生した。体内で発見された銀色の卵状の物体が破裂し、基地内に多数の犠牲者が出たのだ。
爆発したわけではない。触れると同時に割れただけだ。
だが、人体への影響は凄まじかった。血をはじめとする体液のすべて

が一気に沸騰し、猛烈な勢いで干からびてしまったのである。爆心地から半径五〇〇メートルにいた人間は全員がミイラ化してしまった。
この事件もまた秘中の秘として封印されている……。
レイス中佐は決断した。もう仕方がない。現状で我らに対策がないのであれば、ダイダロス市に連絡し、駐留している正規軍を回してもらおう。
役立たずに貸しを作るのは悔しいが、これもブロンズ隊が失敗したからだぞ。大和人（やまとびと）のバンダには、この罪を償わせてやらねば。やはり十字軍（クルセイダーズ）と名のつく組織に東洋人は不適格なのだ……。
『隊長！　敵騎が！』
レイスの意識を現実に引き戻したのはライター少佐の絶叫だった。状

況は一目で理解できた。
アテン・ボールがひとつだけ急反転し、編隊に向かって来る。残り三体は進撃を続けている点から判断し、こちらの足止めを試みる気だ。
「全火器（オールウェポン）、全軍刀（オールソード）の運用範囲を無制限に設定。絶対に奴を討ち取れ！」
しゃにむに命令を発したが、間に合わなかった。レイスは目撃したのだ。副長のⅡ番騎がアテン・ボールの触手に殴られ、胴体が一刀両断にされる惨状を。
「ビッグ・ライター少佐、応答せよ！」
装甲通信（メタルエコー）の返事はなかった。
劒冑は仕手（ユーザー）が負傷すれば、自己治癒モードに入る。ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）もその機能を備えているが、劒冑ごと真っ二つにされたの

ではどうしようもない。
すぐさまⅢ番騎とⅣ番騎が〝竜殺し（ドラゴンバスター）〟と呼ばれる業物を抜き、アテン・ボールを斬り捨てたものの、もう副長は戻ってこないのだ。
この時、レイスが感じたのは怒りではなく、焦りであった。勇躍出撃したゴールド隊であったが、得られた戦果は乏しすぎた。それどころか犠牲まで生じた。危機に瀕した月面都市を救うことも無理だ。このままでは責任を一身に背負わされてしまう。
手柄が確保できない以上、立場を守るためにできる選択肢はひとつ。共犯者を捏造することだろう。四騎中一騎が墜とされたのではなく、八騎中一騎が墜とされたことにすれば罪も軽くなる。
「ネッターとエンティルス。二人とも止まれ。ここでブロンズ隊を待ち、合流して態勢を整えるぞ。足並みから判断して、あのアテン・

ボールは新型の公算が強い。我らだけでは掃討作戦を完遂できない恐れがある。これよりダイダロス市に緊急通告を行い、正規軍の投入と住民の避難を……」

レイスはそこで言葉を切った。切らざるを得なかった。

進軍する三体のアテン・ボールのうち、二つが光の球となって消え果てたのだ。

「月面からの狙撃か！　まだ四万メートル以上離れているのに、いったい誰だ⁉　あんな技倆を持つ者は、十字軍（クルセイダーズ）にはおらんぞ！」

無為な叫びは決して間違いではなかった。

敵騎を打擲した者は、まだ十字軍（クルセイダーズ）の一員ではない。ピレネー基地（ベース）に到着後、正式な辞令を受ける手筈になっていたのである……。

5

『なに余計なことをやっている！』
手柄を罵倒する女の声が頭蓋に響いた。それは黒瀬由梨巴（くろせゆりは）中尉からの装甲通信（メタルエコー）だ。
『たかがアテン・ボール三体など、私ひとりで充分だというのに。貴官はどうして我が獲物を横取りするのだ！』
蒼海三樹夫（そうかいみきお）少尉は苦笑しつつ、こう反論する。
「中尉殿は格闘戦のプロでしょうけど、上陸を許したんじゃ被害も大きいですよ。やれる時に数を減らさないと。それにダイダロス市が襲われると推測したのは中尉殿です。待ち伏せができたのはお手柄じゃ

ないですか。どうしてわかったんです？」
『推測じゃない。簡単な推理。アテン・ボールは、いちど襲った場所は襲撃しない。その特性を知っていれば候補地は絞り込める』
「おっと。残り一体が来ます。接触まであと四五秒。俺の石弓（クロスボウ）は次発装塡に時間がかかりますから、奴の処置はお任せしますよ」
三樹夫は第二の矢を番（つが）える準備に入った。渾身の力を込めて弦の巻き上げを行う。
彼の騎体が保有する得物は、この石弓（クロスボウ）だけなのだ……。
新鋭騎ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）の特徴として、武器のアレンジに秀でていたことを特筆しなければならない。背のゲペックカステン（物入れ）は必要以上に大きく、柄が折りたためるタイプであれば、戦斧や薙刀で

も収納できる。
これは戦術上の必要性から生じた措置であった。宇宙空間における戦闘は常に至近距離で行われるのだ。
過度なまでに発達したステルス技術が遠距離での索敵と弾着観測を不可能とし、結果として遠距離戦闘は封じられた。レーザー兵器の類(たぐい)も研究は行われたが、効果的な殺傷能力を持たせるためには数打劒冑(レッドクルス)の熱量では無理だ。真打劒冑(ブラッドクルス)の陰義(アウトロウ)にはそれを可能とする騎もあろうが、複製するには費用対効果の点で赤字にしかならない。
また敵方のアテン・ボールも飛び道具を持っておらず、もっぱら肉弾戦に終始したため、開発の必要性が薄かったという実状もある。その退治にはやはり刀剣類が最適だ。
従って蒼海三樹夫少尉の石弓(クロスボウ)は異端と呼ぶべき得物であったかも知れない。

鉄砲の運用が開始された一六世紀以降、石弓は狩猟か射的に生存の道を見つけ出すようになったが、宇宙空間という広大な狩り場で再び真価を発揮しようとしていた。

その弦は、基礎研究が再開された軌道エレベータの構造素材――カーボンナノチューブが流用されており、たぐいまれな強度を誇る。生み出す貫通力も尋常ではなく、飛距離も呆れるほど長い。

もっとも、重力と空気のない宇宙空間で飛距離を誇るのは無意味だ。劒冑の電脳に頼ろうとも、照準には限界が生じる。再装塡に手間と時間がかかるため、好む竜騎兵は少数派であった。

しかし、蒼海三樹夫少尉は別だ。彼は〝テロル〟と名付けた石弓(クロスボウ)をあえて選び、愛用していた。それは彼だけが保有する異様な眼力を

もってして、初めて戦力として機能する得物であった。
正体を見破った者はいない。少なくとも、これまでは……。

『ちょっと待ってくれないか。蒼海少尉。君は次発装塡に時間がかかると言ったな。どうやって二本も放ったのだ？』
「いえ。撃ったのは一矢だけです」

『それでどうやって二体を撃破した？』
「一体を貫いた後で軌道を変え、もう一体に突き刺しただけですよ」
『矢筈に姿勢制御ロケットでもついているのか？』
「まさか。俺が曲げたのさ。念力でね。こう見えても魔術師でして」
『ふざけないで！　新世代の自動追尾装置が備えられた矢でしょう。隠しても無駄。防衛予算を洗い直せば、すぐにわかるんだから』

クールな口調を忘れ、女言葉になっている点でもわかるように、黒瀬中尉は明らかに混乱していた。

『矢を視線で操っているの？　まさか神甲弓聖〝ウィリアム・テル〟の陰義（アウトロウ）だなんて言わないでよ。あんな錆びついた大昔の……』

「馬鹿にするもんじゃありませんよ。誘導システムがどんなに進歩しても命中の原理原則は変わりません。まあ、俺が実装してもらった陰義（アウトロウ）は〝ウィリアム・テル〟の贋作なんですけどね。本物も選べたんですが、こっちのほうがしっくりきたんです。なにしろ俺は存在自体が贋作みたいなものですから」

『陰義（アウトロウ）で遠距離誘導する仕手なんて、もう絶滅したと思っていた』

「俺が最後のひとりかも、ですね。理屈は簡単です。飛翔中の矢に対

し、発射点の再設定を綿密に行うんですよ。中間点で方向転換をさせれば矢を自在に機動させられます。まず俺以外には無理ですけど」

『そうか。貴様の秘密はハイドロゴーグルにあるのだな。イブを誘惑した果実（りんご）には永遠に突き刺さらない矢か。それは物理的な違法行為であり、因果律に対する叛逆そのものだ。いずれ真相を暴いてくれる』

「このズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）こそ自然界への叛逆を具現化した存在ですよ。中尉、そろそろ敵騎が来ます。まだ次発装填が終わりません。対応は任せますよ」

黒瀬中尉の反応は素早かった。月面を軽く蹴り飛ばし、一気に高みへ駆け上がる。そのまま態勢を入れ替え、重力制御に入った。

それも素手のままで。

「中尉！　抜刀を忘れてます！」

三樹夫の声に、黒瀬は不敵に返してきた。

『私自身が刃だ。中途半端な得物など、我が劒冑には不要！』
飛翔から落下へ。位置エネルギーと運動エネルギーを巧みに重ね合わせ、超速度で急降下しつつ踵（かかと）落としを放つ。
『天座失墜（フォーリンダウン）・小彗星（レイディバグ）！』
ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）は徒手格闘戦を得意とするが、足技もまた凄まじい。呪われた必殺技の叫びが鳴るや、妖球はたちまちその餌食となった。
重力制御という自然界への叛逆に屈したアテン・ボールは、残骸となって月面へ落下し、衝撃で砕け散った。
「こりゃ月震（ムーンクエイク）が長く続きますよ。中央大本営（バルベルデ）に苦情が殺到しそうだ。粉々になっちまいましたけど、いちおうダイダロスに連絡して回収班を準備させましょう」

宇宙空間に双輪(ふたわ)を描き、緩やかな軌道で帰着を果たした黒瀬騎は、装甲通信(メタルエコー)を飛ばしてきた。
『敵影なし。掃討終了と認定。蒼海少尉、ついてきなさい』
黒瀬騎は地を這うような低空を飛び、三樹夫を誘った。その尻を追いかける恰好で騎を飛ばす。向かう先はすぐに知れた。ダイダロスだ。いずれの市でも北側には軍用エアロックが密集している。重機搬入可と記されたひとつに接近した黒瀬騎は、ためらいもせずに中に入った。三樹夫が続いたのを確認したらしく、ハッチが勢いよく閉まり、轟音と共に空気が流入してきた。
酸素が充満したのを確認し、二人は装甲を解く。ズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)は棺桶を思わせるアストロバイクに変貌した。

「抱け。私を抱け」

大きめのエアロックに場違いな命令と懇願が響く。さすがに絶句する三樹夫の鼻を、雌特有の芳香が襲った。

「躰の火照りが治まらぬ。殺しの後はいつもこうなのだ。放置すれば私は罪なき一般市民を無礼打ちにしかねない。十字軍（クルセイダーズ）の威厳を笠に着てな」

ここ月（ルナ）では精神に乱れ（ルナティック）が生じることは珍しくないが、それにしても唐突だった。

「聞け。私は借りを作るのがなにより嫌いだ。返す前に相手が死んでしまうのは寝覚めが悪い。少尉は小便を漏らした私に慈悲をかけてくれたではないか。もういちど慈悲を頼みたいのだ。抱いて。いますぐ、ここで」

蒼海三樹夫は、その願いを叶えた。

第二編

即身騎

— THE MUMMY CRUZ

1

太陽系はどこまで広がっているのか？

その問いに対し、二一世紀の天文学者たちは局所恒星間雲との境目であるヘリオポーズが一定の目安になると主張している。ただ、ヘリオポーズ自体のサイズが観測困難であるため、概算値しか提示できておらず、その幅も五〇から一六〇天文単位と広すぎる。

一世紀前の太陽系はより単純かつ狭い空間だと考えられていた。境界線は最果ての惑星である冥王星（プルート）だ。

それは二四七年以上かけて太陽を一周する凍てついた地球型の天体である。直径約二三七〇キロと地球の月より小柄だが、道標には相応しい存在感を秘めていた。

一九三〇年にそれを発見したクライド・トンボーは熱烈な新大陸独立派(アメリカンドリーマー)であった。意図したかどうかは不明だが、冥王星は合衆国市民にとって精神的支柱となっていった。

たとえ冷え、渇き、貧しくとも、いずれは独り立ちしてみせる。我々が発見した気高き惑星——冥王星のように、と。

第五次独立戦争で勝利を勝ち取った彼らが、国旗に冥王星の惑星記号〝♇〟を織り込んだのは自然な流れであった。星条旗ことスター・アンド・ストライプスの星の数は、州を取り込む度に増えていったが、その最後に♇を刻むことを彼らは忘れなかった。

これを恥辱と考えたのは大英連邦である。配下の王立天文学会に圧力をかけさせ、名誉の失墜を露骨に試みたのだ。

ロンドンの不毛な努力は二〇〇六年に実を結んだ。この年度の総会で惑星という存在に対する再定義が行われ、冥王星はその地位から滑落したのだった。

準惑星（ドワーフプラネット）という新たなポジションに合衆国市民は憤りを隠さなかったが、彼らは挫けなかった。冥王星が惑星だと認めさせるに足る事実を揃えたならば再昇格も夢ではない。そう信じていたのだ。

国土が疲弊しきっていたため、独力で観測計画を実現するのは難しい。そこで合衆国は大和国と科学分野で協調を深め、活路を見出すことにした。

こうして西暦二〇二二年に打ち上げられたのが惑星探査機〈ジェントル・ダッシュ〉である。一〇年の航海を経て冥王星に到着する予定だったが、不首尾な結果に終わった。

一足先に欧州とインドが共同で発進させた準惑星探査機〈ウルティマ・シュール〉と同様、〈ジェントル・ダッシュ〉もまた到着寸前に通信を絶ってしまったのである。

だからこそ人類は知らなかった。準惑星（ドワーフプラネット）に凋落した冥王星に、蝦夷種族（ドワーフ）の始祖にも近い生命体が息づいている事実を。

宇宙は広い。そしてひとつではない。

可能性の数だけ時空世界は存在し、その境界線は曖昧になりつつあった。神話と現実の間に存在した垣根が消え、禁忌がはみ出そうとしている。

ここに登場する王（ファラオ）もまた、伝説から歴史、そして現世へと居場所を自在に変え、再び姿を現そうと欲していたのだ……。

＊

己を愛する者は、己の複製もまた愛す。

自己愛を貫き通す者は、自己に極めて近い存在に対し、無限の愛情を注ぐ。その存在ができるだけ長く続くことを愛と呼ぶのであれば、ここに登場する王（ファラオ）は、愛情に満ち溢れている男であった。

愛しい息子は常日頃と変わらぬ様子でメタリックな棺に横たわっていた。わずかに残る髪は焦げ茶に変色し、眉は消えている。眼窩に目玉はなく、鼻孔は一部が欠け、歯も失われていた。四肢は硬直し、心臓以外の臓器は体内に存在しない。

つまりは木乃伊（ミイラ）であった。大和言葉で即身仏とも称されるそれは、医学的には単なる死体であり、生命活動は完全に停止している。

しかし生械体（エジプシャー）にとっての現実は違う。それは魂をこの世にとどめ、死を超越するための箱舟なのだ。

死を嫌い、それを超越しようと欲した生械体（エジプシャー）にとって、肉体の滅びは通過点にしか過ぎなかった。壊れたなら、休み、そして待つ。いまや時間は味方だ。すべての問題が片づくまでひたすら眠ればよい。

ただし魂の容れ物だけは大事に保管しなければならない。だからこそミイラという技術が発達したのである。悠久の流れに抗う手段として、防腐処置を施すことは有効な手段であり、それを劍冑（ケペシュ）に陰義として搭載するのもまた必然であった。

王（ファラオ）は自らの判断に満足していた。ケプリというスカラベ（フンコロガシ）の形を模した劍冑（ケペシュ）にミイラ化の能力を持たせたのは、実に卓見であったと。

自信家の息子は父親の判断を好んでいなかった。勝利の女神（ネイト）に見放される危険などありはしない。ならばそんな陰義を用意する必要もないと。保険は敗北主義者の逃げ道だと。

父はそれを聞き流し、強引に我意を通した。そのため息子は完全なる死とは無縁でいられた。目覚めた時にその事実を知れば、この子はどんな顔をするだろうか。

長い長い待ち時間を辛抱し、王（ファラオ）は耐えた。己が課した条件が満たされる瞬間を。

その兆候が確認できたのは百年前のことだ。最初は受動的な観測であったが、徐々に能動的な調査も行われるようになった。

無人騎による強行偵察である。当初は生還率一〇割であったが、時間

経過と共にそれは徐々に低下していった。敵と見なした勢力が対応に力を入れてきたようだ。

王（ファラオ）は最後の詰めとして、無人騎一二体を一度に投入した。そのうち一〇体が未帰還となった時、彼は確信を抱いた。
息子を起こす日がやって来たと。
戦士として復活させる瞬間が訪れたのだと。
復活の儀式は王（ファラオ）がひとりで行った。長き間にわたって待ち続けた許嫁（アンケセンアメン）が同席を求めたが、王（ファラオ）は許さなかった。独占欲だけは年を経ても薄れぬものだ。
再生の過程に問題は生じなかった。自動化が進んでいるし、失敗例など数えるほどしかない。ましてや息子はケプリが完璧なミイラ化を成し遂げている。脳と心臓が十全に残っている以上、なにも心配はいら

し遂げている。肝臓も心臓も完全に死んでいる以上、彼は酒に酔い
ない。

王(ファラオ)は手袋を取り、乾ききった肢体をくまなく撫でる。その指先は異常そのものだ。

一〇本の指にはすべて男性器が移植されていたのである。

死を飛び越えた王(ファラオ)は性差もまた飛び越えていた。千年単位での寿命を確約されている彼は、アガペーとエロスの間を無遠慮に行き来しなければ、精神の平衡を保てないまでに病んでいた。

男性器を移植したのは手の指だけではない。足の指にもだ。股間に何本生えているかは本人も面倒で数えていない。また掌、臍(へそ)、喉、耳、肛門には女性器を移植しており、男女両方の快楽を味わい尽くせる仕様となっている。

自らの人体を魔改造しつつも、息子への愛情だけは微塵も揺るがない

王（ファラオ）は、指先から盛大な吐精に及んだ。
白濁色の液が散る。それは犯す行為でも汚す行為でもない。自らの遺伝子でこしらえた存在に自らの遺伝子を注ぐ。それは生への引き鉄そのものだ。
冥王（オシリス）の星を統べる王（ファラオ）——アクエンアテンは荘厳な声を響かせる。
「目覚めよ。我が吾子（あこ）よ」
反応は早かった。粉が吹いていたような額に血管が青々と浮き上がり、頬に赤みが差していった。口許が小刻みに動き、やがて両眼がカッと開かれた。
眼球がめまぐるしく動き、王（ファラオ）を捉える。開口一番、息子はこう訊ねた。
「……父上。今度は僕は誰を殺せばよろしいのでしょうや？」

アクエンアテンは長い顔で満足げに肯くのだった。
「頼もしすぎる口上を王として嬉しく思う。同時に父として若干の憂慮も感じている。まずは焦るな。お前を起こしたのは戦士として闘ってもらうためだが、記憶に欠落がないかを医師団に調べさせねば」
「記憶は完璧です。母上と闘って負けた嫌な風景が瞼に焼き付いております。どうか僕に、長きにわたり負け犬であり続けるような無慈悲な真似はなさらないで下さい」
アクエンアテンは首を横に振った。
「すでに長きにわたり負け犬であり続けさせてしまった。我らが冥王に到着して以来、この惑星は太陽の周りを一三回と半周も廻っている」

さすがの息子も目を点にし、疑念の声を発した。
「ここは地球(ゲブ)ではなく、冥王の星(オシリス)なのですか。生前、アケトアテン(アテンの地平線)の空中携挙計画は耳にしていましたが、よもや目的地が最果ての星とは。いったいどうして……」
「かいつまんで説明するならば、余は時機到来まで地球を羽虫どもに預けた。そして時機が至った。それだけの話だ。お前が敗れた悪夢の日から、地球時間で約三三〇〇年が経過しているぞ」
「生械体(エジプシャー)にとっても短い時間ではありませんね。どうしてこれほどまで引き籠もったのでしょうか」
「文句なら余ではなく地球の連中に言え。奴らの進化は余の予測よりも遥かに遅かった。さすがは羽虫と言うべきであろう。
ただ評価せねばならぬ点もある。羽虫たちは一度(ひとたび)動き出すと早いらしい。最初の此奴が現れてから、まだ三世紀しか経過していない

い　最初の兆候が観測されてから、まだ一世紀しか経過していない」
「父上にお伺いしたい。兆候とはなんでしょうか」
「地球と月の間に設けられた〝始祖(ラー)の関門〟を何物かが通過した。連中は独力で重力の軛を振りほどき、月に都(みやこ)を築いているようだ。たった百年でな」

「つまり月神(コンス)の劒冑(ケペシュ)がそれを察知したと？　発動した陰義を羽虫たちが利用し、月面を好き放題にしていると？　信じ難い話です」
そこで息子は苦悶の表情を示した。棚に据えられたカノポス壺と棺が、いままさに連結されたところであった。再生に成功した内臓が腹部に移植されつつあるのだ。
「痛むのであれば意識を落とすこともできるが」
「どうかやめてください。これが主の感覚であるなら、味わい尽くさ

なければなりません。我が本名である〝ツタンクアテン（生けるアテンの姿）〟にかけて、この痛みは呑み込んでみせます」
「望んで無理をするのは愚者と呼ばれても仕方があるまいぞ。それにお前はもうツタンクアテンではない。敗者にアテン神の御名はふさわしくないと神官たちが主張しているし、余もそう考える。お前はアメン神に帰依することを厭わぬはず。よって以後は〝ツタンクアメン（生けるアメンの姿）〟とでも名乗るがよかろう……」
四肢に生気を漲（みなぎ）らせながら、息子は応じた。
「ツタンクアメン……よき響きです。アメン神の名を汚さぬよう戦果をもぎとって参りましょう。僕のケプリはまだ健在でしょうか。あの劒冑（ケペシュ）さえあれば、数日で羽虫たちを鏖殺できます」
「息子よ。失敗から学べ。実の母と闘い、無惨に敗れた過去を忘れる

な。同じあやまちを繰り返すようであれば、次の王(ファラオ)の候補から外さねばならなくなる。愛する父にそのような悲しい真似をさせるでない」

寒々しい沈黙が流れたが、やがてツタンクアメンの問いかけがそれを打ち砕く。

「母上はどうなりましたか？　父上が五体満足である御様子から、戦勝は間違いないものと推察しますが……」

「殺してはおらぬぞ。余は恩も仇も忘れぬ男だ。モーセと名乗るあの女は、お前を産んでくれたし、討ち取った後も命だけは助けてくれた。だからこそ逃がし、羽虫どもの管理を任せた。過程はどうあれ、見栄えのする形にはなったようだ。

しかし、あの女は生きてはいまい。永遠の生命を得た生械体(エジプシャー)の一員であらねば、我らは整備機材のすべてを持ち去った。仮に肉体が残った

にあるな。我らは整備機構のすべてを持ち去った。仮に肉体が残っているとしてもそれこそミイラになっていよう。誰からも顧みられることのない死骸にな」

息子が歪な形で母を慕っていた事実を知る父は、あえて挑発気味にそう述べたが、相手はかえって意気軒昂に言った。

「父上。僕がそれを確かめて参りましょう。どうか尖兵としての役目をお与え下さい」

「よくぞ申した。お前を生き返らせたのはまさにそのため。羽虫たちがどれほど進化したかを見極めて参れ。奴らを殺すことをためらってはならぬ。我らの劒冑(ケペシュ)にかけられた誓願を忘れるでないぞ」

「はい。〝多殺多生〟ですね。多く殺せる者こそ多くを生かす。劒冑(ケペシュ)の仕手として、僕はそれを心に刻んでおります」

ソヌノクアメノの返答に、アクヒノアテノは大仰に頷いてみせた。

ツタンクアメンの返答に、アクエンアテンは大仰に頷いてみせた。

「沐浴をするがよい。身を清めた後に戦略顧問に引き合わせよう。実動部隊を率いるお前とは深い仲となることだろうよ」

それは父親が息子にかけた最後の温情となったが、この時点でそれに気づく者などいるはずもなかった……。

2

長時間の睡眠から目覚めた肉体は水分を欲する。ミイラならなおさらだ。炭化しかけていた肉体は保湿成分に富んだ湯を一気に吸収した。

「うむ……生き返るな……」

ツタンクアメンは年寄りのように独りごちるのだった。生理年齢は一四歳だが、実際の年齢は彼自身も理解していなかった。

[illegible]
浴場はもちろん王族専用である。従者もいたが、ツタンクアメンは彼らを下がらせた。もはや復活の過程に問題は生じないだろう。それにひとりで検分したいものがあったのだ。
自らの躰である。
生械体は、その名が示すとおり、肉体と機械の融合に拒否反応を持たない。生体に甲冑を融合させるような施術すら厭わずに行われる。より安易かつ需要があったのは性差の排除だ。この世に生を得たからには、男女に拘泥するのはもったいない。より深く学ぶ者は、より深く遊ぶべき。王のその考えが伝播した結果、生械体は両性具有が全体の九割を超えていた。精巣や子宮の移植および摘出など朝飯前の話であるし、王のように性器の無限増殖を愉しむ者も珍しくはない。

しかしながら保守的なツタンクアメンはその風習になじめなかった。彼には男性器しかなく、数もひとつのみだ。それを増やす行為には拒否感を抱いていた。

頬に散った白濁液を拭う。父の精液だ。指をすべて陰茎に改造するとはなんと恐ろしいことを。まさかとは思うが眠っている間に、僕の身にも似たような改造を施してはいないだろうか？

幸いにしてそれは杞憂だった。ツタンクアメンは、股間の性器が単独であり、躰のどこにも女性器が移植されていない事実を知ると、胸をなでおろすのだった。

視線を上方へと向ける。透明な天蓋越しに煌めく星野（せいや）が見えた。三〇〇〇年以上が経過していたにもかかわらず、見覚えのある星座が数多くあった。

[illegible]

星が見えているからといって日没後とは限らない
視線をめぐらし、太陽を探す。
それらしい恒星はすぐ見つかった。ぼうっと霞んでいる黄色い星だ。
地球から見た太陽とは比較にならないほど小さく、寒々しい。血潮が流れ始めた掌をかざしてみても、熱量は微塵も感じられない。

ならば月は？　月はどっちに出ている？
修復が終わったばかりの首をゆっくりと回す。星々の間に円形の物体があった。光量はまずまずだが、かなり大きく見える。
あれが冥王（オシリス）の月だろうか？
父を問い糾しはしなかったが、太陽系最果ての星を仮の移住先に選んだ理由はわかっていた。ここが生械体（エジプシャー）にとって神聖な地だからだ……。

進歩した文明はやがて自らのルーツを追い求めるようになる。生械体（エジプシャー）は彼方に消えかけていた〝始祖（ラー）〟の痕跡を求め、太陽系の探索を進めていた。

太陽神と記されることの多い始祖（ラー）は、自らの意志で自らを生み出したという伝説を持つ超存在であり、神話の向こう側に鎮座している。

生械体（エジプシャー）が有する知識で共通認識となり得るのは、劍冑（ケペシュ）だけだろう。

武を貴しと考える生械体（エジプシャー）にとって、ここ冥王（オシリス）の星は特別な天体であった。その第一衛星には劍冑（ケペシュ）を打つのに最適な〝原初の水（ヌン）〟が豊富に存在するのだ。

神話には、外宇宙から飛来した始祖（ラー）が休息をとる駅舎として冥王（オシリス）を利用した、と記されている。一時的に地球を離れようとした生械体（エジプシャー）が離宮とするには、うってつけの場所だと評価できよう。

首都に定めたアケトアテンを辰気で大地ごと浮かせ、八年をかけた旅路の果てに、冥王（オシリス）の星に不時着させたのは、王（ファラオ）の意志であり、命令によるものであった。

アケトアテンは〝アテンの地平線〟という意味だが、冥王（オシリス）の星は〝太陽系の地平線〟だ。極みを目指す者にとって、どうしても征服しなければならぬ地であったのだ……。

「見えたのね。あれが第一衛星（アヌビス）よ。地球人類は〝カロン〟と呼んでいるわ。この冥王（オシリス）の星と同期回転しているから、いつも天の一角に浮いているのよ」

背後から投げかけられた声は、忘れようとしても忘れられぬ少女のそれであった。

―セダ。君だね。こっちに来ておくれ」
「いや。恥ずかしいもの」
「僕はあまりにも長く眠りすぎた。君の顔さえ忘れてしまった気がする」
その言葉に許嫁は機敏に反応した。小走りで回り込むと湯船の側に片膝をつく。そして彼女は全裸であった。
「ルゥ。どうです。あなたの脳裏にある私と同じですか？」
「ああ。寸分違わないよ。セダはセダのままだ」
ツタンクアメンは少しだけ嘘をついた。幼名をセダという婚約者は、遥かな過去に別離を体験した時と似通った姿をしていた。剃髪をすませており、体毛も皆無。表情も記憶にあるそれと差異はなかった。
ひとつ気になるのは肌に浮き出している血管だ。あれは新陳機械を体内に移植した副作用のはず。つまりは経年劣化で肉体維持に無理が生

「セダよ。いや……我が許嫁アンケセンアテンよ。僕は君を待たせすぎたようだ。衷心より詫びよう。敗残者となった僕に愛想をつかしたのでなければよいのだが」

「私のルゥ。いいえ……ツタンクアメンよ。宇宙が終焉を迎えるその日まで、私があなたを嫌うことなどあり得ません。待てと言われれば三千年でも三億年でも待ちましょう。

それから私も名を変えました。アンケセンアテンからアンケセンアメンに。どうしてもあなたと似た称が欲しかったのです」

「嬉しいことを言ってくれるね。僕もそれに愛をもって応えたい。しかし、この身が再生された理由を聞けば、セダはきっと失望するだろう。

セダとはもっと話をしたい。そして三三〇〇年ぶりに君を抱きたい。残念ながらそれは叶えられそうにない。父上の命令で、僕は戦略顧問

に会わねばならないのだ」
「それならもう会っているじゃありませんか。私です。このアンケセンアメンこそ、地球帰還作戦〝ピラミッド〟を立案した戦略顧問なのですから」
ツタンクアメンは驚きを隠せなかった。確かに生械体（エジプシャー）は皆兵制に近いが、アンケセンアメンは政治家の道に進むものとばかり思い込んでいたのだ。
「平和を愛し、生命を慈しむ君が軍役に就くとはね」
「意外かも知れませんね。でも生命体とは数日で姿形を変えるもの。進化とは起こるべき時に一気に、そして一斉に起こる。私はありあまる時間の流れのなかで悟ったのです。
正解のない問いに応じるには、やはり始祖（ラー）の教えに身を委ねるしかな

いと……」
剱冑(ケペシュ)という武を競う器を使いこなす生械体(エジプシャー)は、戦いを望む種族だと解釈されるケースが多々ある。
それは事実ではない。本気になれば全人類の抹殺も奴隷化もたやすい話だったが、彼らは悪徳を積むことを望まなかった。
理由は明瞭であった。生械体(エジプシャー)は彼らを誕生させた〝始祖(ラー)〟の意志に従うことを是としていたのだ。もはや始祖(ラー)は、神話と伝説の彼方に存在するものにすぎないが、生械体(エジプシャー)はその影響下に置かれている。
与えられた指針はひとつ。『和をもって、戦さを滅す』のみだ……。
「戦いを撲滅し、平穏を確保する至高の手段は、精神から争いという

概念そのものを消し去ってしまうこと。だけどそれは私たちが独立した意識体であることを放棄しないかぎり無理な話ね。肉体はいくらでも改造できるけれど、精神は難しいわ」

アンケセンアメンの声に、ツタンクアメンは完全に同意する。

「だから偉大なる王（ファラオ）は賢明にも次善の策を選んだ。臣民の心をひとつにし、骨肉相争う愚行を避けるためにも外敵は必要だと。僕たちにとって不幸だったのは、設定すべき相手が羽虫しか見当たらなかったことだな」

「そうよ。だからこそ長い眠りが必要だったの。地球人類が進化し、私たちと肩を並べるまで私たちはひたすら待った。そして時が訪れた……」

「戦略顧問としての君に訊く。教えてくれ。アンケセンアメンよ。羽虫たちは本当に強くなったのか？」

「ええ。なったわ。びっくりするくらいに。侮り難い相手よ。なにしろ劒冑（ケペシュ）を持っているのだから」

目を丸くしたツタンクアメンは、考えをまとめながら聞き返した。

「きっと我らが残した劒冑（ケペシュ）を修繕したものだろう。ならば数は少ないし、本来の数分の一しか能力を発揮できないはずだね」

「いいえ。地球人類は独自のものを造りあげたの。それに大量生産にも成功しているわ。推定値だけど万単位の劒冑（ケペシュ）を保有しているみたい」

「野蛮な連中だ。劒冑（ケペシュ）は鍛冶師が命と引き替えにせねば完成しない。きっと大勢の奴隷を鍛冶師に仕立て上げ、強制的に造らせているのだろう」

、」

「それも違うわ。ここ七〇年の調査でわかったの。人類は自らを複製する方法を編み出したらしいわ。生体複製（クローン）と呼ばれる禁断の技術をね」
腕組みをしてからツタンクアメンは言った。
「どうしてそれがわかったのかな」

「捕虜から聞き出したのよ。前回、一二体のアテン球体を出撃させた結果、帰還したのは二体だけ。でも地球の剣冑（ケペシュ）を仕手ごと回収してきた。とても協力的な男性体で、聞かれもしないことまで話してくれると情報部が絶賛していたわ。殺すのは惜しいくらいだって」
「羽虫たちは頭がいいのか間抜けなのかわからん。真に暗愚だとすれば、そのうち向こうから攻めて来るようになるかも知れないが」

「もう何度も来てるわ。無人の偵察船が幾つも冥王（オシリス）の星に接近したけれど、その度に破壊しているの。こちらもアテン球体をずっと投入しているから、お互いさまだけど。ほら、あれがそうよ。ちょうど試験飛行をやっているわ」

天窓の向こう側に、鈍い煌めきを放つ光球が回遊していた。どことなく海月（くらげ）にも似ているが、ツタンクアメンにはそれが神の似姿にしか思えなかった。

「父上にしては不信心な真似をなさるものだ。アテン神に似せた偶像を飛ばすとは。それも大量に製造しているのだろう。唯一神の御名を汚す行為になりはしないかな」

「仕方ないわ。人類に対し生械体（エジプシャー）という存在を宣布するには、わかり

やすい象徴が必要とされたの。理解させることも一種の慈悲よ」
「そうか。羽虫たちの反応はどうだい。さぞ恐れおののいているだろうね」
「最初は無視されたわ。何度アテン球体を地球に送っても、目の錯覚だといって信じようとしなかったの。都合の悪い真実から目をそらす悪癖かと思ったけれど、どうやら政府が真相を秘匿していたみたい」
「なるほど。下級市民は暗愚で現実を受け入れられないと見下しているわけだな。傲慢な統一国家がしばしば行き着く先だ。
しかし僕たちの存在が連中の団結力を増したのも間違いない。外敵の存在がなければ、国家や民族の統一などできはしなかったはず。羽虫とはいえ、いちおう生命体だ。互いを高めあう行為には意味があると思いたい」
「ルゥ。あなたは誤解しているわ。地球人類は私たちという脅威を目

の前にしても、まだ統合政府を発足させるには至っていないの。同族同士で啀み合いを続けながら、私たちに牙を剝いているのよ」

「まさか！　それでは戦うどころではあるまい。各部族や都市がバラバラの状態で我らに立ち向かっているとでも？」

「月に居住する勢力はかろうじて結束しているわ。傭兵的な組織を編成し、アテン球体をいくつも撃破しているの」

湯船から片手を出し、軽く額を押さえてから、ツタンクアメンは言った。

「寝起きの僕には重い話題だ。頭痛がしてきたよ。羽虫どもは恐ろしく愚かであり、同時に脅威だ。極端な戦闘民族に進化したらしいが、その力を僕が見極めてやらねば。連中の劒冑と刃を交えるのが不安な

がらも楽しみだ」
血に飢えた自らの台詞に股間が敏感に反応した。アンケセンアメンも男性機能の回復に気づき、かすかに頬を綻(ほころ)ばせた。
「もうすっかり元気なようですね。神話のオシリス神も冥府から再生を果たした時、その性器は魚に食われていましたが、後にイシス神にホルスを産ませています。私も早く同じ僥倖(ぎょうこう)に預かりたいものです」
彼女はツタンクアメンの耳元に唇を寄せると、小さくささやいた。
「でもね、ルゥ。その前に来て欲しい場所があるの」
「ベッドなら喜んで同行するよ」
「違うの。この湯船を満たす原初の水(ヌン)を採取した第一衛星(アヌビス)よ。あそこには、あなたにしか見せられない劔冑(ケペシュ)が隠してあるの……」

3

地球の月より一回り小さい冥王星は、身分不相応にも五つの月を持っていた。

ニクス、ヒドラ、ケルベロス、ステュクス、そしてカロンである。

中でも最大の衛星として君臨するカロン——生械体（エジプシャー）は第一衛星（アヌビス）と呼んでいた——は、冥王星より一九五七〇キロの彼方を公転している。

直径は一一八六キロ。これは冥王星の半分近い数値である。相関距離も狭く、二重惑星と呼んでも差し支えなかろう。

惑星と衛星との対比がアンバランスなのは、地球と月との関係に近いとも言える。太陽系第三惑星と、もと第九惑星には、こうした奇妙な共通項が散見されるのだ。

共通項が散見されるのだ……

冥王の星が有する薄いメタンの大気を突破し、四角錐の物体が低軌道上に姿を見せた。

生械体が〈ベンベネト〉と呼ぶ往還機である。全自動で飛行し、アヌビス到着まで地球時間で六〇分とかからない。

乗客はツタンクアメンとアンケセンアメンだけだ。二人は視直径を増していくアヌビスを眺めながら、思いの丈を語るのだった。

「まだこんな古くさい代物に頼らないと駄目なのかい。僕の死から三世紀を経ているのだから、軌道塔くらい建造していなければおかしいだろうに」

未来の夫君の文句に、アンケセンアメンは鋭く返す。

「占い、あるいは祈り、あるいは同じくらい、大切にしないといけないよ。た

「古いものは新しいものと同じくらい大切にしないといけないわ。そ
れに軌道塔は需要がないのよ。都市国家アケトアテンに居住する私たち生械体(エジプシャー)は一〇万。そのうち起きている者は一万八千だけど、すでに一〇億年単位で生かすに必要な資源は貯蔵してあるの。ほとんどの民は瞑想と芸術で欲求を満たしてしまうし」

「それじゃ戦える者が少ないというわけか。数こそ力であり、力こそ正義に通じる道だというのに」

死を超越してしまうと、子供をつくろうとする欲求は薄れてしまう。生械体(エジプシャー)はもともと少数精鋭であり、人口減少は半ば覚悟せねばならないが、これほどまで頭数が減っていたとは想定外だった。

アンケセンアメンは静かに事実を告げた。

「王(ファラオ)も憂慮しておられます。だからこそ剱冑(ケペシュ)を甦らせたら最高の支

倆を持つルゥを起こしたのですよ」
「負託には応じたいものだ。それには頭と尻に馴染む剱冑(ケペシュ)が要る。懐かしの〝ケプリ〟があれば百人力なのだが、もう手に入らないだろうなあ」
「諦めるのはまだ早いかも知れませんわよ。ほら、あそこに着陸しますね」
二人を乗せた〈ベンベネト〉はアヌビスに急接近し、その軌道を半周すると、北極近くを目指して降下を開始した。
表面のそこかしこに銀の光沢が見える。原初の水(ヌン)が氷結した湖面らしい。なかでも両極の面積は広大であった。降下先はそこに設けられた採掘場だ。銀色の小さなピラミッドが点在しているのが見えた。
その天頂部分は切り取られている。〈ベンベネト〉はその一角に降下

し、まるで蓋をするかのように停止した。もともと〈ベンベネト〉はピラミッド最上部に据えられる飾り石のことである。
「ここは空気が薄すぎるの。いちおう酸素錠を舐めておいて」
生械体（エジプシャー）は人間のような呼吸を必要としていない。肺も残してはあるが、発声器官としての役割のほうが強い。数日に一回の割合で酸素錠を口にすれば充分だった。
ただしミイラからの再生直後だ。体調は乱れていて当たり前。ツタンクアメンは素直に指示に従った。
「ここは氷結した原初の水（ヌン）の切り出し現場よ。ピラミッドの外壁素材も、氷のブロックで覆われているわ。いちばん純度の高いものが採取できるので重宝されたけど、いまはもう使われていないの」
先行するアンケセンアメンを追いながら、ツタンクアメンは質問をぶつけた。

つけた
「大陸ごとに差はあるが、地球でも原初の水（ヌン）は取れる。羽虫が劒冑（ケペシュ）を打つようになったのも自然の流れかも知れないな。侮り難い相手に成長してくれたのは面白い。斥候探査機もすでに来たのだったね」
「ええ。撃破した破片を分析したけれど、技術的に見るべき点は無かったわ。速度も遅かったし、到着まで一〇年はかかったんじゃないかしら」
「つまり羽虫どもは、地球と冥王（オシリス）の星を結ぶ〝始祖（ラー）の関門〟は発見していないと？」
「たぶんね。けれど確証はないの。見つけたけど怖くて手を出せないのかも知れないし、あるいはもう使っているのかも。通過物体があまりに小型なら察知できないから。

確実なのは、地球と月を結ぶ関門に盛んに運用していることくらいよ。月には兵士以外の民の入植も始まっているわ」

「羽虫どもは火星（ホルス）に上陸したのかい？」

「まだみたいね。小惑星の有人探査は実例があるけれども」

「きっと月に資材を集中し、軍事施設としての色合いを濃くしているのだ。打ち砕くには強靱な劍冑（ケペシュ）が必要になる。それで、どこにあるんだ。僕だけに見せたい劍冑（ケペシュ）は？」

「重力拡散の間に保管してあるわ。正直なところ対処に悩んでいたの。受け入れ難い事実ですから王（ファラオ）にさえまだ伏せてあります。上手に伝えないと、激高して廃棄命令を頂戴するかも知れませんから。見せるのはあなたが最初。まずはご覧になって帯刀するかどうか決めてくださいな」

細長い通路が急に右側に折れた。行き着いた先は高い天井を持つ空間であった。光源は薄暗いが、生械体（エジプシャー）は可視光線だけでなく、赤外線も映像として認識できるため、不都合はない。
そこでツタンクアメンは見た。立ち竦む懐かしき相棒を。金と青と赤で塗られたそれは聖甲虫（スカラベ）を模した聖なる劔冑（ケペシュ）。かつて彼が使いこなしていた一領である。
「間違いない。僕の〝ケプリ〟じゃないか。しかし、どうしてここに？　母上との決闘で敗れ、大破していたはずだ。修復したとしてもここまで綺麗にはならないぞ」
近づいてよくよく検分すると、細部が記憶と異なっていた。劔冑（ケペシュ）は芸術品そのものだが、細工の精度は格段に引き上げられている。全体的

なシルエットに変化はないが、やや大型化していた。手足も伸び、地上戦における身のこなしは軽そうだ。
「これは新型だ。新しく打ち直したのか？」
すぐにアンケセンアメンは真実を寄越した。
「いいえ。この劒冑（ケペシュ）は三三〇〇年前に地球で打たれ、エジプトの〝黒きピラミッド〟にて保管されていたものです。ルゥが愛用していたケプリの二号（セネウ）ですわ」
「アテン球体を飛ばし、わざわざ回収させたんだね」
アンケセンアメンは無表情で首を横に振った。
「この騎体は独力で冥王星にやって来たのです。そして仕手は地球人でした……」
「冗談はやめてくれないか。劒冑（ケペシュ）はたしかに宇宙空間での生命維持に

も役立つが、速度はたかが知れている。冥王の星まで到着するのに何十年もかかるだろう。羽虫の寿命は尽きてしまうぞ」
「お忘れですね。ケプリには仕手をミイラ化して長期保存する陰義があることを」
「ならば仕手は？　羽虫のミイラが手に入ったのかい？」
「そうです。ほぼ完全な形で回収できました。二十代の白人男性ですわ」
「ふむ。物真似しか能のない羽虫の中にも根性が据わった戦士が生まれたのか。捕虜として情報源になるだろうから、ぜひ再生して欲しい」
「情報は手に入らないわね。彼が故郷を離れたのは七五年も前なの。現在の地球に関する知識は絶無でしょう」
驚くべき真実にソタノクアメノも言葉を失った。アノテヒノアメノが

補足を続ける。
「多分ですけれど、この男は冥王（オシリス）の星を目指したのではなく、漂流して到着したというのが真相でしょう。彼が戦士だという確証はありません。これは想像だけど、純粋な探検者じゃないかしら」
「宇宙に行けるのであれば、片道でも構わないという命知らずが、エジプトでこの劔冑（ケペシュ）を発掘し、帯刀の盟約を結んだのか。本当だとすれば物凄い執念を感じるが、真相はケプリに直接訊けばわかるだろう」
「それが困難なの。このケプリは情報提供を拒んでいるのよ。聞き出す態度が気に入らなかったのか、最近は沈黙したままよ。だからこそルゥに来てもらったの。もともとはルゥの専用騎。あなたとならきっと話をするわ」

好奇心を刺激されたツタンクアメンは、剣冑へと歩み寄り、黄金の頭部を張った。
金属が打ち鳴らされる快音が周囲に鳴る。
「目覚めよ！　古（いにしえ）より舞い戻りし剣冑（ケペシュ）に命じる。我が名はツタンクアメン。エジプトを統べる王（ファラオ）アクエンアテンの子なり。汝がケプリの二号（セネウ）であるなら、余のために打たれた一領であるはず。ならばその重き口を開く義務があろうに！」
剣冑が金属生命体に近い存在であることは疑う余地もない。そして凶刃（はがね）には鍛冶師の魂が人格として宿る。王子がここまで命じれば、なんらかの反応があって然るべきだ。
そして――目が、光った。
切っ先鋭い指先が持ち上げられ、ツタンクアメンの頬を撫でた。その刹那、剣冑（ケペシュ）の総身に電撃が走ったようだ。

《……吾は〝ケプリ〟なり。ここに王子の帰還を認める。真の王子の帰還を……》

ケプリは明らかに感動し、動揺していた。すかさずツタンクアメンはたたみかける。

「余も長き眠りより目覚めたばかり。かつて盟約した剣胄（ケペシュ）もすでになし。いまこそ帯刀の儀を結び、我が凶刃となるがよい」

その誘惑に、ケプリ二号（セネウ）は一瞬だけ身動ぎ（みじろぎ）したが、やがてこう宣言した。

《然れど吾は王子ならざる者と盟約を結んだ。その地球人との盟約を切らぬかぎり、次の仕手を受け入れること能（あた）わず。たとえツタンクア、、、テン本人の懇請であろうとも》

「その名は父上に取り上げられた。以後はツタンクアメンと呼ぶがよ

い。ケプリよ。貴様が仕手に操を立てているのはわかるが、かの者はまだミイラのままなのだ。再生するか否かは王（ファラオ）がお決めになる。天の時を受け入れぬのは愚者の道ぞ」

《……あり得ぬ。吾のミイラ化過程に問題はなかったはず。復活は容易なはず。吾は王子ならざる地球人に約した。病理を癒し、不死を与えると。もしも吾の仕手に危害を加えているのならば、一暴れしてでも奪回し、約定を果たす覚悟。盟約を違えるは劍冑（ケペシュ）としての自己否定なり……》

物騒な物言いにアンケセンアメンが横から口を挟んだ。

「落ち着いて。あなたの仕手の躰は大切に保管してあるわ。王（ファラオ）のお許しがもらえれば、すぐにでも人間に戻せるから。でも、こんな所で

暴れたりすれば、あなたを鋳潰せと命令されるかも知れないわよ」
ツタンクアメンもまずは相手を落ち着かせることに注力した。
「焦る必要はない。相手がいない者同士、暫定的に手を結ぶことはできるはず。仮盟約を結んだ剱冑（ケペシュ）の前例もあろう。僕は地球に戻る。お前の力がなければ戦えぬし、勝つこともできぬ。どうか手を握ってくれ。手柄を勝ち得た後であれば、王（ファラオ）の覚えもめでたくなり、それが仕手の命を繋ぐ道になろう」
暫しの間、沈黙を守ったケプリであったが、やがてこんな金打声（セジェムネベウ）を発してきた。
《王子のために打たれた剱冑（ケペシュ）として、王子の懇願は無視できぬ。待ちきれなかった吾にも咎（とが）はある。よろしい。了承した。真の仕手との盟約が戻る時まで、吾は王子に武を供することを厭わない》
ツタンクアメンは背筋を伸ばし直し、威厳を込めて通達する。

ツタンクアメンは背筋を伸ばし直し、威厳を込めて通達する

「生械体の王子として、そして新たなる仕手として約束しよう。戦場でお前を失望させることは絶対にないと」

次に許嫁に視線を投げ、厳しい口調を崩さずに通達した。

「戦略顧問にも頼みたい。戦いは数である。地球圏へ武をもって回帰するには、どうしても劍冑が軍団単位で必要となる。編制にどれくらいの時間が必要か？」

表情を軍属のそれに改めたアンケセンアメンが応じた。

「王が命令を下せば、百日ですべての生械体を戦士として地球圏に送り込めます。しかしそれには勝利が必要です」

「どうしてかな？」

「神官団が王の強権発動に反対しているのです。万一にも敗北すれば、生械体の滅亡にも繋がりかねないと。彼らを黙らせるには戦果を

得るしかありません。
王子よ。基本作戦はすでに決定しています。まずもって攻めるのは月。あの地を解放し、進軍の足がかりとします。そのための一番槍をお願いしたいのです」
「望むところ。戦略顧問の命令に賛意を現す。僕はライオン(ルウ)としての役目を果たすから、君は白鷺(セダ)として常に清廉であってくれ」

4

それから七二時間後――。
冥王(オシリス)の星は祝賀の色に彩られていた。出征する王子を称えようと、生ある者はすべて空を見上げ、進軍開始を待ち侘びていた。

ファラオ

やがて式典が始まった。首都アケトアテンの随所に王の演説が響く。

『我が愛する臣民に告げる。帰郷の時が来た。長き眠りより目覚め、地球に戻る日が到来したのだ。地球を預けた人間どもに、契約更新の拒絶を通達しようではないか！』

万雷の拍手の後で、アクエンアテンの朗々とした名調子が続く。

『思えば地球人類も幸せである。三三〇〇年もの間、惰眠をむさぼり、同族で戦乱に明け暮れていたようだが、我ら生械体(エジプシャー)の再来と共に彼らも一致団結できる。これもまた慈悲である。彼らには滅びの美学を存分に披露してもらおう。

敵は節操なく増え続け、現在の総勢は七〇億以上。しかし、地球には

それだけの人口を食わせるだけの余裕などない　間引きが必要だ　隷従を誓う者を一割程度残し、後は殲滅(せんめつ)させねばならぬ。非活性状態に置かれた八万二千の臣民を起こせ。我らは一〇万の大軍となり、皆兵態勢で地球になだれ込むのだ！』

息子は衛星軌道上に待機しつつ、威勢のよすぎる父の演説を聞いていた。装甲を終えたケプリ二号(セネウ)が感動しきった金打声(セジェムネベウ)を寄越す。

《王(ファラオ)は御健勝でなにより。アケトアテンの街も昔のままだ。吾はここで打たれた。よもや冥王(オシリス)の星にそのままの姿で置かれていようとは……》

ツタンクアメンは淡々と返した。

「変わったのは生械体(エジプシャー)の精神(こころ)だけだ。過度の眠りで牙が折れてしまった。冒険を望む者は少なく、戦乱を求める者はさらに少ない。王(ファラオ)が権勢を発揮しなければ、種族の大移動など叶わなかっただろう」

《王子。吾は光栄に思う。武を存在意義とする剱冑の一領として、意義ある大戦の尖兵となれたのは誉れなり。真の仕手が目覚めた時には手柄話ができるというもの》

「お前は積極的だな。僕と気が合いそうだ。選んでよかった」

出撃の際、彼の父ことアクエンアテンは、自らが愛用していた〝マアト〟の剱冑を譲ってもよいと話したが、ツタンクアメンは断った。やはり慣れ親しんだケプリでなければ、動きが鈍るからと。

剱冑には肉体変成の術式を持つものもいる。部分的な変化だけでなく、人間の姿に化けられる騎も珍しくない。ケプリ二号も独力で手直しをした結果、新型のそれと見分けがつかないまでになっていた。

また戦略顧問のアンケセンアメンが、かねてから用意していたツタン

クアメン専用騎として二号を紹介したため、不信感は持たれなかったようだ。
そして王（ファラオ）の演説はなおも続いている――。
『臣民に告げよう。我ら王族は、どこぞの神官団とは違い、後方で安寧を欲しない。皆の手本となり、まっしぐらに戦場へ突き進む所存だ。第一次挺進隊の指揮官を紹介しよう。我が息子のトゥト・アンク・アメンである！』
割れんばかりの歓声が首都を見たし、上空に花火が舞った。
「父上。送別の儀、まことに痛み入ります。いちどは死んだ身に汚名返上の機会をお与え下されたことに万謝し、御恩に報いるため、再び死地に参ります」

『おお、一足先に行くがよい。そして決して忘れるでないぞ。お前のすぐ後ろには一〇万の生械体が続いていることを』

求められた問いと予定された答えだが、それを耳にした市民は感銘を受ける。施政者とはこうした演技にも対応しなければならないようだ。

世の中を単純化したいと考えてやまないツタンクアメンは、単純化が容易な場所へと騎首を向けるのだった。

戦場へ。

武を競うことでのみすべてが決着する場所へ。

「セダ。聞こえるか？」

戦略顧問はすぐに応じた。

『ええ。盗聴防止回線で接続しているわ。私はルゥの……いえ、殿下

の出撃を誇りに思います。征く先に御武運のあらんことを。
それからケプリに伝えておきます。仕手の地球人だけど、再生の目途がつきましたよ。絶対に殿下と一緒に戻って来て。そうすれば話をさせてあげます』
《委細承知。誓って生還を期す》
先を越されたツタンクアメンは、愛する許嫁にこう続けた。
「どうやら帰還と同時にこの劔冑（ケペシュ）とは別れることになりそうだ。新しいのを用意しておいて欲しいね。じゃじゃ馬でもいい。最強の一領を」
『大丈夫。王（ファラオ）の〝マアト〟すら凌駕する超大型の劔冑（ケペシュ）を準備中ですから。きっとあれを見たら驚くわよ』
「そいつは楽しみだね。もっと話したいけど、そろそろ時間だ。行ってくるよ。戻ったら絶対に盛大な結婚式をあげよう」

『もう。ずるいですわ。こんな時に殺し文句を言うだなんて……』

そして――地球公転軌道と冥王星とを繋ぐ〝始祖（ラー）の関門〟が開いた。どこまでも広がる太陽系に掘られた時空のトンネルである。

突入したのはツタンクアメンが操るケプリ二号（セネウ）だ。

その背後に付き従うのは一〇八体ものアテン球体だった。その任務は偵察から殺戮へと切り替えられており、戦力は桁違いに向上していた。

帰郷へ向けた生械体（エジプシャー）の第一撃は、ここに解き放たれたのであった……。

第三編

敗残騎

——THE LOSER CRUZ

1

自分がここにいるべき存在でないと知った瞬間、人間は疎外感を抱く。

野蛮な同調圧力に迎合するのは、尊厳さえ捨て去ればたやすいことである。組織という泥濘を泳ぎ切るためには、そのほうが望ましい場合も多い。

暗愚な上司には、暗愚な部下としてふるまうのが賢明。蒼海三樹夫（そうかいみきお）は本気でそう考えていた。かつて融通を利かさず、組織を放逐された過去を持つ身としては、同じ失敗を繰り返すわけにはいかなかった。

大切なのは、迎合が演技だと露呈しないようにすることだ。下卑た相手の場合、自分に合わせてくれたと感謝することなどない。小馬鹿に

されたと怒り狂うのがオチである。
埋没こそ保身の策と考える三樹夫にとって、疎外感とは注意レベルを引き上げよと告げる心の警鐘であった……。

行き交うは罵声と酒瓶。そして叫声と缶ビール。壁に一九九〇年産のシャトー・マルゴーが叩きつけられ、それを合図にうたがきこえた。行かないで、逝かないで。またここへ戻って来て。水も空気もないけれど盆のような月世界へ。兵隊の調子外れな囃(はや)し声と壇上で唄う歌手の旋律で構成された耳障りなハーモニー。トコトントコトン。踊り狂う者たちのステップは月震かと思うまでに床を揺らし、怒号は空気のない外界にまで届きかねない勢いだ。高値をふっかける商売女との値切り交渉がそこかしこで展開され、口論はすぐに喧嘩へと移り変わ

り、握りこぶしが頬をかすめて飛び、足技が骨を砕く。プロレスラーにしか見えない男がプロレスごっこと称して関節技をきめ、無関係を装う兵が喝采を叫んだ。痛いわ痛いぞ痛えようおやめ下さいお客さまどうかやめてください店が壊れます次の出撃の前にお勘定をすませてなにを言ってるんだそれじゃこっちが戦死すると決めてかかっているみたいじゃねえか。

大衆酒場『一週十日』は今日も大盛況であった。

この盛り場は神酒(マレネクタリス)の海の中心都市であるバッカス・シティに位置しており、顧客は軍属ばかりだ。ピレネー基地(ベース)が隣にあり、十字軍(クルセイダーズ)所属の兵が多かった。連中は金払いだけはいいが、団体さまが到着する度に店が半壊してしまうため、収支はトントンである。

女主人の稲田(いなだ)ミドリは何度も閉店を考えたが、それをやれば借金を返

せない。月面在住許可を剝奪され、地球へ強制送還されてしまうだろう。月世界は実力主義のエリート集団だが、それは才覚だけでなく、財力にも適用される。まさしく地獄の沙汰も金しだいだ。

三樹夫も、そんな店主の悩みを頭の隅で理解してはいたが、同情以外にしてやれることはない。いまは火の粉が己に降りかかって来ないように手を打つだけだった。

「もう決心はついたか。お前は俺たちのブロンズ隊に志願する。そうだろ?」

安酒と二酸化炭素がまぜこぜになった息を吐きながら、幡田角蘭(ばんだかくらん)少佐が訊ねた。

「お前のような狙撃の名手ならば副隊長の座を用意してやれる。十字軍(クルセイダーズ)に入隊した以上は、やはりトップを狙っているんだろう。戦果を積むことは、最前線に引っ張り出されることの多いブロンズ隊がべ

ストなんだぞ」

三樹夫は、アルコール度数が極めて高いマイケルギョギョッペン・ビァを飲み干した。酒臭い息の割に、酔いはちっとも回らない。血管に常駐させている魚雷型ナノマシンがアルコールを片っ端から分解しているのだ。

「そりゃ俺だって同じ大和人の少佐殿をリーダーとして仰ぎたいですよ。しかしですね、ゴールド隊のレイス中佐が先に勧誘してきたんです。十字軍（クルセイダーズ）の中でもベストと言われているグループにスカウトされたら、ちょっと断り難いですよ」

「ほう。そりゃあブロンズ隊を敵に回すという宣言と解釈せざるを得んな。出撃の時にはせいぜい背中にも気をつけることだ。新入りは知らんだろうが、以前はシルバー隊という精鋭部隊があったんだがね。

連中は戦闘中に同士討ちを始め、全滅したんだよ」
返答は留保し、沈黙を決め込んだ。正解のない問いかけに応じても、揚げ足を取られるだけだ。
反論よりも面白くない三樹夫の行動に、幡田少佐は別方面から説得を続ける。
「あのなあ。レイスはゲイだぞ。お前の腕前じゃなくて、肉体が欲しいだけだ。特に奴はお前のような眼鏡男に目がないんだ。ゴールド隊は都市国家テーバイの神聖隊（ヒエロスロコス）を手本にしている。わかるだろ？　野郎同士がつがいになった変態集団だよ」
十字軍（クルセイダーズ）に在籍している者に同性愛者は多かった。多くの地域で、男女以外でも婚姻が認められるようになって長いが、幡田の話に信憑性

があるかどうかは微妙だ。
少なくとも七年前にそんな事実はなかった。悪しき記憶と格闘しながら、三樹夫はこう言い返す。
「ゴールド隊も副隊長の席がちょうど空いているとレイス少佐が話してくれました。それからこうも言っていました。ブロンズ隊は小児性愛（ペドフィリア）の変態集団だって。あんな連中とつるんだら皮膚科と精神科に日替わりで通わなきゃならないと。医者は苦手なんですよ。この目玉のおかげで眼科には世話になってますけど」
幡田の顔が赤らんだのは酒のためだけでも怒りのせいだけでもあるまい。それが真相に肉薄していたからだろう。同じ変態同士、仲良くすればいいのに。
突出した才覚を持つ者は人格的に破綻している例が多々ある。実力と

実績を併せ持つ者でなければ入隊できない十字軍（クルセイダーズ）も似たようなものだ。その称号を持つ者は三〇〇名前後に抑えられているが、まともな性癖を持つ者が何人いるだろう。

エリート集団として宣伝されている十字軍（クルセイダーズ）だが、その内幕は正規軍の兵士もよく承知していた。現に『一週十日』にブロンズ隊が入店した時、あからさまな拒絶の空気が流れたではないか。

幡田少佐が忌々しげに言う。

「レイスめ。噓八百並び立てやがって。いまごろ突撃戦艦〈ガレーキープ〉で習熟訓練中だろうが、ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）で殴り込みをかけてやりたい気分だ。部下を地獄へ蹴倒した能なしのくせに！」

場を凍りつかせる一言であった。規格外の音量に誰もが口を閉ざし、動きを止め、店内は水を打ったかのように静まり返った。

[illegible]
どれほど豪胆な軍人でも戦死の恐怖は常につきまとう。昨日まで隣にいた戦友が今日はいない。しかも明日は我が身だ。酒の場とはいえ、幡田の発言は失言であった。
「殉職したビッグ・ライター大佐のために！」
誰かが二階級特進した死者の名を読み上げ、グラスを掲げた。あちこちで静かな乾杯が交わされる。
職業柄、死に敏感な人々が示した憐憫の情だった。この場がそれで丸く収まればいいのだが、あまりにも愚かな台詞がすべてを台無しにしてしまった。
「しんみりさせるんじゃねえ。葬式じゃねえんだぞ！」
ブロンズ隊の内裏金輔(だいりきんすけ)中尉だ。幡田が三樹夫をスカウトすれば、副隊長の彼は自動的に職を失う。三樹夫にとっていちばん絡みづらい相手

だ。酒が入っているためだろう、内裏はやり場のない怒りを方々にぶつけていく。
「正規軍の連中に言っておくぞ！　お前たちが十字軍(クルセイダーズ)の痛ましい犠牲を悼むなんざ一〇年早いんだよ。貴様たちの働きがしょぼいから、こっちが無理に無理を重ねなきゃならず、結果としてライターは死んだんだ。お前ら正規軍が殺したも同然だ！」
空気を無視した暴言に三樹夫は冷や汗を垂れ流すのだった。トイレに逃げ込み、疎外感を堪能したいところだが、緋色の襟章がそれを許してくれそうにない。
カウンターの角で飲んでいた正規軍の大尉が、怒気を交えた声をあげる。
「こっちにも戦死者が大勢出ているんだがね。第八二空挺猟兵旅団(ダークサラマンダー)の

第二大隊（セカンド）は全滅したんだぞ。あんたたちの救援が遅かったからじゃないのか」
それに反応したのは遠野斤洲（とおのきんす）少尉だった。三樹夫と同じ歳と階級だが、どうやら知性と把握スキルは一段階下らしい。
「こっちの命とそっちの命は等価じゃない。十字軍（クルセイダーズ）の兵士をひとり育成するのに、正規軍の兵士二〇人分の金と時間がかかっているんだ」
次に、知性派と紹介を受けていた呉井修市（くれいしゅういち）准尉が賢（さか）しらな口をきいた。
「我らと諸君では働きが違う。それなりの待遇が与えられて当然。現に我らは戦死一名で一〇体のアテン・ボールを叩き落とした。ここにその立役者がいる。巧みな狙撃で危機を救ったのは、新人の蒼海三樹

夫中尉だ。月に到着と同時に手柄をたて、早速昇進を果たしたという偉人である。以後も十字軍（クルセイダーズ）の助力が必要であれば、それなりの態度を示すのが賢人の道であろう」

まずい。俺をそっちの輪に引っ張り込むんじゃない。三樹夫は無表情を装ったが、注がれる視線の量は半端ではなかった。まるで珍獣扱いである。

やがて正規軍の大尉が吐き捨てるように、

「月面で待ち伏せしていただけだろうが。潤沢な育成費をかければ、誰だって奴みたいな真似くらい……」

不用意な挑発を内裏は聞き逃さなかった。地球の六分の一しかない重力下で巧みに足を操り、数秒で正規軍大尉の眼前に額を寄せた。

「仲間への侮辱は十字軍（クルセイダーズ）全体に対する侮辱だ」

[illegible]力を[illegible]することは[illegible]だ。十字軍（クルセイダーズ）のメン

剣冑の使手として力を発揮するには格闘術が必須だ。十字軍のメンバーはその全員がマーシャルアーツを極めていた。
内裏中尉はナノマシンによる筋肉増強施術を受けており、首が異様なまでに肥大化している。それが繰り出す頭突きは驚異的だった。正規軍の大尉は顔面に一撃を食らい、盛大に鼻血を吹き出すと、スローモーションで仰向けに倒れた。

「貴様……上官に暴行を働くとは……ぐ、軍法会議に……」
内裏中尉は相手を見下せるだけ見下すと、
「十字軍（クルセイダーズ）は連盟航宙自衛軍（スターミィ）の一組織であると同時に独立性も確保している。指揮階級の優位性も認められているんだ。それを認識できなかった自分を恨め！」
店内には五〇人以上の正規軍兵士がいたが、内裏中尉の剣幕に押されたらしい。肉体を凶器とする彼らに喧嘩を売るほど無謀な輩はいな

かった。辺りを嫌な沈黙が支配する。
それが内裏中尉の逆鱗に触れた。倒れた正規軍大尉を介抱しようと、兵士二名が寄ってきたが、彼はその顔に見事なミドルキックを叩き込んだ。
「腰抜け野郎どもめ。ひとつ教えてやる。戦場じゃ怪我人なんか見捨てろ。そうしないと生き残れんぞ。どのみち月は戦場となるのだからな」
理不尽を言霊に乗せたかのような台詞に、正規軍兵士は戦意と酒欲を喪失した。彼らは白けた表情で、三々五々と店を後にしていく。
遠野少尉がせせら笑うと、嫌みな口調で言った。
「勝てない喧嘩は他人任せかよ。いかにもお前たちらしいな。けれどもそれが利口だぜ。十字軍(クルセイダーズ)と乱闘騒ぎなんか起こしたなら、あとあ

と面倒になるぞ。こっちの騎体は出動してもなぜかコンディションが最悪で、引き返す率が激増することだろう。だって仕方がないよな。偶然にも故障するんだから」
呉井准尉が相手の背中に言葉を投げた。
「法的機関に訴えても実効性はない。十字軍（クルセイダーズ）の法務部は無敵の弁護士軍団を擁している。控訴に次ぐ控訴で判決が出るのは早くても二〇年先になろう」
最後に内裏中尉が苛立たしげに話した。
「倒れてる三人を片づけていけ。もう手出しはしない。負け犬を蹴飛ばすほど、こっちも悪趣味じゃないからな」
そして隊長の幡田少佐は沈黙したままだ。別に落ち着き払っているわけではない。手も口も挟まなければ、責任回避が楽になる。それを見越して行動に決まっている。

起した行動に決まっている

こいつら懲りないな。七年前と同じだ。なにひとつ変わっちゃいない。

三樹夫はそう判断した。だが悪くない。かえって好都合。顔と名前と遺伝子情報を書き換えてまで十字軍（クルセイダーズ）に再入隊したのは、内部からはらわたを食いちぎるためなのだから。

その時だった。

退店しようとする一団から小柄な女が抜けだし、歩み寄ってきた。顔立ちは幼く、軍服も着こなせていない。まだ一八歳にもなっていないだろう。前髪の下に光る双眸は、怒りと悲しみで濡れていた。

「十字軍（クルセイダーズ）は英雄部隊のはずです。精鋭中の精鋭だと育成学校で習いました。異星の敵に立ち向かい、ずっと負けを知らない常勝軍団だ

」

ベテランらしい古参兵が彼女の腕を引っ張る。

「コーセィ准尉候補生。もうやめろ。愚連隊(ラフネックス)にはなにを言っても無駄だ」

しかし彼女は手を振りほどくと、半泣きでこう叫ぶ。

「でも嘘でした。あなたたちみたいな屑(くず)が十字軍(クルセイダーズ)だなんて！　私は十字軍(クルセイダーズ)に憧れ、その戦いを信じ、その正義を信じ、その道を信じたのに！　英雄はどこにいるんですか！」

三樹夫は、すぐにその娘の正体を見切った。嚮導竜騎兵(ドラッヘレイアー)師団の育成組織で純粋培養された新兵だと。

正規軍最強と謳われるその師団は、才覚ありと判断した一〇歳前後の子供をスカウトし、英才教育を授けていた。十字軍(クルセイダーズ)との繋がりも深く、そこから登庸される兵も多い。彼らにとって十字軍(クルセイダーズ)は憧れの的

であり、英雄の代名詞だった。
この准尉候補生もそのひとりだろう。たまに出て来る天才少女という奴だ。そして気の毒に十字軍(クルセイダーズ)でもっとも醜悪な場面を見せつけてしまったわけか。
半泣きの少女に、三樹夫は声をかけた。
「英雄や正義の味方は、もうどこにもいないんだよ。強いて言えば、生き残った奴が英雄であり、勝った奴が正義の味方だな。それを受け入れられないのなら、軍人の道は諦めることだね」
大人としての発言に、少女は純粋さで叛逆する。
「手柄を立てれば非道も当然ですか。こんな連中に媚を売るくらいであれば、戦って散るほうを私なら選びます！」

感情が理性を上回ったが故（ゆえ）の発言だったが、酔漢に向けるべきではなかった。杯を重ねていた幡田少佐が、やおら立ち上がると、少女に相対した。

「こんな連中と言ったか。屑と言ったか。ならば屑の恐ろしさを教育してやる。幼年学校で詰め込まれた屁理屈など、実戦ではなんの役にも立たないことを、その躰に叩き込んでやる」

加減のない平手が飛んだ。少女はそれを左手で食い止めようとしたが、豪腕から繰り出されるそれは破壊鎚そのものである。耐えられる理屈などなかった。

彼女は側頭部を強打され、紙人形のように崩れ落ちた。幡田は少女の上半身を抱え上げると、乱暴にテーブルに投げ出し、うつぶせにした。毛むくじゃらの腕が少女のタイトスカートに伸び、下着がまる見えになった。

えとなった
「おい！　蒼海中尉。この小娘とやれ。俺が許可する！」
最悪な幡田の命令に、三樹夫はさすがに尻込みしたが、なおも少佐は続ける。

「一番槍の特権をくれてやろうっていうんだ。ありがたく頂戴しろよ。それともなにか。自分だけいい子で逃げる気か？　十字軍（クルセイダーズ）は一蓮托生だ。すべての戦果と罪は共有しなければならない。それが鉄則だ」
嘘だ。こいつは共犯者が欲しいだけだ。焦燥と動揺を押し殺しながら、三樹夫は思考をめぐらした。
これは大変なことになったぞ。すべてハッピーに導く選択肢がない以上、ここは不幸を最小限にする手立てを考えなければ。

――ここは天童を最大限に生かす手立てを考えなければ
いっそベルトを外してコトに及ぶか。この場で俺の性癖を披露すれば、誰もがドン引きして逃げてくれるだろう。俺ひとりにレイプされるのとブロンズ隊の全員にレイプされるのとでは、少なくとも前者のほうが幾分かマシなはずだ。
三樹夫が本気でそう考えた時であった。
雷鳴のような打擲音が『一週十日』の店舗を揺らした。ドアが破られ、銀色の塊が部屋に転がり込んできた。
それは見目麗しき劔冑（クルス）。三樹夫も愛騎としているズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）だ。
全員があっけにとられて動きを止めるなか、その騎体は大音声を発した。
『私は十字軍（クルセイダーズ）法務上官補佐の黒瀬百合葉（くろせゆりは）であります。[illegible]

『私は宇宙軍法務士官補佐の黒瀬由梨巳中尉である。婦女暴行未遂の現行犯で蒼海中尉を連行する。邪魔立てする者は容赦しないが、拘束に協力する者は罪を減じる』

救いの女神の登場に、三樹夫は敬礼をして宣言した。

「自分は罪を認めませんが、連行には異を唱えません」

これに待ったをかけたのが幡田少佐だった。

「待つんだ。蒼海中尉はまだ暴行に及んでいないだろうが。いまならすべて穏便に収めることができる。事を荒立てると後悔するのは法務部だぞ」

黒瀬騎は幡田に頭部を向けると、こう告げるのだった。

『ブロンズ隊には別件でお話を伺いたい。第八二空間猟兵旅団（ダークサラマンダー）のマルチネス・コーランド中佐が発していた救助要請をどうして無視なさったのだろうか？　この一件はすでに法務次官フォルサ准将より捜査許

可を頂戴しています。軍法会議で申し述べる弁明でも考えておいたほうが賢明でしょう』

やれやれ。またしても面倒なことになったぞ。三樹夫は額の奥に鈍痛が溜まっていくのを感じながら、こう思った。

いっそすべてを単純化できる戦場に身を投げてみたいと。

蒼海三樹夫自身は知る由もなかったが、その捨て鉢な願望が満たされる瞬間は刻一刻と近づいていたのである……。

2

月面都市はいずれも人間が移動することを前提にインフラが整備されている。

ている
そして劒冑の全高は仕手より数十センチ高いだけである。装甲したままでも通行に不便はない。
被害者になりかけた少女を抱きすくめた黒瀬騎は、迷うことなく自衛軍緊急病院に駆け込み、治療繭型寝台（メディカルコクーン）に患者を預けた。自動診察の結果は重度の脳震盪。短期間の入院が必要との見立てであった。
「中尉殿。もう装甲は解除してもいいんじゃありませんか？」
三樹夫はそう言ったが、白銀の劒冑は首を横に振る。
『まだ楽観視できない。ブロンズ隊の連中が証拠隠滅を目論み、この准尉候補生の殺害を試みる可能性がある。いまフォルサ准将経由で査察部に警護を要請した。二〇分弱でここに到着する予定だ』
「連中もそこまで阿呆じゃないでしょう。俺もいますし、心配無用ですよ」

す』」
黒瀬由梨巴は金属質な声音で言った。
『余計に心配だ。この強姦魔（レイパー）めが。監視カメラで一部始終を見聞きしていたぞ。私が突入しなかったなら、この少女は毒牙にかかっていただろう。お前の犠牲者は、この私だけで充分すぎる』
「あれから七日も経つのに、まだ怒ってるんですか。手荒くしたのは詫びますよ。でも俺はああいう愛し方でないと男性機能が十全にならない持病がありまして。それに中尉殿が初めてだと知ってればもっと優しくもできたんですが、見栄を張って経験豊富だとか嘘をつくから……」
『黙れ。思い出したくもない。慈悲を知らぬ獣（けだもの）に慈悲を乞うたのが間違いだった』
そこで由梨巴はやっと装甲を解除した。ズィルバー・シュテルンⅠ（ツヴァイ）

そこで由梨巴はキャノピーと装甲を解除した。アストロバイクのシステムにI
はアストロバイクの独立形態に姿を変え、病室の床に鎮座する。
「それから言っておく。お前も中尉に昇進したのだから、もう敬語など不要だ。撃破数が一体多いだけで位があがるシステムは、まだ改善の余地があるとは思うが」
「了解です。じゃあ由梨巴ちゃんと呼んでもいいのかな？」
「強打して殺すぞ。私が三樹夫と呼び捨てにしたら、お前も怒るだろう」
「別にミッキーでもいいですけど？」
「……以後、私のことは黒瀬と呼ぶがいい。お前のことは蒼海でかまわないな」
「いいぜ。いつかもういちど三樹夫と呼ばせてみせるけど。主にベッドの上で」
[illegible]

冷凍肉を見るような目つきでこちらを睨んだ後、黒瀬由梨巴は言った。

「こんな男に肌を許しただなんて、私の生涯で最大の汚点だわ。人の死を望むのは最低な振るまいだとわかっているけれど、一刻も早く戦場で散って欲しい」

怒りを押し出した由梨巴の態度に、三樹夫は脳裏で計算を走らせた。この女がここまで語るのは、本当に話さなければならない事実を隠しているからではないか？　だとすれば問い詰める必要がある。

「棘のある言葉ですな。それじゃ訊きますが、死んで欲しいと思ってる奴をどうして救助したんでしょう？　『一週十日』の近くで俺を待ち伏せていないと、あれほどタイミングよく出て来られないはず」

由梨巴は一瞬だけ顔を歪めたが、すぐポーカーフェイスに戻った。

「指示されたからだわ。貴方を救助するのが私の任務だった。」

—結果的にそうなっただけだ。彼女を救助するのが私の任務だった

安酒場に張り込んでいたのも、エリカ・コーセィ准尉候補生の護衛のため」

「どこかで聞いた名字だな。ハイ・ポーツマスの市長がそんな名前だったような？」

「そのとおり。連盟航宙自衛軍（スターミィ）中将であり、H・G・ウェルズ基地総司令官のヘローデ・C・コーセィの令孫だ。もし手を出していたら、あなたは再び十字軍（クルセイダーズ）から追い出されていたでしょう」

思わぬ指摘に、今度は三樹夫が焦る番だった。この女、どこまで知っている？

「再びとは妙なことを仰る。俺は月には何度か来ましたが、十字軍（クルセイダーズ）

の一員として認められたのは初めてですよ」
事前の擬装工作は完璧のはず。黒瀬由梨巴中尉も確証は掴んでいないだろう。はったり半分で揺さぶりをかけているだけ。三樹夫はそう判断し、知らぬ存ぜぬを決め込んだ。
「法務士官補佐として単刀直入に訊きます。あなたの経歴には疑問がありすぎる。自衛軍専用ネットの〝ネオ・マミー〟の記録を洗ったけれど、登録された個人データが地球側のそれとマッチしない点が見つかった。修学記録の履修時間数が、ありえない数字になっているわ。通常の二倍よ。まるで同じ学校に二回通ったみたいに」
「俺は民間の劒冑仕手(クルスユーザー)養成所から、自衛軍に半ば拉致されたからね。単なる入力ミスじゃないかと思うよ。改竄の証拠はまだ掴んでないんだろ?」
「そうね。でも痕跡は色濃く残っている。過去の経歴を消す場合、あ

えて政府機関に接近して公式証明を確保するのは犯罪者の常套手段よ。

蒼海三樹夫。それは本名じゃないわね。年齢も二三歳というのは嘘。採取した精液から遺伝子チェックをさせたけれど、二四歳は超えていないとおかしいわ。アテン・ボールを射貫いた腕前から判断して、過去に軍歴もあるはず。そして個人情報の抹消で最も優れているのは十字軍(クルセイダーズ)。過去に戦死または不名誉除隊した名簿を洗っているけれど、まだこれといった成果はないわ。でも必ず尻尾を捕まえてみせるから」

三樹夫は本気で思った。女とは恐ろしいと。ひょっとして抱けと命じたのも、最初からこっちの体液採取が目的だったのか？

「捕まえてどうするのかな。仮に俺が身分を偽っていたとしても、赫(かっかく)

々たる戦果をあげた現実を無視するわけにもいかんはず。自衛軍は俺の技倆を必要としている。たかが書類上のミスで営倉に放り込むほど十字軍（クルセイダーズ）に余裕はない。違うかな？」
由梨巴はこちらを睨みつけていたが、やがてため息を吐き出した。
「悔しいけどそのとおり。あなたが味方か敵かを見極めるのはとても困難。だからこちらも少し手の内を見せることにするわ」
警告音なしにドアが開くと、武装憲兵隊（SSMP）が一二人も室内に入って来た。由梨巴が呼んだ警備の連中だ。彼女はコーセイ准尉候補生の搬送を命じると、三樹夫と目線を合わせた。
「続きは河岸（かし）を変えてからにしましょう。ついてきて」
三樹夫と由梨巴は、それぞれ専用のズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）で移

動した。こうした場合、アストロバイクという独立形態はまことに使い勝手がよい。

揺られること一五分。導かれた先はピレネー山脈の北端だった。グーテンベルク・クレーターの一角に位置する全自動天文台だ。大気のない月面は天体観測には最適である。ここには口径四六〇センチの反射望遠鏡が据えられ、天空の一角を睨み続けていた。

全自動だけあって、基本無人だ。保守点検要員の詰め所はあるが、一年に数回使われる程度であり、今日も人影はなかった。

「使用許可は取っているわ。掃除も終わってる。盗聴器も録音機もないなら話が聞かれる心配はない。ここならゲームを楽しめる。真実というゲームをね」

由梨巴の謎めいた調子に、三樹夫は警戒を強めた。窮地を脱した直後

[illegible]

こそ危うい。それを経験で知っていたからである。

「互いに本当のことだけを伝え合うってわけかい。いいだろう。ただし、そっちから先に頼みたいね」

肯いた由梨巴は計器板の液晶パネルを指先で操作した。強化硝子（ガラス）の向こうでトラス構造の鏡筒がゆっくり旋回を始める。低いモーター音は赤道儀が回転するノイズだろう。

やがて天の一角で望遠鏡の筒先は停止した。モニターにはある天体のリアルタイム映像がディスプレイされていく。

包括的デジタル補正が施されているが、見た目はかなり小さく、地球から肉眼で満月を見た時と同等だ。黄と黒と茶が混濁したまだら模様に覆われたそれは、かつて惑星と呼ばれていた存在であった。

「冥王星がどうかしたのかい。太陽系さいはての準惑星に興味なんかないよ」

「この一五等星がアテン・ボールの出撃基地だとしても？」
思わぬ一言に三樹夫は凍りついた。敵がどこから襲来するのかはこれまでまったくの謎だったのだ。
「信憑性はあるのかい？　可能性だけじゃ話にならんよ」
「状況証拠から推論はあったけど、このたび決定的な証拠が見つかったの。我々はまったく新しい〝盟約の門（トンネル）〟を発見した。それも地球公転軌道上に。先日のアテン・ボールはそこから出現した公算が極めて高い」
驚くべき発言だった。盟約の門（トンネル）は過去七五五年間でひとつしか確認されていない。地球と月を結ぶもの以外にそれがあったとは、まさに青天の霹靂（へきれき）である。
「地球公転軌道といっても広いよ。どうやって観測できたのかな？」

「敵失。赤外線天文衛星〈ホット・ボルト〉が異変をキャッチしたの。アテン・ボールがいちどに一〇体も出現すれば、さすがに重力偏差でわかるわ」
「出口はわかった。でも入口が不明なんじゃないか？　どうして冥王星だと確信が持てるのだろうね」
「探査機をこちらから突入させてみたら、冥王星付近に再出現したの」

「データが得られたのか。以前、大和と合衆国共同で〈ジェントル・ダッシュ〉を飛ばしたけれど、事故で全損しちまったじゃないか」
「事故じゃない。撃ち落とされたの。今回は相手を刺激しないように、もっと小型のものを投入したわ。直径五センチの立方体衛星を」

由梨巴は液晶ディスプレイの一角に賽子状の物体を表示させた。
「極小惑星探査機〈E・ホライズンズ〉――機能は絞られたけれど、役にたってくれた。任務は地球への位置報告と近隣天体への接近および写真撮影。そして自爆……」
「なるほど。相手にこちらが見ていると気づかれないうちに証拠を消すか。それで成果はあがったのかな」
画面が切り替わった。先ほどのリアルタイム映像とは比較にならない鮮明さを持つ映像が浮かび上がった。冥王星の精細な立体地図だ。
「ハート型の地形の一角を拡大するわ。見て。明らかな人工都市よ。遺跡じゃないわ。光量から判断して、この街は生きている」
三樹夫は軽く口笛を吹いた。地球外文明との遭遇という希有な状況に居合わせたのだ。やはり男の血が騒ぐ。

「大衆に隠された情報を知るべき者だけが知る。軍人になってよかったと思える数少ない瞬間だよ。五鳥免力（ごちょうめんりき）っていうサイキック・エンターテイナーにこのネタを教えれば、すぐ本にしちまうだろうな」

「あの作家は協力者よ。本当と嘘をブレンドした情報を流せば、大衆には真偽がさっぱりわからなくなる。五鳥氏が駒として扱われていることを自覚しているかは微妙だけど。

いや……駒は私かも知れない。どれが正しく、どれがフェイクかなど、もはや見分けがつかない。上層部は明らかに情報を隠匿している。

ここで蒼海中尉に質問したい。その下劣な想像力に賭けてみたく思う。〈E・ホライズンズ〉のEとはなんだと思うか？」

数秒考えてから、三樹夫は応じた。

「事象の地平線——つまりイベント・ホライズンのＥじゃないのかな」
「肝心な場面では常識論しか出て来ないとは、意外につまらぬ男」
由梨巴は３Ｄ画像を回転させ、その一点を拡大表示した。そこには見覚えのある四角錐の構造体が確認できる。
「おいおい。まさか〝エジプト〟のＥだって言いたいんじゃないだろうな」
「他に該当する答がない以上、どれほど奇矯なものでも真実たる資格はある。あの建造物がピラミッドでないのなら、なんなのか教えてもらいたい」
こめかみを指で揉みながら、由梨巴は続けた。
「そもそも自衛軍はなぜ〝生械体（エジプシャー）〟という固有名詞を使っていると思

う？」
「上層部がそう呼び始めたんだろう。機械だか生命体だかさっぱり不明な存在だから、生械体という造語をでっち上げた。そう聞いたけどね」
「そちらは理解できなくもない。大和人であれば思いつきそうな単語だから。恐ろしいのは〝エジプシャー〟という英名のほうよ」
「不快な響きだね。続けてくれ」
「かつて存在した放浪民族ロマの別名は〝ジプシー〟——差別用語だと批判され、いつしか使われなくなったけれど、その語源は〝エジプシー〟だったわ。
エジプトから来た人々という意味よ。出エジプト記で圧政から逃れた民族の子孫を自称していたらしいけれど、話半分で聞いたほうが無難

ね。とにかく〝エジプシャー〟はそれからの連想と考えていいはず。つまり自衛軍上層部は、以前から敵の正体を察知していた。古代エジプト文明と関連があり、冥王星を本拠地とする超文明の存在を……」
重すぎるカミングアウトだが、三樹夫にも思い至ることがあった。
「まさかとは思うが、エジプトが鍛造雷弾（フォージド・ボム）の実験場に選ばれたのは……」
「あり得るわね。大英連邦は八〇年前からそこを穢れの地と呼んで忌み嫌い、最終兵器の起爆テストを繰り返した。人類の至宝たるピラミッドさえもいくつか破壊したのは、実は発掘が目的だったのかも知れない」
「お偉（えら）さんたちはそんな昔から情報を独占していたのか。てめえの絶望に他人を巻き込んで欲しくないもんだぜ」
「絶望する権利は万人に与えられていない。それは本当に手を尽くし

た者だけが逃げ込むべき最後のシェルターよ。政治屋が、その境地に達した末に決断を下したかは知らない。知りたいとも思わない。真に知りたいのは蒼海三樹夫の正体。そろそろあなたの番だな。ぜひ聞かせて欲しい。真実を……」
相手が切り札を出したからには、こちらも礼をもって迎え撃つ必要があるだろう。どこから話すか、そしてどこまで話すかの匙加減は難しいが、もう沈黙は許されない。
三樹夫は、こう切り出すのだった。
「黒瀬中尉は疎外感を抱いたことはあるかい？　自分がここに居てもいいのかという疑念を持ったことはないかい？」
「抽象論はもうたくさん。私が聞きたいのは具体的な事実だけ！」
「わめかないでくれ。これでも最短距離を走ろうとしてるんだぜ。黒

瀬は美人だが、その美貌を怒りで損なうのは実にもったいないよ。それに俺を分析しようとすれば、疎外感がキーワードになるんだがな」

「……私は日々を生きるのに精いっぱいだった。他者との交わりは意図的に避けてきた。疎外感など抱く暇もなかった」

「そうか。俺は子供の頃から延々と疎外感に苛まれてきたよ。ここにいてもいいのか。別にいるべき場所があるんじゃないかと」

「カウンセリングを受けることを強く奨める。もう手遅れだろうけれど」

「違う。断じて精神を病んでいるわけじゃない。俺は拉致されたんだ。ここではない素敵な世界から、こんないかれた世界に」

三樹夫は巨大な望遠鏡を見遣り、重いため息をついた。

「太い腕みたいだな。あの時もこんな怪物の手に掴まれたんだ。四歳の時だった。強靱で優しい父と、厳しくて恐ろしい母とは、永遠の別れになっちまった」
「怪物の手？　わからないわね」
「俺にもわからないさ。時間跳躍か空間湾曲って陰義（アウトロウ）じゃないかと思うが、証拠なんかないぞ。とにかく、それからの記憶は曖昧だ。函館港で警察に保護され、慈善学校と孤児院とを往復して九年を過ごした。地獄だった……」
「最初の軍歴は？」
「一三歳の時だ。自衛軍の基地祭に潜り込んで飯にありついていた時、適性検査を受けさせられた。剱冑の仕手（ユーザー）として素質ありと判定され、以後はお定まりのコースさ」

「成績優秀で十字軍へ編入されたと？」
「そうだ。一五歳でスカウトされたよ。希望に燃えてシルバー隊に入営したが、絶望するのに一週間とかからなかったな。まさかあんな変態集団だとは思わなかった」
「性的暴行を受けたと？」
「二〇人から先は数えるのを諦めたけどね。性癖が異常でも、技倆が優れているなら一定の敬意も抱けるけど、俺より腕が立つ奴なんかひとりもいなかった。だから余計に狙われたんだろうけどさ」
「直属の上官に訴えなかったのか？」
「直属の上官こそが主犯格でね。地獄から抜け出すには奴らを地獄に送るしかなかった。ティコ・クレーター上空でアテン・ボールを掃討した時、シルバー隊は全滅した。後方に待機していた友軍騎の誤射で」

「……そんなニュースは聞いていないが」
「十字軍（クルセイダーズ）にとっても黒歴史だし、隠蔽工作は得意だろ。永倉豹輔（ながくらひょうすけ）という昔の名前は検索しても出て来ないさ。戦闘中行方不明（MIA）として処分されているか、最初からそんな少年はいなかったことにされているだろう。
俺はクレジットを浚えるだけ浚って地球に逃げた。マカオで新しい顔とパーソナルＩＤとハイドロゴーグルを買って潜伏し、七年待った。ほとぼりが冷めるのをな」
「どうして十字軍（クルセイダーズ）に戻った？」
「他に方法がないからさ。民間じゃやれることにも限界があるだろ。目的のためなら手段なんか選んじゃいられない。遺伝子情報を擬装

し、指紋まで変えて念入りに別人に成りすましたつもりだったけど、黒瀬由梨巴という介在が苦労を無にしてしまった。どうしたらいいのか、考えあぐねているよ」

「教えて欲しい。お前の真の目的とは？」

表情から一切の笑みを消し、蒼海三樹夫は言った。

「愛の実在を証明すること」

「抽象論は不要だと言ったはず。なにが実現すれば満足なの？」

「もとの世界に戻りたい。ただそれだけさ。その為にはなんだってする。生械体（エジプシャー）がなんだ。十字軍（クルセイダーズ）がなんだ。俺はありとあらゆる障害をこの手で打破し、疎外感を抱かずにすむ場所に戻ってみせる。たとえ月を丸ごと砕いてもな」

由梨巴は、熱い血の通わぬ爬虫類を見下すような目線を向けてきた。

だが、その頬には一条の涙が落ちている。
三樹夫は看破した。あれは俺が最も嫌いな種類の涙だ。憐憫の情が引き起こした落涙に違いないと。
抗い難い不快感が満ちていく三樹夫に、由梨巴が追い打ちを放つ。
「それでわかった。全部わかった。あなたも犠牲者なのか。武帝の……」
妙な響きの単語に、三樹夫はすぐさま反応した。
「武帝だって？　その昔、北曾(えぞ)の松前大島(まつまえおおしま)にいたっていう武装勢力の親玉か。いまはもう存在しないんだろ。後継者不足で解散し、自然消滅したって話じゃないか」
「それは表向きの話よ。本当は違う。武帝の島は、活動を縮小しつつも、まだ厳然と存続している。大和国政府からは黙殺されているけれど、同時に治外法権が認められてもいる真の鬼ヶ島……」

「なぜ断言できるんだい？」

「私はあの島で育ち、あの島の命を受け、十字軍（クルセイダーズ）に入営したから」

己の生い立ちを規格外だと考えていた三樹夫だが、黒瀬由梨巴のそれも負けず劣らずに重いようだ。さらに問い糾そうとした彼であったが、天空から押し寄せた黒い影が、その口を噤ませた。

上空を見上げる。銀と赤に塗られた円柱形の艨艟（もうどう）がそこに浮いていた。

「突撃戦艦〈ガレーキープ〉よ。予定を繰り上げて完成させたのね」

連盟航宙自衛軍（スターミィ）は劒冑を搭載する戦闘母艦の建造を進めていた。別に秘密でもなんでもない。弐号艦の予算獲得のためか、堂々と宣伝していたくらいである。当然ながら、その運用に携わるのは十字軍（クルセイダーズ）であった。

「幡田少佐の言ってたフネか。テスト航海に出るんだな。専守防衛を標榜する自衛軍が、とうとう外征の手段を確保してしまったか」
「テストじゃないわ。実戦よ。ゴールド隊、アイアン隊、クィックシルバー隊の一二騎を載せて、新しく発見された盟約の門(トンネル)に飛び込むのよ」
「冥王星に殴り込みをかけようってのか⁉」
「そうらしいわ。特にゴールド隊がご執心よ。失点を取り返そうとしているんでしょうけれど、拙速はさらなる失策を呼び込むだけ……」
由梨巴の台詞は言霊を紡いだ。
数秒後、地獄絵図が上空で展開されたのである。
二人は目撃した。新鋭艦の〈ガレーキープ〉が、その中央部から折れ、真っ二つに砕け散る悪夢的な風景を……。

3

奇襲は予見されていた。

少なくともその兆候をキャッチすることはできていた。

敵の出現ポイントは新発見された盟約の門（トンネル）だ。連盟航宙自衛軍（スターミィ）もそれは承知しており、独行無人探査機（ドローンプローブ）を多数配備していた。

それが連続して機能を停止した直後、H・G・ウェルズ基地防空司令官補佐に昇進していたアイトー・サムプラヤ少佐は警戒警報を発令した。

敵勢力は不明なれど、盟約の門（トンネル）と地球の位置関係およびアテン・ボー

ルの速度から逆算して、接敵は約三六時間後の予定と。
その数式は誤りだった。サムプラヤの責任ではない。今回出現した敵騎は、すべての点で既成概念を打破する性能を秘めていた。ただ、それだけの話であった……。

船体瓦解という悲劇に見舞われる直前まで、〈ガレーキープ〉は威風堂々とした威圧感を全艦に漲(みなぎ)らせていた。
連盟航宙自衛軍(スターミイ)が保有する初の宇宙戦艦と銘打たれ、〈ガレーキープ〉の征(ゆ)けぬ宇宙(そら)はなしとまで豪語されていたが、実際のところは汎用輸送艦〈エアリーズ〉の強化拡大版にすぎない。
建造は地球と月のラグランジュポイントＬ２で行われた。武装は潤沢だが、自動化にも注力されており、乗組員は二七名のみだ。軍艦旗を掲げてからまだ七二時間しか経過していない。

前世紀中葉に大英連邦が運用していた重飛行艦の名前をそのまま頂戴したのは、外見がそっくりだからである。艦内体積をできるだけ確保しようとすれば、どうしても円柱形に落ち着いてしまう。また船体の熱膨張を防ぐため、適度にローリングさせる必要もあるが、これまた筒状が有利だ。

正式艦ナンバーFX―101。全長二〇七メートル。空虚重量三七五〇〇トン。最大で一六騎の劒冑を搭載し、八〇〇日の戦闘航海に耐える能力を持っている。

これは火星進出を想定して決定された数値であった。自衛軍は太陽系第四惑星に基地の建造を夢見ていたのだ。

もっとも、新しい〝盟約の門（トンネル）〟が発見された関係上、突撃戦艦〈ガレーキープ〉の針路は別方向に固定されてしまった。

冥王星である。

索敵行動ではない。強行偵察でもない。侵攻計画そのものであった……。

被弾三六〇秒前――。

突撃戦艦〈ガレーキープ〉の劔冑格納庫（クルスハンガー）では、ゴールド隊リーダーのギャビン・レイス中佐が中央に陣取り、出撃にあたっての訓辞を述べていた。

「ゴールド、アイアン、クィックシルバーの精鋭諸君に告げる。我らは歴史的瞬間に立ち会う栄誉を得た。ここ七五年以上にわたり、地球上空を好き放題に荒らし回っていた未確認飛行物体の根城を襲い、復讐を成し遂げるのだ。新たに発見された盟約の門（トンネル）を突破し、敵本土を

叩くのだ！」

部下のロンガー・ネッター大尉とエッジ・エンティルス中尉が、それに応じて気炎を上げた。他の隊の面々も追随する。

この艦にはゴールド隊三騎、アイアン隊四騎、クィックシルバー隊五騎の合計一二騎の劒冑が搭載されていた。騎種はいずれも最新鋭のズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)である。

名誉挽回の機会に燃えるレイス中佐が攻撃編隊指揮官だ。彼は傲慢さを垣間見せながら続けた。

「とは言え、十字軍(クルセイダーズ)は慈悲深い。奇襲をかければ冥王星を火の海にできようが、まずは平和的な交渉を試みなければ。謝罪と賠償があれば、和議の道も提示してやれよう。

作戦を説明する。我らの制圧目標は冥王星の第一衛星――カロンだ。冥府の川の渡し守の名を持つ月を足がかりとし、威嚇爆撃を実施。以

後、生械体（エジプシャー）の出方を見る」
アイアン隊所属の大尉が大声で質問した。
「威嚇爆撃に投入される弾頭は通常弾でしょうか？」
「まさか。こちらの武威を見せつけるには最初から全力でいくのみ。本艦には鍛造雷弾（フォージド・ボム）が二四発も準備されている。あれを使うのだ」
レイスは格納庫の天井を指さした。そこには棺のような強化カプセルが並列配置されており、全裸の死美人が横たえられていた。白蝦夷（ユーデア）の少女だ。一度命令が下るや、その細い腕に冥府鉱（プルートニアノア）という重金属を抱きすくめ、敵陣で自爆を果たす。その爆発力はＴＮＴ火薬一万トンにも匹敵するという。
最終兵器〝鍛造雷弾（フォージド・ボム）〟――初号弾の完成から一世紀が経過しているが、人類はまだこれを超える爆発物を実現化していない。それを二四

発も載せているのは、本気の度合を示していると考えていいだろう。

クィックシルバー隊の名も知らぬ中尉が挙手をして訊ねる。

「カロンを制圧するということですが、あれは大きすぎます。我ら一二騎だけでは手に余るかも知れません。衛星ならケルベロスかステュクスのほうが現実的ではないでしょうか」

満面の笑みを浮かべてレイスは言った。

「もっともな意見だ。しかしながらカロンでなければ駄目なのだ。理由は秘中の秘だが、出撃前であることを鑑み、特別に伝達しておこう。それは盟約の門（トンネル）の存在理由に起因しているのだ。まずは諸君に問おう。我らはこの月世界を当たり前のように受け入れているが、太陽系全体を見渡せば、地球の月とはなかなか奇異な天体であることがわかる。その誕生のプロセスはまだ明らかにされていな

いな」
アイアン隊の古参兵が言った。
「ジャイアント・インパクト説が強いはずだ。他の惑星が原初地球に激突し、月の材料をもぎ取った結果、大型天体として結実したんだろう」
次にクィックシルバー隊の女性仕手（ユーザー）が答える。
「地球の引力に捕らえられたとする捕獲説も有力だわ。地球より古い岩石がある理由は、それで説明可能でしょう」
だが、レイス中佐は人差し指を顔の前で振り、こう話すのだった。

「地球と月の距離は、太陽と地球の距離の四百分の一。そして月の直径は、太陽の直径の四百分の一。見た目の視直径が同一であるため、

皆既日食という現象も起こる。これらがすべて偶然とは思えない。誰かの意志が介在していると考えても不思議じゃない。七〇年ほど前にロシアの科学者がこんな論文をぶちあげている。月は人工的に作られた巨大宇宙船に違いないとな」

苦笑と失笑が周囲を満たしたが、レイス中佐は真顔を崩さなかった。

「笑い飛ばせればいいのだが、まんざら根拠がないわけじゃないんだぞ。考えてもみろ。我々の月面都市は地下に展開しているわけだが、誰がいつ掘った？　月面開発が本格化したのは二一世紀に入ってからだ。たった四〇数年でここまで開拓が進むものか。

月震（ムーンクエイク）の件もある。地震（アースクエイク）と違い、月の揺れは長く続く。地殻内部にマグマや地下水が少ないからだと言われているが、より簡単な解答があるじゃないか。

月の内部は部分的に空洞なのだ。

地球人類はそれを発見し、都市建造に流用した。それで辻褄(つじつま)が合う。さらに言うなら、地球と月を結ぶ盟約の門(トンネル)が実在するのも、月に起因しているのだ。

あれは陰義(アウトロウ)だ。信じられないだろうが、我らの月は超巨大な劒冑そ、い、い、のものなんだ」

奇想天外にもほどがある所見であった。レイスもすべてを信じていたわけではないが、上層部から渡された報告書ではそうなっている。

ざわつく部下たちに、彼はなおも続けた。

「誰が、いつ、なんの目的で作ったかは皆目不明だ。しかしながら、同じ理屈が冥王星のカロンにも当てはまると仮定すれば、そこを制圧すべき必要性が理解できるだろう。

著名な五鳥免力(ごちょうめんりき)氏が主張しているように、『地球および月』と『冥

王星およびカロン』には以前から類似性が指摘されている。すなわちあの第一衛星さえ押さえれば、地球公転軌道へと続く盟約の門(トンネル)を奪ったも同然。そう推理して間違いないのだ。

今回の侵攻作戦は、まさしく地球人類の存続をかけた聖戦である。十字軍(クルセイダーズ)の名に恥じない戦いぶりを示し、我らの活躍を戦史に刻もうではないか！」

野心的すぎる饒舌は、突如鳴り響いたサイレンに叩き切られた。

『こちらブリッジ！　敵騎多数が本艦に急速接近中！　全竜騎兵(ドラグーン)はただちに装甲し、戦闘態勢に入れ。あと六〇秒で格納庫(ハンガー)を緊急解放する！』

それに続いたのは対空砲火の重低音であった。壁面が激しく振動しているのは、それが空砲でない証拠だ。どうやら奇襲を受けたのはこち

らしい。
「総員装甲！　急げ！」
指揮官らしく叫んだレイスであったが、相手が規格外すぎた。部下全員がズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）に飛びつこうとした刹那、格納庫（ハンガー）は宇宙空間と連結された。
ハッチが開いたわけではない。壁が抉（えぐ）れたのだ。
突撃戦艦と銘打たれているが、その装甲は意外に薄い。対弾性能よりも、敵の早期発見と迎撃および回避に注力した結果だが、敵騎の速度は奔馬そのものだ。光速に迫る勢いで接近する相手には、手も足も出なかった。
艦内に侵入してきた脅威対象はアテン・ボールだった。しかし、かつてのそれとは動きがまるで違う。球形のボディで体当たりを繰り返す

度に、装甲鈑には大穴が穿（うが）たれ、鋭利な触手が振り回される度に、掠めたものは真っ二つにされていく。
機敏性、速度、破壊力。すべてが桁違いだ。過去に対戦したアテン・ボールが愛玩犬だとすれば、この度（たび）のそれは軍用犬である。
レイスは悟った。かつて斃したアテン・ボールは偵察用だったのだ。今回は違う。明らかに攻撃任務を帯びている。もしや俺たちは手を抜いてくれていた敵を葬り、悦に入っていただけなのか……。
船底一枚下は地獄とはよくぞ言ったもの。空気が濁流となって漏れ出し、部下と剱冑は凍てつく宇宙へ放出されていく。
だが、レイスは間一髪で誓約の口上を叫ぶことに成功した。
「ヴァルプルギス・ナハト（ワルプルギスの夜）！」
直後、彼のズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）はアストロバイクの形態から
解き放たれ、四肢、頭部となって総身を取り囲んだ。すんでの所で装甲

解き放たれ　細い鉄片となって細身を取り囲んだ　すべての所で装甲を済ませたレイスは、騎体の背に固定されているゲペックカステン（物入れ）から竜殺（ドラゴンバスター）しを抜き、両手で構えた。

『全騎集結。〈ガレーキープ〉を襲撃中の敵騎を追い払え！』

装甲通信（メタルエコー）を飛ばしたが、返事は皆無だ。すぐ姿勢制御を行い、敵騎を探る。

いた。アテン・ボールの大軍だ。鋼の海月（くらげ）といった風情の敵騎が、〈ガレーキープ〉を取り囲み、我がもの顔に啄（ついば）んでいる。すでにブリッジは影も形もなく、対空火器も威力を減じていた。

敵騎数は実に一〇〇以上！　悪夢的な光景に絶句するレイスに気づいたのか、アテン・ボール六体が肉薄してきた。

十字軍（クルセイダーズ）ゴ　ンズ隊ノ　で　の意地を見せ、一体だけは所り舎ここの

十字軍ニールト隊リーダーの意地を見せ、一体だけ斬り捨てたもの の、残りは避けることも逃げることもできなかった。

数十本の触手がズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）の頭部を襲った。かつてない衝撃が貫くと同時にレイスは左目で見た。

薄ピンクの球が、眼前のディスプレイに叩きつけられる瞬間を。

それは彼の右目だった。触手という竹串に刺され、眼窩からえぐり出された目玉。それを自らの左目でまざまざと見せつけられたのだった。

恐怖心は感じなかった。不快感さえなかった。数秒と経たずに右手を、次に両足を引きちぎられたが、その頃には痛覚さえも消え失せていた。

いまだ死のなんたるかを把握できていないレイスだが、それを実感しなければならない瞬間が訪れた。光が残されている左目で彼は見たの

だ。
黄金色に光る無気味な劍冑を。
「お前は……なんだ……」
劍冑といえば数打甲冑（レッドクルス）があたりまえ。そう思い込んでいたレイスだが、眼前に出現した真打劍冑（ブラッドクルス）は既成概念を根底から揺さぶる魅力が詰まっていた。華美と荘厳さの調和としてはひとつの到達点と評価できよう。
これぞ英雄の劍冑に相応しい。
「あれだ……あれが欲しかった……俺は……英雄だ……英雄になりたいんだ」
ギャビン・レイス中佐は英雄にはなれなかった。

相対する真打劔冑――クプリ二号騎の旋風脚に酷似した足技をまともに食らい、宇宙を漂う冷凍肉と化してしまったのだ。

まさしく、ミイラ取りがミイラになった瞬間であった……。

4

「羽虫どもめ。まるで成長していないじゃないか。それにしても女王蟻に似た劔冑（ケペシュ）とは。羽虫には相応しいが、弱すぎる。これでは暇潰しにもならない！」

レイス中佐のズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）を蹴り技で粉砕したツタンクアメンは、すぐさまケプリ二号（セネウ）を上昇させた。

「これが連中の石船か。巨大な銀色の蓮根（れんこん）にしか見えぬ。軍事力の進歩もなければ、美的感覚の具合もミミズだ。このような醜悪な物体など

歩もなければ、美的感覚も原始のままだ。このような醜悪な物体など存在すら許されぬ！」
ケプリ二号（セネウ）は対空砲火の実包を手の甲で弾き返しながら、瞬時にして〈ガレーキープ〉の舷側に取りついた。
「いまだ！　ケプリよ。鉄の爪を出せ！」
即座に返事が脳内に走る。

《王子に告げる。吾は了解した。奴の肌に消えぬ疵痕を残してやらん！》
スカラベ（フンコロガシ）を模した剣冑（ケペシュ）は、その脚力こそが最大の武器となる。切っ先鋭い爪が深々と船体に食い込むや、ケプリ二号（セネウ）は驀進を始めた。円筒の外壁に沿って一周すると、哀れにも突撃戦艦は輪切りにされ、瓦解してしまった。爆散こそしなかったが、やがて海に落下して朽ち果て

[illegible]

るだろう。

当然ながら、ツタンクアメンはそれが〈ガレーキープ〉という突撃戦艦であることも、冥王星を狙っていた事実も承知していなかった。彼は知らず知らずのうちに、本土の危機を救っていたのである。

「歯応えのない連中だ。これじゃ尖兵としての役目を果たすだけでは、とても父上に認めてはもらえまい。愛しきアンケセンアメンも納得してくれまい。より実のある手柄を確保したいものだな」
ツタンクアメンの独白に、ケプリ二号（セネウ）は応じた。
《続く友軍の地均（じなら）しこそ、我らに求められる任務。ならば月世界を掃討し、月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）を再起動させる準備に着手するのは如何（いかが）か？》
「面白そうだが、羽虫たちは三〇もの都市を月に築いているのだろう。そのすべてを制圧するのかい？　僕ひとりで？」
《王子単独には非ず。吾も力添えしようぞ。まだ稼働するアテン球体は一〇七を数える。これで尻込みするようであれば、吾は悪しき仕手を摑んだと嘆かざるを得ない》
「乗せるのがうまい劒冑（ケペシュ）だな。ならば乗せられてやろうか。月世界を

陵辱する羽虫どもを根絶やしにし、父上の覇道を掃き清めてみせよう
ぞ」
賢しらにそう言った瞬間、ツタンクアメンは気づいた。悪意の凝縮体が真一文字に飛来中であることに。

感触でそれを掴んだ王子は、騎体を即座に月面へ下降させ、射線からケプリ二号（セネウ）をずらした。敵弾を見切った以上、回避はたやすい。そのはずであった。
だが、しかし——。
太股に激痛が襲った。自らが生きている事実を再認識させてくれる感覚に戸惑うツタンクアメンに、ケプリ二号（セネウ）が進言する。
《王子に告げる。左足大腿部の装甲に被弾。鏃（やじり）は骨にまで到達。修復過程に移る》

片手を伸ばし、突き刺さったままの異物を引き抜く。なんの変哲もない矢だ。

「あり得ない！　僕はよけたのに！」

そうだ。ツタンクアメンは一分の隙もなく、完全なる回避行動を取った。

ただし、相手の一矢は常識を超える軌道を描いてやって来た。発射点の再設定を綿密に行える異形の仕手が操っていたのだ……。

＊

《初弾命中ヲ確認ス。現在、次発装填準備中ナリ》

あえて機械的な電子音声に設定してある統御機能（OS）が、無機質な調子で戦果報告をした。
自己流に改造を施したズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）を駆り、狙撃に成功した蒼海三樹夫中尉であったが、満足できるものではなかった。
秘技〝林檎には永遠に突き刺さらない矢（パラドックス・オブ・テル・アンド・アップル）〟を駆使したというのに、相手の心臓を貫けなかったのだ。これでは第二の矢に期待するしかない。
突撃戦艦〈ガレーキープ〉が輪切りにされた直後、三樹夫と由梨巴は装甲し、ただちに反撃を試みた。
初太刀が三樹夫で次鋒が由梨巴だ。第一撃の成否にかかわらず、即座に第二撃を叩き込むことで、確実に相手を仕留める。それが狙いだった。
「由梨巴中尉！　頼みますよ！」

「時間……稼ぎます……」

残光を伴った飛翔体が頭上を走った。黒瀬由梨巴の騎体である。

『天座失墜(フォーリンダウン)・小彗星(レイディバグ)！』

一叫したのはヴォイス・コントロールで陰義を繰り出すためだ。ズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)は重力制御を可能とする騎体だが、黒瀬はそれを足技に利用するテクニックを身につけていた。

超高速での逆落としと、打擲する直前の半回転が重なり合い、踵落としの威力は数百倍にも膨れあがる。直撃すればどんな物質でも無傷ではいられまい。

炸裂の瞬間、光が生じた。

勝負あった。あれだけの爆発閃光は滅多に拝めるものではない。〈ガレーキープ〉の仇は討てたはずだ。

しかし――予想は覆された。

三樹夫は目撃してしまった。あらぬ方向へ超高速ですっ飛んで行くズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）の尾羽（おは）打ち枯らした姿を。

現状で黒瀬由梨巴だけが可能とする陰義の『天座失墜（フォーリンダウン）・小彗星（レイディバグ）』だが、本来なら重力の方向、この場合は月へ向かって蹴り落とすのが定石である。

そのためには高みに駆け上がる必要があったが、今回は巧遅より拙速を重んじる場面であった。そのため充分に高度を稼げず、横殴りに近い恰好になった。

これが敗因だった。相手が繰り出してきた陰義と正面からぶつかった黒瀬騎は、野分に追われた木っ葉のように吹き飛ばされたのである。

いや。それは単なる気休めかも知れない。仮に磐石な状態で

『天座失墜（フォーリンダウン）・小彗星（レイディバグ）』が決まっていたとしても、一〇〇パーセントの確率で黒瀬騎は葬られていただろう。
相手の陰義は、それほど慮外なレベルであったのだ……。

「由梨巴中尉。応答を！」
返事はなかった。すぐさま騎体の統御機能（OS）に問いかける。
「黒瀬騎はどこだ!?　場所特定を急いでくれ」
《水瓶座（あくえりあす）ノ方向へト高速デ漂流中ナリ》
「救助に向かう。合当理（がったり）に火を入れろ」
《非推奨。救助対象ハスデニ秒速二九万きろマデ加速セリ》
もう駄目だ。高速どころか光速に迫りつつあるものに誰が追いつけよ

うか。由梨巴とはこれが永遠の別れであろう。

だが、他者に気を配る贅沢はそこで終わりだった。眼前に悪魔的な劒冑が接近してくる光景に、三樹夫は心底震え上がった。

そして敵騎の胸が開き、朱色に輝いた。理解はできないが、感覚で把握できた。途轍もない陰義が発動しようとしている。

即座に重力壁を展開し、擬似的なバリアを張ったが、相手の勢いを食い止めることなどどだい無理な相談だった。

腹部へなにかが照射された。衝撃はなかった。熱量も感じなかった。

ただ、急激な加速が全身を襲った。

月面に陣取っていた三樹夫の騎体は、糸が切れた凧みたいに吹き飛ばされ、そのまま引力を振り切り、宇宙空間へと放り出されてしまった。

総身に押し寄せる加速度に悲鳴をあげながら、自嘲気味に三樹夫は

思った。

（……ふふふ……これは……ないんじゃないか……）

＊

ケプリ二号騎（セネウ）が発動したのは〝ナイルの奔流〟と呼ばれる陰義（アウトロウ）だ。

これは飢餓虚空――いわゆるミニマム・ブラックホールの性質を利用した究極の破壊技であった。

ブラックホールはすべてを吸い込む重力天体として有名だが、口は狭い。入りきれなかった物質は降着円盤を形成する。それをプラズマ・ガスの発射台として活用するのが、この陰義の真面目（しんめんもく）なのだ。

地球人類が〝コズミック・ジェット〟と呼ぶ爆発現象である。光の放

射圧と磁場力学を総動員し、ケプリ二号騎（セネウ）の胸元から射出されたプラズマ・ガスは、ありとあらゆる物質を地平の彼方へ放逐する洪水そのものであった。

《王子に告げる。〝ナイルの奔流〟の連射は禁物。現に第二撃は効果が薄い。敵騎は地球へ墜ちていくが、速度は光速の四〇分の一。なお加速中。撃破の成否は未確認》

頭蓋に直接流れ込むケプリ二号騎（セネウ）の報告に、ツタンクアメンは舌打ちをするのだった。

「左の大腿骨を砕かれた代償としては、死すら生ぬるいというのに。まあ、よい。当面の邪魔者は消えた。ところで第一撃で追い払った敵

騎は？」
《現在、光速に迫る速度で我らより遠ざかりつつあり。約六時間で冥王（オシリス）の星の軌道に到達する公算大なり》
「好都合だな。戦略顧問のアンケセンアメンに連絡し、回収してもらおう」
《仕手を捕虜にできれば剱冑（ケペシュ）の情報を大いに収集できる、ということですかな》
「まあね。ただし意味は薄くなる。いや、薄くしてみせる。この月に寄生する羽虫どもをことごとく退治し、連中の剱冑（ケペシュ）をすべて屠るのだ。性能云々（うんぬん）を分析するよりも、奴らの数を減らすことが先決。それでこそ月神（コンス）の剱冑（ケペシュ）も長き眠りより目覚めよう。ケプリよ。我が覇道に力を貸せ！」

ここに月面を舞台にした史上最大の大殺戮が開始された。
戦闘ではなかった。単純作業に近かった。精鋭の十字軍（クルセイダーズ）ですら手も足も出ず、正規軍らの必死の抵抗も無力であった。
死傷者数は記録されていない。ただ、生者が死者を羨むほどの惨状であったとの証言が伝えられている。
神を求め続ける者には、やがて神の自覚が生まれる。進化を模索した生械体（エジプシャー）の王子は、荒ぶる神として君臨することを望んだのだ……。

*

敵騎から謎の光線の照射を浴びた後も意識は飛ばなかった。そのぶん恐怖心が蓄積されていったが、誓毎三封夫は最後まで希望を捨てな

かった。
《本騎ハ地球引力圏ニ入ッタ。大気圏突入ノ準備ヲ強ク推奨》
統御機能（OS）の警告に大声を張り上げる。
「無駄とは思うが、ステーション〈グリーン・ドラゴン〉と連絡は取れないかな？」

《発信出力系統ニ深刻ナ障害アリ。応答皆無》
「失望はしないぜ。するもんか。たとえ話ができても遺言を残すのが関の山だ。それにしてもあの金ピカの劒冑め。味なことをやってくれる。なんてパワーだよ。月から地球まで四〇秒しかかかってないぞ」
速度計は秒速九五〇〇キロを指していた。こんな速度で大気圏に突っ込んだら、騎体は崩壊し、盛大な流れ星となって人々の目を楽しませることだろう。

仕方がない。最後の手段だ。
「ゲペックカステン(物入れ)全開放。背中の重力機械(グラマシーン)をむき出しにしろ。地球の反対側にブラックホールを射出すれば、収斂(しゅうれん)作用で速度が殺せるはず」
マイクロサイズとはいえ、一般空間にブラックホールを放出することは厳しく規制されている。おそらく瞬時に蒸発するだろうが、どんな悪影響が生じてもおかしくない。人類の未来を考えれば、ここで大人しく自死を待つのが正解だろう。
しかし、それはごめんだ。俺は他者を斬り捨ててでも生き残る。死んだら後悔さえできないのだから。
ズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)は仕手の命令に応えた。背負った円錐状の物体がバナナの皮のようにめくれ、目には捉えられない球体が抜け

出た。
途端にブレーキがかかった。速度エネルギーはブラックホールの超重力で大部分が減殺された。大気圏に足を踏み入れた時には、もう秒速一二キロにまで落ち込んでいた。よく騎体がもったものである。
「独立形態（アストロバイク）へ移行。このまま地球に降りる！」
宇宙戦で活用される劒冑には、単独での大気圏突入能力が義務づけられている。棺桶とも称されるアストロバイクだが、完全密閉式で仕手を守れるため、不都合はない。
「高度八〇キロで極超音速カイト展開。パラシュートを使うタイミングは任せる。不時着は海がいいな。幾分かは激突のダメージを減らせるだろうさ」
真っ赤に焼けていく窓外を見据える三樹夫は、眼下の地形を睥睨し、行き先を睨んだ。やがて見覚えのある地形が見えた。

行き先を眺めた　やがて見覚えのある地形が現れた

それは北曾（えぞ）――大和国の最北に位置する大地だ。騎体は、その南西部の海面へと落下を続けていく。

島が、見えた。カルデラを有するそれなりのサイズの孤島だ。

悪魔の存在を信じたくなる蒼海三樹夫であった。

彼のズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）は、松前大島へと落下しつつあったのだ。

いわゆる〝武帝の島〟に、である……。

第四編

孤島騎

—— THE ISLAND CRUZ

1

一世紀前。極東の島国は混乱の極にあった。
銀星号(ぎんせい)事件という忌まわしい惨劇が一応の決着を迎えた後も、待ちかねた安寧はやって来なかった。
六波羅残党と太宰府軍、そして連盟進駐軍(GHQ)と露帝(ロシア)。これらの勢力が三つ巴ならぬ四つ巴の不毛な戦いを展開し、天下は麻の如く乱れた。
国家権力ばかりではない。グリューネドラヘ・ゲゼルシャフト――緑龍会なる非合法組織が暗躍し、乱世に拍車をかけた。銀星号の再来と言われ、市民を恐怖のどん底に叩き込んだ〝星片八剣姫(スターダストブレイズ)〟の一件も、緑龍会が裏から糸を引いていたとの説が現在もなお有力である。
[illegible]

なれど乱あれば治あり、悪辣な国体が生まれればそれを誅する者が立ち上がる。これもまた世の習いだ。

大和に〝無名軍〟あり！

それは救国護民の題目を掲げ、悪を討つ正義の組織。その母体は、六波羅幕府に滅ぼされた岡部（おかべ）一族の残党だと言われているが、詳しいことは歴史に埋没してしまった。

この少数精鋭の自警団めいた軍勢が、希望の星として大和の民に一定の知名度と支持を得たのは事実だ。

然りながら、正義が必勝する時代は伝説の彼方にかすんでいた。数年で無名軍は人口に膾炙（かいしゃ）されなくなり、それに取って代わる武装集団が登場した。

いわゆる〝武帝〟である……。

傭兵帝国とも、聖堂騎士団とも、はたまた軍隊派遣会社とも称される

武装勢力だ。その行動理念は、無名軍に比べ単純なものであった。攻撃されないかぎり、こちらから手はあげない。外征はすべて依頼に基づいてのみ行われる。契約を呑むかぎり、理非も国家も民族も宗教も主義も主張も一切関係ない。

ただし、約定は苛烈なものであった。彼らは〝善悪相殺〟という行動理念を金科玉条にしていた。

つまり『敵の犠牲と同等の死』を『依頼主』にも強いるのだ。

絶対に正義が勝利することのないように……。

ある者は、言った。無名軍は武帝と戦って、惨めに敗れ去ったのだと。

ある者は主張した。無名軍は武帝と世代交代し、役目を終えたのだ

と。

ある者は、述べた。無名軍は武帝に取り込まれ、理念を失ったのだと。

正解を知る者はいない。ただ大和政府が掃討戦に本腰を入れなかったのは確かだ。

その理由はひとつ。戦後の混乱期において、対外勢力の排除に武帝の戦力を大いに拝借したからであった。国内が落ち着きを示し、表向きの騒乱が鎮まりを示すや、大和政府はひたすら黙殺し、そして待った。

武帝の命脈が尽き果てるのを。

彼らは時代遅れの真打劍冑（ブラッドクルス）を主戦力としていた。武者もスカウトしてはいるが、総数は減るいっぽうだ。半世紀も放置すれば自然消滅しよ

う。
幸いにも、武帝は北曾南西の松前大島を根城とし、そこに引き籠もっている。無人島をひとつくれてやりさえすれば暴れはしない。代価としては安いものだ。
大和政府の企みは成功したかに思えた。代価の過酷さも手伝ってか、依頼人が武帝の島を訪れる事例も少なくなり、その名は徐々に人々の記憶から薄れていった。
だが、しかし――。
武帝とその部下たちは牙も爪も失ってはいなかった。構成員の高齢化には、世代交代という順当すぎる手段を用い、戦力の維持を成し遂げていた。
そして、今日もまた……。

＊

遠雷めいた轟音が天空から響いてきた。
悪い胸騒ぎがした。なにかがやって来る。この島に厄災と希望を同時にもたらすなにかが降ってくる。

そんな予兆が脳裏を横切った直後、武帝渉外担当イリーナ・チェーホフは執務室を駆け出していた。つい先刻まで、金払いの悪い依頼主——中東某国の財務状況を調査すべく、ハッキングしたビッグデータと格闘していたが、もはやそれどころではない。
イリーナは己に強いカンが備わっていると自負しており、常々こう自慢していた。僕のご先祖様はシベリアの魔女ですよ。この身にもその

血が幾分かは混濁していますよと。
周囲からの評価は、サイキックな力よりも算盤勘定の実力が勝るという点で意見の一致を見ていたが、イリーナが自己評価を改めることはなかった。この白系ロシア人は自分の出自を半ば自嘲しつつも、同時に誇りを抱いていたのである。
砂浜を駆ける。デスクワークでなまった躰が恨めしい。息を切らしながら、騒音の響く一点を見つめた。
青空に光輝が確認できた。真昼の流れ星だ。高度二万メートルに滞空する成層圏飛行船が墜落したのだろうか？　いや、それにしては勢いがありすぎる。
《劒冑（つるぎ）ね。天では戦いが起こったのよ》
その声を発したのは、いつの間にか横に陣取っていた紅い鋼鉄の大蜘

蛛だ。
《あれは松前大島（ここ）を目指してるわ。凧みたいなものを出してるけど、速度を殺しきれない。あるいは勢いにまかせて体当たりする気？》
イリーナは思わず叫んだ。
「まさか鍛造雷弾（フォージド・ボム）!?　島ごと僕たちを消し去る気!?」
《違うわ。もしもそうなら武帝が真っ先に飛び出している。あの人のカンはあなたの四〇九六倍は鋭いから》
「別に悔しくないですよ。僕が鈍感なんじゃなくて武帝が異常なだけです。たとえ蜘蛛の形（なり）とはいえ、奥方の仰ることは尊重しますけれどね」
《奥方って言うな。あのね、私は武帝とは共闘関係にあるだけで、それ以上でも以下でもないのよ》
「[illegible]

「恥ずかしがる必要はないのです。お二人のご関係は、この島に居住する武者全員が承知しております。いまや婚姻は男女間以外にも認められているじゃありませんか。それも世界中で。愛し合う二人に種族の差など無問題のはずです」

《私は打たれた時の価値観を改めたくないだけ。変態の存在も権利も認めてあげるから、こっちに変態行為を強要するのはやめなさい》

不意に落下対象に変化が生じた。パラシュートが開花したのである。五秒ほど遅れて音も来た。つまり高度は一七〇〇メートル前後だろうか。

《イリーナ。あのパラシュートの紋章が見える？》

紅蜘蛛の問いかけに、渉外担当は答えた。

「白地に赤の十字架。間違えようがないです。十字軍（クルセイダーズ）の騎体でしょう――

《やっぱり。面倒な相手が来たわね。あれじゃ海上に叩きつけられて絶命するわよ。もう減速が間に合わないもの》
「できれば救助してあげたいですね。なんとかなりません？」
《無銭労働が大嫌いなあなたにしては珍しい発言ね。いつからボランティア精神に目覚めたの？》
「ただ働きはしないし、させません。たとえ遺体でも自衛軍に返せば礼金が貰えるはず」
《相変わらず金の亡者だこと》
「我らの財政が厳しいのは武帝が金銭に無頓着だからです。あなたに責任がないとは言わせませんよ。それに、墜落する劒冑の仕手が必ず死ぬとはかぎりません。救国護民の正義を披露する機会だとは思われませんか？」

落下を続ける劒冑は、着水寸前に逆噴射し、水飛沫をあげて海面に消え失せた。波打ち際から三〇メートルと離れていない浅瀬だが、浮かんでくる気配はない。

《わかったわよ。行くわよ！》

そう言うや、鋼鉄の蜘蛛は海岸線を疾駆し、そのまま海中へと躍り込んだ。カプセル状の救助対象者を抱いて浮上するまでに要した時間はわずか一五秒。この機敏さに敵う真打(しんうち)は現存しまい。

《見た目よりもずいぶんと軽いみたいだけど……いったいこの劒冑はなんなの？　独立形態が蚕(かいこ)の繭(まゆ)だなんて》

「繭じゃありません。これはアストロバイクです。単独で大気圏突入能力があるんです。つまり宇宙専用に設計された数打(かずうち)ということになります。十字軍(クルセイダーズ)が完成させた最新型の劒冑——ズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)でしょう」

《ドイツ語は苦手よ。日本語に訳すとどうなるの？》
「銀星号、でしょうね」
それが悪夢に結びつく単語であることはイリーナも承知していた。緋色の武者から再び鉄の蜘蛛に戻った劒冑は、冷静さを装いながらこう告げた。
《ふん。かかさまの名を勝手に盗用していながら情けないこと。本物は強かった。強すぎる敵騎だったわ。求めてもいない相手があっちからやって来る。これも因縁かしらね》
「と言っても量産型の簡易急造品ですよ。うちの諜報員の話だと、ブラックホール機関の採用でいくらか辰気を操れるみたいですが、文献に残る本物の銀星号とは雲泥の差がありますわ」
《当たり前よ。あんな化け物と[illegible]ですか。

《当たり前よ　あんな代物をたくさん造られてたまるもんですか
でも、油断は禁物。こいつを一寸刻みで調べなきゃ。まだ性能向上の余地があるなら、武帝を焚きつけてその工場に遠征隊を派遣してやるわ》

大気との摩擦で焼けただれた騎体の表面を紅蜘蛛の爪が削る。継ぎ目が外れ、装甲が割れた。身を縮めた成人男性の姿がそこにあった。

口許は苦悶を浮かべているが、目許から表情を窺い知ることはできなかった。要救助者は巨大なハイドロゴーグルを装着していたのである。

「まだ息があるわ。奥方、医務室へ運ぶのを手伝ってください。天から落ちてきた軍人に最高の治療を。そして最高の診療報酬を十字軍（クルセイダーズ）に請求しましょう」

その直後、紅蜘蛛は動きを止め、こう宣言するのだった。

《このやり取りも何度目になるかわからないけど、その奥方っていうの、いい加減やめなさい》

2

躰が焼ける。

肉体を構成する全細胞が発火点に達し、業火を噴き上げているかのようだ。体温で雑念が焼け、心がピュアになっていくかのような錯覚が脳内を満たす。パラシュート展開まであと四四九秒という警告メッセージが流れたが、幻聴かも知れない。

思い浮かぶのは幼い頃の記憶。想い出は逃げ込む場所ではないが、精神の平衡を保つのには役立つ。死に直面した場合には逃避も許されよ

う。
笑い声の絶えぬ温かな家庭。豪奢な屋敷と広すぎる庭。菓子の焼ける甘ったるい香り。木刀の素振りが空気を切り裂く心地よいノイズ。子供が育つのに完璧すぎる環境は、やがて徐々にではあるが崩壊を始めた。父母の長期の不在。物騒すぎる大勢の訪問者。銃声と剣戟の音。ちちうえ。ちちうえ。どうしてぼくをきらうのですか。ははうえ。どうしてちちうえをたたくのですか。
そして突然の拉致。妖怪の腕にしか見えない代物に腰を掴まれ、気づけば戦火の只中に投げ込まれていた。
そこが函館という街であることを知ったのは後のことである。
幻覚にしては生々しすぎる嗅いが鼻を突いた。乾燥しきった空気と磯の香りは北曾（えぞ）特有のそれだ。まさかまた函館に帰ってきたのではあるまいな……。

きいた

意識を取り戻した蒼海三樹夫（そうかいみきお）は両眼をこじ開けた。見知らぬ天井がそこにあった。背中の柔らかな感触は、重力不適応患者用のウォーターベッドだろう。

透き通るような白い肌と、緑色の長髪が印象的な娘がこちらを見下ろしていた。甲高い声で相手はこう告げる。

「皮下注射で筋肉修復剤（マッスルプロテナー）を打っておきましたけど、まだ立たないほうがいいですよ。骨の密度が薄れていますから、あっさり疲労骨折するかもです。宇宙から帰ってきた人はたいていこれをやらかしますね」

半身を起こしながら三樹夫は言った。

「平気だよ。俺は地球暮らしも長いし、鍛え方も半端じゃないからさ。取りあえず救助してくれたことには感謝するぜ。さっそくだが確認したい。ここは北曾（えぞ）なんだろう。それとも公前大島かな？」

話したい。ここは本当なんだろう？ それも村前乃島なの？」

「よくわかりましたね。ここが〝武帝の島〟と知ったうえでの来訪ですか？」

「違うよ。純然たる事故さ。運命と因縁に弄ばれた結果でしかない。でも、ピンチをチャンスに変えてこそ人生の達人。今回のアクシデントも存分に生かしたいな。さっそく文句で悪いんだが、君じゃなくてごく普通の看護婦に替えてもらえないか」

「どうして!? 僕みたいな可愛いコに看病されて不満でもあるの？」

「可愛けりゃ性別なんか気にならないって奴もいるが、生憎と俺の器は小さくてね。男の娘を受け入れる余力はないのさ。うまい化粧だとは思うけど、雌の匂いがまるでしないんじゃ騙されようがないだろ」

相手は自分の額を指先でこすりながら言う。

「その様子だと心配はいらないみたいだね。悪いけど他の者に交代は

できませんよ。僕は命令であなたの側を離れられないんです」
「つまり君は武帝と話ができる間柄、というわけだな」
「はい。僕の名はイリーナ・チェーホフ。その母はマーシャ。その祖母はオーリガ。三代にわたって武帝渉外担当を任されております」
「ならば武帝に会わせて欲しいぜ。色々と聞きたいことがある」
「その前に身分を明らかにしていただかないと。あなたから採取した遺伝子情報を自衛軍専用ネットの〝ネオ・マミー〟とマッチングさせてるんですけど、回線がブツ切れで反応が鈍いんですよ。こっちもハッキングしてるんで文句は言えませんがね」
嫌な予感がした。汎用量子コンピュータのネオ・マミーだが、データの大部分は月面に移行ずみだ。単に回線が切れただけならいいが、もしや本体が物理的に破壊されていたとすれば大事（おおごと）である……。

「俺は蒼海三樹夫。連盟航宙自衛軍（スターミィ）中佐。所属は十字軍（クルセイダーズ）。月軌道上で国籍不明の劍冑と交戦し、地球まで蹴飛ばされた落武者だよ。救助には感謝してる。礼（れい）は近いうちに」

「口約束はお断りだよ。サービスには料金がかかるの。救援費用を実費で頂戴したいわね。自衛軍に請求書を出してもいいかな？」

「騎乗していたズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）をくれてやるよ。それでチャラってことにしてくれないか」

「無理よ無理。回収したけれど、もうただの残骸。スクラップにするしかないわ」

「バトル・メモリーを漁れば戦闘の詳細が残っているさ。軍の最高機密だ。きっと武帝も興味を持つだろう」

「どうかしら。あの人は刃を交える前に敵情を調べるのを卑怯だと言

うくらいよ　正義の道を貫く者に　まっさらな状態で敵を圧勝したな

れば駄目なんですって」

そうイリーナが話した時、病室の外から騒音が鳴り渡ってきた。秒単位で急激に大きくなっていくそれは、明らかにエンジン音だ。

視線を窓外に向けると、古めかしいエア・クッション型の揚陸艇が浜辺に上陸してきたところだった。

「大和海軍のLCAC（エルキャック）だぞ。軍用のホバークラフトだ。物持ちがいいな。函館あたりから来たんだろうぜ」

「多分そうね。あなたの身柄を拘束するつもりじゃないかしら」

「役人根性が染みついた連中だから、そこまで勤勉じゃないと信じたいけどな」

ややあって病室に[illegible]入って来た。

ややあって褐色の肌をした女が入って来た
「イリーナ。武帝が呼んでいる。大和政府から正式な依頼の打診があったらしいわ。すぐに行って。その男の監視は私がするから」
豊かな銀髪。品良く尖った耳。赤と黒を基調とした露出の多い衣装を纏いながらも下品な感じはしない。かといって清楚というわけでもない。蝦夷（えみし）であることは間違いないが、過去に相対したどんな女とも違う。どことなく人間離れした美女であった。
立ち上がったイリーナは、会釈してから告げる。
「心得ました。渉外担当として話をして参りましょう。では奥方……じゃなくて、ええとその……とりあえず蒼海中尉をよろしく」
「…………」
どこかあきらめにも似た横顔すらもまた美麗であった。渉外担当と入れ替わるかたちで三樹夫の隣に座った彼女は、仏頂面のまま、こう切

れ替わるように三樹夫の隣に座り、彼女は[illegible]
り出した。
「それで……命の恩人に感謝の言葉はないの？」
「なんと、これはしたり！　知らぬこととは申せ、失礼いたしました」
「イリーナから聞いてない？　あのオカマは無駄なおしゃべりばかり。肝心なことは言わないんだから」
「つまり、洋上に墜落した僕を回収してくれたのはあなたなのですね。こんな美人に救助してもらえるなんて光栄ですよ。感謝します。いや、ぜひとも感謝させて欲しい」
相手は、シベリアの永久凍土から発掘されたマンモスに匹敵する冷たい目線を繰り出してきた。三樹夫は少しも堪（こた）えずに続ける。
「ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）を浜へ引っ張り上げるなんて、その細

腕じゃ無理。つまりあなたも仕手なのですね。武帝の軍が用いる劔冑は大部分が真打と聞きます。いずれ機会があれば、是非とも拝見させていただきたいな」

相手はまだ口を開かない。まだ揺さぶりが足りないのだろう。仕方ない。怒らせるか。

「それにしても武帝が妻帯者とは知りませんでしたよ。俺も命知らずですけど、さすがに奥方を口説くのは遠慮しておいたほうが無難でしょうか」

言い終えた数秒後、三樹夫は企みが失敗したのを悟った。怒りは本音を引き出すキーとなるが、それは常人が相手の場合のみだ。

「奥方なんて呼ぶのはあの子だけよ。私は武帝（あのひと）の劔冑（つるぎ）でしかないんだ

から」
意外すぎる返答に三樹夫は身を固くし、相手の瞳を見据えた。常人の眼光とは明らかに違う輝きを放っている。過度な妖艶さは人間のそれではない。
思い至ることがあった。真打の中には、辰気の力を使い、鍛冶師として生きていた頃の姿に肉体変成を成し遂げる妖甲があると聞く。
もしやこの女がそれか？
奇妙だ。あの眼差しにはなぜか見覚えがあった。記憶の底をまさぐるうちに、なぜか胸に鈍痛が走った。
口に手をあてて吐き気を堪える。耐えきれないトラウマに行き着いたのと、極度の空腹に胃がやられたらしい。三樹夫はベッドから起き上がると、よろけつつも歩み始めた。
「待ちなさい。どこに行く気？」

「行きなさい。どこに行く気？」

「まずは飯だ。飯を食うところからすべては始まる。なにか食わせてもらう。食堂くらいあるんだろう」

壁に半身を押し当てながら廊下を歩く三樹夫に、蝦夷の女が言った。

「無茶をするのはやめておきなさい。傷が開いても知らないわよ」

「遠慮するぜ。ひとりで立てぬ者はひとりで飯が食えなくなる。ひとりで飯が食えぬ者はひとりで戦えなくなる。

場で打ち負かされようと、剣冑を失おうと、俺は竜騎兵（ドラグーン）なんだ。二四時間いつでも戦える躰にしておくのが務め。それをやめることだけはできない……」

「……仕方ないわね」

背後から金属音が鳴った。剣冑が、独立形態から本来あるべき姿へ戻

背後から金属音が鳴った。鋏脚が、独立形態から本来あるべき姿へ戻る際に奏でる不協和音にそっくりだった。
そこに現れたのは紅き鋼鉄の蜘蛛。これが蝦夷の女人の本来あるべき姿なのだ。
《肩が嫌だったらだっこしてあげましょうか。今なら手足が八本もあるからお安いご用よ。最初から蜘蛛の姿で現れてもよかったんだけど、この恰好だとたいていの人はびっくりしてしまうから》
紅蜘蛛は数本の足で三樹夫を器用に抱きあげた。甲鉄のそれは切っ先鋭く、かつ冷たかったが、三樹夫もここで抵抗するほど無粋でも元気でもない。
「独立形態もまた華麗かつ優美。ここは世話にならねばいけない場面だ。俺は恩も恨みも忘れない。あなたの真の称号は？」
相手はさらりと金打声で語った。

せいしゅうせんごうえもんのじょうむらまさ
ツルギ

《勢州千子右衛門尉村正。その銘を継ぐ最後の劍冑》

一般大衆の間からは忘却されつつあったが、劍冑の仕手の間には伝説的な色彩を帯びて語られる銘に、三樹夫は全身を硬くするのだった。

情報を自在に入手できる軍人として、三樹夫は三世村正の履歴を見聞きしていた。

百年前の大和騒乱を（結果的にではあるが）解決へと導いた業物だ。正と邪を兼ね備える伝説の劍冑は、怨嗟の声に満ちた目撃例で存在が確認されていたが、ここ数十年は行方不明であった。

朽ち果てたとは思えない。真打であれば数百年の冬眠などたやすい話。現に三世村正が打たれたのは南北朝時代なのだから。あの妖甲はどこかに潜んでいるに違いない。

それが武帝と通じていた事実を知った三樹夫は、まるでローマ法王と道で出会(でくわ)した敬虔なクリスチャンのように身を縮めたが、ここで呑まれるわけにはいかなかった。

常に大胆であり続けなければ、本懐を遂げることなどできない……。

「そうか。あなたが村正か。いや、仕手としてお近づきになれたことを嬉しく思いますぞ。やっぱりいい女は抱かれ心地も一味違いますな」

不意に村正の頭部が傾いた。三樹夫は渡り廊下に滑り落ち、尻餅をついた。

《軽口が叩けるくらいならもう平気でしょ。ここが旗亭(きてい)よ。お代は取[illegible]》

らないから好きなものを食らうがいいわ》
そこは大衆食堂めいた広い部屋だった。すべて木造と古めかしいが、清潔さは確保されている。
村正の話では、この島には現在四四九人の武者とその家族が生活を営んでいるという。全員が流れ者の集団だが、そうであるが故（ゆえ）に職人も多い。家屋建築やその内装などお手のものだ。
また外征が少なくなると己自身と向き合う時間が増える。鍛刀を志す者が多いが、造園や陶芸、はては薪水（しんすい）の労を厭わぬ者も多かった。
そのせいだろうかメニューは驚くほど豊富だ。居並ぶお品書きの上には電子黒板が吊り下げられており、筆文字で【無料の昼飯はない（タンスターフル）】と表示されている。
警戒の度合をひとつあげる三樹夫であった。食事が無料か有料か曖昧になったからでは断じてない。その標語が、月世界に生きる者が心に

刻むスローガンだったためだ。

つまりは警告だ。お前のことを常に見張っているぞと。現に人相の悪い男女が三樹夫の一挙手一投足を睨んでいる。ただし側に紅蜘蛛がついているため、直接ちょっかいを出してくる奴はいない。

「宇宙食もそこそこ進化したけど、味はまだまだでね。重力のあるところで食べるものには敵いませんよ。うん？　冷やしたぬきまである。あんな反人類的な代物を用意しているとは流石ですな」

村正は言葉を濁すように語った。

《……ここの最高権力者は武帝なのよ。武帝が白だと言えば、ブラックホールでさえホワイトホールになるわ。冷やしたぬきが反人類的な料理であることは同意するし、私の前の仕手に到ってはその存在さえ認めていなかったけれど、武帝の好物である以上、メニューから外す

ことは許されないの……》

「せっかくだから俺はそれをもらうぜ。天かすを冷たい汁につけて食うという蛮行に挑戦してみるとするか」

厨房に注文を通すと、すぐ冷やしたぬきが出て来た。天かすとネギとワカメとキュウリがこれでもかと盛られており、ヴォリュームは満点だった。

味も悪くない。というより旨かった。心身ともに病みきった躰には炭水化物の集合体が心地よかった。

《蓼食う虫も好き好きだけど、それだけは理解できないわ。とてもじゃないけれど普通の食べものには見えない》

「普通に生きるのがとても難しい御時世ですからね。正が邪となり、邪が正となる世界で生き抜くには、違う角度から物事を眺めるのも大

事。この冷やしたぬきだって馬鹿にしたものではありませんよ。価値観を一変させるような外圧こそ、世界を変える鍵となるかも知れませんし……」

さらに言葉を重ねようとした三樹夫であったが、いきなり響いた放送が舌を止めた。

『こちらイリーナ。奥方と蒼海三樹夫中尉に達します。至急、武帝の間へ。繰り返します。奥方と蒼海三樹夫中尉は直ちに武帝の間へ。続いてすべての武者に通達する。我らはこれより四八時間の臨戦態勢に入る。総力出撃の公算高し。作戦発動に備えて待機せられたし！』

いよいよか。三樹夫は残った蕎麦を一気にすすり、手の甲で口許を拭った。

腹は満ちた。これで肝も据わった。力が漲ってくる。

本丸に斬り込み、武帝という存在が外圧たりえるのか、見極めてやろうじゃないか。

3

三世村正に導かれて到着したのは豪奢な別邸であった。

石造りなのは防寒と防弾を期待しての選択だろう。ロシア建築のバロック様式を基調にしてはいるが、他にも色々と混ざっている。

室内に入るとイリーナが待っていた。緊張した面持ちなのは、ＬＣＡＣ（エルキャック）で来島した政府要人との折衝が面白くない結果に終わったせいだろうか？　三世村正も蝦夷の姿に戻り、イリーナの横に並ぶ。

部屋の奥には御簾（みす）が用意されていた。その向こう側を窺い知ることはできないが、シルエットは見える。背もたれの高い椅子に誰かが腰か

けているようだ。
武帝その人だろう。先に話しかけたほうがよいだろうか？　迷っているうちに、御簾に味気ない文字が描き出された。
『蒼海三樹夫。武帝として我らは貴殿を歓迎するが、助けられた事実を忘れるな。武士は相身互いという。だから今度は我々を助けてもらいたい』
防弾スクリーンを兼ねた電磁御簾だな。三樹夫はそう判断し、こう切り出した。
「救援には深く感謝する。三世村正という真打が近くにいなければ、俺は魚の餌になっていたはずだ。どんな形になるにせよ、恩と恨みは必ず返す。それが俺の信条。具体的にはなにをすればいいのだろうね？」

すぐさま御簾に返事が映った。

『今宵、武帝の軍は傭兵としての約定を果たすため出撃する。目的地は月。そこから来たお前に水先案内を頼みたい。場合によっては戦闘参入も』

イリーナが補足説明に入った。

「依頼主は大和国陸海軍両大臣です。まさかあの二人がここ松前大島まで足を運び、契約を依頼するとは思ってもみませんでしたね」

横から三世村正が言った。

「盟約はきちんと説明し、納得させせたんでしょうね？」

「もちろん。二人ともお爺さんだから、死ぬのは怖くないみたい。総殺傷数から二をマイナスするのを忘れないでね」

またしても電飾メッセージが走る。

『イリーナ。武帝の掟を言え』
「はい。……〝善悪相殺〟です」
『その真意は？』
「首を取った敵兵の数を勘定し、同じ数だけ約定した大和国陸海軍将兵の命を奪う。それこそが武の象徴であり、正義顕現への道なり！」
三樹夫は片手をあげて割り込んだ。
「盛り上がってるところ悪いんだけどさ。そういうことなら協力はできないぜ」
イリーナが慌てた様子で、
「ちょっと！　あなたには一宿一飯の恩義があるでしょう！」
と問い詰めたが、三樹夫は怯まない。
「一飯は与ったけど、一宿はまだだよ。とにかく、もう少し手の内を曝してくれないと、こっちも腹を割って話せない。まずは武帝と肉声

で直に会話をさせてくれ」
再び御簾に文字が流れた。
『理由があって声を出したくないのだ。非礼は詫びるが、このままで頼む』
「出したくないんであって出せないわけじゃないんだろう。半分筆談じゃ真意が読み取り難いんだけどな」
今度は三世村正が早口で言った。
「武帝は過去の戦いで胸に深手を負っていて、大声をあげられないのよ。小声でも負担がかかるみたい。無茶の強要はあなたの価値を落とすだけ」
「わかった。悪かったよ。ハンデがある奴を苦しめるのは俺の趣味じゃない。ただし想像と推理は許してくれないかな。

負傷したと言ったが、真打劒冑ならば治癒能力が半端じゃないはず。仕手が傷ついたのであれば、たちどころに治してしまうだろう。三世村正でも治療ができない傷とは、一体なんだろう？」
三樹夫は迷わなかった。ここは手持ちのカードを投げ出し、大勝負に出る頃合いだ。

「ひょっとしてだけど……金神片（こんじんへん）の一撃を受けたとか？」
イリーナと村正の表情が凍りついた。安易に招き入れるべき男ではなかった。そう判断したのだろう。
『なぜお前が金神片を知っている？』
はったりと当て推量だったが、どうやら正解らしい。武帝からの詰問でそれが証明されたと考えてよかろう。
「連盟航宙自衛軍（スターミィ）の情報機関を舐めないほうがいい。特に十字軍（クルセイダーズ）は

騙せないぜ。
西洋じゃ聖骸断片(ラピスサギー)とも呼ばれるそいつは、ヒトをヒト以上のものに進化させる物質だ。つまりは神の血肉。金神片を手にした者は、望めば不死にもなれる。違うかな？」
返事はなかった。まだ手札が足りないようだ。ならばあれを出すか。
「俺はつい半日前まで、武帝の島は歴史に埋没した過去の存在だと侮っていた。その認識を改めてくれた女傑がいてね。その名は黒瀬由(くろせゆ)梨巴(りは)中尉。知らないとは言わせないぜ」
すぐさま電文が御簾に流れた。
『あの娘はどうなった？』
「死んだよ。今頃は冷凍肉になって太陽系の端っこを飛んでるさ。それも光速に近いスピードでね。助けようとしたんだが、その直後に俺

も地球まで蹴り飛ばされちまった。
たぶんだが由梨巴の幽霊が俺をここに導いてくれたんだろう。彼女は教えてくれたぞ。俺も武帝の犠牲者だってな。それで繋がった。悪しきこの世界に俺を拉致したのは武帝と呼ばれる悪鬼だ。違うかい？」
三世村正が足早に御簾の反対側に回り込み、蚊の鳴くような声で内談を始めた。三樹夫が静かに見守っていると、やがて村正が暗い表情で戻って来た。
「……あなたには幾重にも詫びなければならないわね。こちらの世界にあなたを召喚したのは間違いなく武帝と私よ。けれどもあれは事故だったわ。到着と同時に函館蜂起の戦闘に巻き込まれて、あなたを見失った。その後、どうしても再発見には至らず、死亡判定が下されたの……」

函館蜂起とは一七年前に勃発した北曾（えぞ）独立謀議のことだ。

五稜郭の復興を願い、函館に結集した過激派組織が、停泊中のイギリス劔冑母艦〈アンドレア・ゲイル〉をシージャックし、北曾共和国樹立を一方的に宣言した事件である。

七〇年前の日露停戦条約により、留萌（るもい）には露軍の駐屯地が築かれていた。戦力としては中隊規模でしかなく、租界に居住するロシア人の保護すら手に余る状態であったが、過激派は真っ先にその撤廃を要求したのだ。

大和国政府は北曾鎮守府と連携し、四八時間で騒乱を解決した。代償として函館市街は灰燼（かいじん）に帰し、死傷者二万人以上の大惨事となった。

ベテラン艦である〈アンドレア・ゲイル〉も沈没したが、ロンドン政

府の抗議は意外にも等閑なものであった。
ここに疑惑が生まれた。イギリスには強く叱責できない事情があるようだと。
事件の裏には、大和の興隆に歯止めをかけんとする大英連邦の影が見え隠れしていた。北曾独立派を焚きつけて資金援助を行い、〈アンドレア・ゲイル〉潜入の手助けをしたのは英国秘密情報部(SIS)であるとささやかれている。北曾を独立させ、武力進駐を実施する計画書が流出したのは記憶に新しい。
その狙いはひとつ。武帝の島を制圧する足がかりにするためだ。
だが、大和国政府の対応は早く、しかも強烈だった。時の政権は極秘裏に武帝とコンタクトを取り、叛乱分子の掃討にその力を拝借したの

である……。
厳しい表情を崩さず、三世村正はなおも続けた。
「……わけあって金神片を手に入れた武帝と私は、新たな陰義も手に入れた。時間跳躍という超常の秘技を。これを駆使すれば、別の時間軸から劒冑や人間を引き寄せることさえ可能となるの。
そして私たちは陰義を使いこなせる強き武者を求めた。それも因縁のある仕手を。我らの同志となり、一緒に戦ってくれる竜騎兵を……」
「宮本武蔵(みやもとむさし)か柳生十兵衛(やぎゅうじゅうべえ)か沖田総司(おきたそうじ)でも召喚すりゃいいだろ」
「私たちじゃないけれど、召喚した実例もあったわ。別の時間軸でね。ただ、個性が強すぎる武者はコントロールができないのよ。暴走されたのでは逆に迷惑なだけだし」

さら

「勝手な言い草だな。だから四歳の子供にすぎない俺を掠ったのか。洗脳しやすいとでも判断したのかい？」

「それも違うわ。時間跳躍は完璧ではないの。タイムマシンのように狙った年月日へ直接行けるわけじゃない。数年単位の誤差は生じて当然よ。本当なら成人のあなたをスカウトしたかったんだけど……」

「だから、どうして、俺なんだよ！」

その返事は電光メッセージで提供された。ただし御簾にではない。両眼を隠すハイドロゴーグルにいきなりディスプレイされたのだ。

『お前が類い希な技倆を親から、特に母親から受け継いでいるからだ』

武帝からの直接回答である。普段は視界に映る対象物の補足情報が表示されているだけだが、制御ＯＳに無線干渉したのだろう。

「母親だって？　あんたがなにを知ってるっていうんだい？」

『お前以上に熟知している。お前が生まれる前から因縁で繋がれていたから。母親も得意だったぞ。〝林檎には永遠に突き刺さらない矢（パラドックス・オブ・テル・アンド・アップル）〟の陰義がな』
「……どうしてそれを？」
『黒瀬由梨巴からの報告だ。エージェントとして非常に優秀だった。お前と接触した直後から子細を洩らさず通達してくれていたのだ。由梨巴を失ったのはかえすがえすも残念。血の滲む苦労の末に〝天座失墜（フォーリンダウン）・小彗星（レイディバグ）〟の足技をマスターしていたが、あまり役には立たなかったな』
「悪くない必殺技だが、破壊力がいまひとつな気がした。思うに、よほどの真打が得意としていた技を、数打のズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）にやらせた弊害だろうな」

三世村正が肯いた。
「あの蹴り技を得意としていたのは本物の銀星号よ。信じられないでしょうけど、江ノ島半島はその昔、ひとつの島だったの。銀星号が力任せに蹴り飛ばし、本土にめり込ませてしまったわ」
「由梨巴の蹴り技はアテン・ボールには通用したが、本命の劒冑にはは効果なかった。俺の弓もな。命中はしたが、致命傷にはならなかったぜ」
今度は武帝からの質問が眼前に表示された。
『そうか……弓か。あの技はいつマスターした？』
「別に修行なんかしてない。似たようなことは子供の頃からできたよ。ボールでも石礫でも軌道は読み切れたから、投げるのも避けるのも簡単だったぜ」

『それはお前の眼球が異常すぎるためだろう。確かめたい。ハイドロゴーグルを取れ』

「由梨巴から報告を受けているんだろう。これは頭蓋骨に直接固定しているから、着脱は外科医の立ち会いがないと……」

御簾の向こうで武帝の片手があがった。途端に、村正の手刀が空気を切り裂き、三樹夫の眼前を舞った。遮光器の役目も兼ねるハイドロゴーグルのスクリーンレンズだけが綺麗に外れ、吹き飛んだ。久しぶりに肉眼で外界を見る三樹夫であった。

再び御簾にて台詞が語られる。

『村正。間違いないな。あの眼だ。あまりにも恐ろしすぎるあの瞳だ』

「ええ。召喚時の個人特定の際にも切り札となりましたからね」

『血は争えない。お前の母親もまったく同じ糸目をしていた。その下

にどんな瞳を隠しているかも、よく知っているぞ。昆虫のような複眼であろうが』

誰にも話さず、誰にも見せなかった真実を指摘され、言葉を失う三樹夫に、新たな御諚（ごじょう）が飛んだ。

『貴様の異能と技倆を我らに貸せ。正義が勝利するために』

「断ったらどうなる？　俺を殺すかい？」

『いや、その必要さえない。地球人類は鏖殺されるのだから。生械体（エジプシャー）によって』

見たくはないが直視しなければならない単語だ。それを並べられ、三樹夫は一気に追い詰められた。

生械体（エジプシャー）という脅威の真髄を知る彼には理解できていた。敵がその気になれば、旧約聖書以来の災害を地上に起こせると。

好む好まざるにかかわらず、選択肢はなかった。ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）を全損した現在、劒冑を調達しなければ頓死して終わりだろう。

イリーナが一歩前に出ると、こう報告した。

「大和国の陸海軍両大臣は生械体（エジプシャー）の排除を依頼してきたのよ。連盟航宙自衛軍（スターミィ）の戦力ではもはや月面を制圧した敵勢力の排除は不可能だと。代価を払ってでも、武帝の力を拝借したいと」

「そうしなければ人類という種族が危機に瀕する、というわけか。過程はともあれ、俺をこっちに引っ張り込んだのは、こうした事態に対応させるためだろうが。いいさ、乗ってやろうじゃないか。ただしタダで手伝えって言うんじゃないよな？」

武帝は沈黙のうちに答えた。

『望む代価はくれてやる。もとの世界に帰りたいのであれば戻してやる。蒼海三樹夫という偽名ではなく、永倉豹輔（ながくらひょうすけ）という昔の本名が使える世界へ』

「原状回復なんて当たり前だろう。もうひとつ条件がある。金神片を見せろ。できることならばよこせ」

限度を超えた要求に、武帝は想定外の反応を見せた。

不意に電磁御簾が消えた。暗がりの向こうから誰かがゆっくりと歩いてきた。すらりとした細身の人物である。

逆光で表情は窺い知れないが、影では男に思えた。軍服らしいスーツをまるでマントの要領で着こなしていた。何年も愛用しているのか、その裾はボロボロだ。

「いいだろう。見せてやる」

だが、発せられた声音は女性特有の甲高いそれであった。小さいがよく通り、聞き取りに不自由はない。
三十路（みそじ）前後と思われる美女であった。小さな顔は怒気と気品に満ちており、大きな瞳と引き締まった唇が魅力的だ、黝（あおぐろ）い髪を乱雑なショートボブにしており、荒々しさと清々しさを同時に醸し出している。
異様なまでに短いスカートは動きやすさを第一に考えた選択であろう。腰に差した長刀が実に厳めしかった。
武者だ。それもかなりの使い手だ。本当にこの女が武帝なのか？

三樹夫がそう直感した時、彼女は想定外の行動に出た。
「金神片はここにあるぞ。欲しければその指で奪うがいい」
女は黒の胸当てを力任せにはぎ取った。大きめの乳房が顕わになった。驚いたことに、乳頭に相当する部分が黄金色に輝いていた。
「いつとも知れぬ時の狭間で金神と刃を交え、打破の代償として受け取った癒えぬ傷だ。お前のハイドロゴーグルと違い、癒着していて外科手術でも摘出できない。無理に抜けばどうなるか知れたものではない」
奇抜な色彩を放つ乳房の迫力に押された三樹夫は、辛うじて言葉を繋げる。
「結構なものを見せてもらった。もういい。しまってくれ。まさか武帝が女だとは思ってもみなかったよ」
三世村正が気遣うように則に寄り、掬当てを直した。武帝は上着の裾

を翻し、よろけるように椅子に座り直す。どうやら体力に余裕はないらしい。外見以上に加齢しているのではなかろうか。
「恥をかかせて悪かったな。鉛刀一割（えんとういっかつ）の覚悟で微力を尽くそう。ただし、あんたへの恨みが消えたわけじゃないからそのつもりでな」
武帝は蚊の鳴くような声量で話した。
「あたしだって貴様には悪縁があるんだ。償いをした後で親の借りを返してもらうぞ」
「ふん。上等じゃないか。最後にひとつ教えてくれ。武帝の本名はなんだ。永倉豹輔という俺の実名を知ってる以上、そっちも名乗る義務があると思うが」
般若のような表情で相手は告げた。
「時空を駆け、この世界に漂流し、襲名した時から昔の名前は棄て

た。あたしは武帝だ。それ以上でも以下でもない」
迫力のありすぎる台詞の端々から、相手が常人ではないことが理解できた。少なくとも、ここの世界だけを終の住処にしている女性というわけではなさそうだ。
この俺と同じように……。
「じゃあせめて歳を教えてくれよ。俺は男女差別は否定するが、年下の女に命令されるのが面白いか面白くないかって聞かれたら……」
「戸籍の年齢か？　それとも生理的な年齢か？　それによってかなりの差があるが、戸籍だけ教えてやろう。一〇〇歳を超えたあたりだ」
誕生から一世紀を経ているようにはとても見えない。やはりこの女は別世界との隘路を行き来しているのだ。
「それにしてはお若いですなあ。外見はせいぜい三十路すぎって感じ

ですよ。魂を宿した真打劔冑の呪縛ってやつですかね」
「村正に仕手の加齢を遅らせる陰義などない！」
凜とした調子は頼もしさすら感じさせた。さすがに健康は損なわれているのだろうが、剣士としての気概は失っていない様子だ。
三世村正が三樹夫の想像を補完するかのように告げた。
「武帝は無名軍が占領した松前大島（ここ）に帰着したけれど、ずっと暮らしてるわけじゃない。危険と判断した時間軸があれば、己の意志で出向くの。己の義を正すために。だから武帝はあらゆる場所に存在するし、あらゆる場所に存在しない……」
その時だった。
廊下を駆け寄ってくる無粋な足音が響いた。
「武帝！　それがしでござる。渡子柔郎（わたりしじゅうろう）でござる。一大事が出来いたし申した！　昇る満月をご照覧あれ！」

一同は外へ急いだ。夕闇が勢力を拡張しつつある東の空に、不安感を増幅する嫌な円環が見えていた。

満月だが、見慣れたそれではない。浅黄色でなければならない表面は、赤銅色に燃えていた。皆既月食かと錯覚する色合いであったが、今宵そんな天文現象が起こることは理科年表には記されていない。時おり確認できる爆発反応がすべてを物語っていた。月は攻撃を受けているのだ。

そして――割れた。

地球が保有する唯一の衛星に罅（ひび）が走り、大地が吹き飛ばされた。まっぷたつや粉みじんというわけではないが、瓦解へと舵を切ったのは確かなようだ。

性急すぎる月面開発が未曾有の大失敗を犯したのか？　いや、違う。あれは戦火とみて間違いない。月面はやはり生械体（エジプシャー）との決戦場に指定されたようだ。
蒼海三樹夫は軍人として、場違いなまでの焦りと痛痒感を抱くのだった。畜生め。どうして俺があそこにいないんだよ！

《にゃが――――――――――――!?》

天体望遠鏡なみの視力を持つ三世村正が、満月の残骸を指さして叫んだ。あまりの声量に誰もが耳を押さえた。
《ちょっ、なっ、ながにゃんでつつつつき》
遅れて登場した武帝が静かに窘（たしな）める。

「落ち着け、村正。あれと似た現象なら時空の彼方で見ただろ。遅かれ早かれ起こる予定だった事が今起きた。それだけの話だ。今はやらなくちゃいけない事があるだろう」

武帝は渉外担当を呼び寄せると、

「イリーナ。蒼海中尉を宝物殿へ案内し、十戒の真打をくれてやれ。あんな業物を扱えるのは、異様な両親のもとに生まれた男だけだ」

と告げた後、さらに鋭い口調で命じた。

「第一波攻撃隊の出撃準備に入れ。あたしが先陣を切る！」

4

宝物殿は地下の一角に位置しており、かなり歩かなければならなかっ

た。
武帝の一方的な申し出だが三樹夫はこれを受けた。他に選択肢はなかった。劒冑がなくては戦えず、身を守ることもできない。
三樹夫は複雑な感情を押し殺し、地下道を進む道すがら、イリーナから情報を引き出すことに集中した。
「……つまり武帝は時間と空間を自在に行き来し、仕手と劒冑をスカウトして来た。そう解釈していいのかい？」
「答はイエス。でもかなり無茶をしてるから、肉体と精神に負荷がかかってる。時間遡行の間に生理年齢が歪んだって話だね。若く見えるけれど、もうお婆さんだよ。真偽を糾すほど命知らずじゃないけど、僕が子供の頃からずっとあの外見さ」
「武帝の本名は？　お前も知らないのか？」
「教えてくれないんですよ。ある意味、年齢を聞くより鬼門だね。名

字は〝イチジョー〟か〝イチロー〟らしいけど、呼び名を間違えて刀の錆にされた奴が十指に余ると聞けば、みんな素直に〝武帝〟って呼ぶさ」

「じゃあ三世とのつきあいは長いのか？」

「この島に居着く前からだよ。奇縁で紅い蜘蛛さんと一緒になったけど、劔冑と結ばれたのはそれが最初じゃないみたい。以前は碧い天牛（かみきり）虫（むし）の劔冑と戦ってたって、奥方が話しておられたわ」

量産品の数打と違い、真打の場合、劔冑が主と認めなければ装甲はできまい。帯刀儀礼が行われているかどうかは微妙だが、二領の真打を我が物にするとは、やはり武帝は只者ではないようだ……。

「着いたわ。ここが宝物殿よ。劔冑に関わる者なら、垂涎の的。片手を切り落としてでも見学したいって輩がごまんといるよ。僕も扉を開

くのは久しぶり」
静脈チェックとカードキーと南京錠という新しいのか古いのかよくわからないセキュリティが解除され、鉄扉が開いた。
内部は思ったより狭かった。電灯が点（とも）ったが、どうにも薄暗い。洞穴を利用したスペースに様々な干戈（かんか）が陳列されている。物音ひとつしないが、場は殺気に満ちていた。これらの劔冑はみんな生きているのだ……。

「武帝からあなたに指定された真打を紹介するけれど、他にも相性がいいのを見つけたらそっちを奨めるわ。こうしたものは結局は縁（えにし）だから」
妖甲の類が犇（ひし）めいている中を三樹夫は進んだ。なるほど、古今東西か

ら収集した国宝級の業物が並んでいる。そのうちの一領に視線が釘付けとなった。色合いは地味だが、妖気は桁違いだ。
「やっぱりそれが気になるのね。武州兵法五輪（ぶしゅうへいほうごりん）よ。まあ、触らないほうがいいわ。千年にひとり出るか出ないかの武人でないと扱えないって、武帝も敬遠してるくらいだから」
「宮本武蔵の劔冑かよ。敬意は払うが、興味は薄いな。俺は弓が専門だから」
「こっちのはお奨めよ。一輪（いつりん）門派が拵（こしら）えた銘刀。その名もマイケルギョギョッペン！」
「なんだそりゃ？　激安の缶ビールと同じ名前じゃないか。いかにも軽そうだがアルミ製みたいだし、こいつは競技用劔冑（レーサークルス）の類だろ？　いらないよ」

―陰義は殺戮幼稚園！　雑魚が使うにはピッタリ！」
「だからいらんと言っているだろ。武帝お奨めのはどれだよ」
イリーナは表情を改めると、いちばん奥に三樹夫を誘った。
「あれがそうよ。我々は〝破邪十戒（デカログス）〟と呼んでいるわ。武帝がシナイ山から回収してきたらしいけど、子細は教えてくれないの」
三樹夫は見たままの感想を口にした。
「独立形態が御神輿（おみこし）というのも珍しいな」
「正確にはアーク――聖櫃（せいひつ）だけれど、似たようなものよね」
「移動する時は家来にかついでもらうのかい？」
「宙に浮いて自走してたって話だけど、僕も見たわけじゃないから。さてと、後は中尉に任せますよ。うまく口説いてくださいな。そしてなるべく早く戻って来て。あなたに先陣をお願いしたいの。月面の地
[illegible]

理にいちばん詳しいでしょうから」
「武帝が先陣を切るって大見得切ってたぜ」
「あの人は破滅的な方向音痴なの。水先案内がいないと一〇倍は時間がかかるわ。中尉には一時間しかあげられないけど、帯刀の儀にはそれだけあれば大丈夫でしょ。

それからもうひとつだけ頼みがあります。破邪十戒（デカログス）と装甲できたら、あそこの木箱を担いできてくださいな」
イリーナが形のよい顎（あご）で指した先には、たしかに巨大な木箱が置かれていた。梵字が書き込まれた封印が貼られ、見るからに儀容を繕っている。
「あれも劔冑なのか？」
「ちょっと違う。劔冑と仕手のセットだよ。皮裏りは折り紙つきらし

ーちょっと違う。劔冑と仕手の[illegible]、[illegible]た。破壊力は折り紙つきらしいけれど、扱いが難しすぎるから凍結してるんだって。正確には発見した時からずっと凍結中らしいけど」
「武帝の切り札ってわけか。中を見ても構わないかな？」
「蓋を戻してくれればいいけれど、お奨めはしないなぁ。怖いし、気味が悪いから。僕も最初に見た時はおもらししちゃったよ」
小便を漏らした相手を助け、厄介事を背負い込んだ過去を持つ三樹夫は、
「要件はわかった。ひとりにしてくれないか」
と言った。三樹夫を気遣ってか、それとも信用しきっているのか、イリーナは背を向けると宝物殿から姿を消してくれた。
劔冑を口説いている場面は見られたくない。相手が仕手としてこちらを認めてくれなければそれまでだ。ある意味、失恋よりも痛手であ

る。
静謐な雰囲気が漂う空間の一角で、三樹夫はじっくりと聖櫃を凝視した。
担ぎ棒が準備された四角いそれは、見れば見るほど神輿に似ていた。表面には複雑な金細工が施されている。刻まれた書体は楔形文字かヒエログリフらしい。
意を決し、指を伸ばして触れてみる。反応はない。神輿はぴくりとも動かない。
だが、しかし――。
うたが聴こえた。
幻聴ではない。指先から刺激が音紋となり、脳髄までダイレクトに伝わってくる。

[illegible]

原初の水（ヌン）の力よ……

詠唱と歌唱の間を行き来するかのような不思議なメロディであった。
思わず三樹夫が指を離すと、響きは止まった。もういちど触れると、今度は言語が流れてきた。
《……どうか私に唄わせて欲しい。もう何千年も聴く者がいないのだ……》
腹に力を入れて不安を押し殺し、三樹夫は言った。
「歌は聴こう。その代償に俺の話も聞いてくれようか？」
《約束する。私の歌を聴けば、そなたの言葉にも耳を貸そう》
よほど観客に飢えていたのだろうか、彼女は朗々と歌唱を始める。

[illegible]

原初の水の力よ　この身に宿れ
我の指に触れよ　いざ土と共に生きん
死と再生の御業　ここに開眼す

原初の水（ヌン）
死と再生（オシリス）

そこで納得したのか、劔冑は沈黙した。ただし、数秒間だけだ。次の瞬間、聖櫃は部品単位に分解し、宙を漂い始めた。鉄片の演舞はすぐに終わった。劔冑は独立形態から本来あるべき姿を取り戻したのだ。王者の風格を存分に感じさせる真打劔冑がそこに顕現した。大きい。ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）の三割増しはあるだろう。広すぎる肩幅にアンバランスなまでに小さい頭部。腕も脚も太く、機動性よりもパワー重視の騎体であることは一目瞭然だ。右手に抱き抱えた

石板も視線を引き寄せる。
ただし糸目を開かぬように注意した。いま過度な刺激を与えるのは得策ではあるまい。
《そなたは変わった武人であるな。目許の金具はなにに使うものか？》
村正の手刀でスクリーンレンズが失われたため、ハイドロゴーグルは根元の部分だけが顔面に張りついていた。遥かな過去から再生した劒冑に説明するのは骨がおれよう。
「化粧やまじないのようなものだ。気にしないで欲しい。それより約束だ。俺の話に耳を貸してもらいたい」
《よかろう。ただ、要件は承知しているぞ。我が三〇〇年の眠りを破りし理由は戦場へと誘うため。違うだろうか》

「いかにも。破邪十戒（デカログス）という御名を高らしめる騒乱の地を準備した。どうか地球人類のために力を貸してもらいたい」
《地球……人類のためか……》
劒冑は暫しの沈黙を保ったが、やがてこう続けた。
《すなわち敵勢力は〝生械体（エジプシャー）〟と呼ばれる存在、というわけだろうか？》
「……そのとおりだが、なぜ知っているのだろうか？」
《私もかつてそう呼ばれていたからだ。我が背（せ）の君（きみ）は再び目覚めたか。輪廻は切れ目なしに巡るものだな。かつて私は海を割り、民を導いた。また同じことをせよと神々が命じているのだろう。だが、それもまたよし。眠るのにも飽いた。遅すぎる初陣の花道を飾るのも悪くはあるまい》

「おお！　それでは！」
《そなたが真の勇者であれば、私と帯刀の儀を結ぼうぞ。敵がなんであれ、誓って勝利を約束しよう。そなたの名は？》
「永倉豹輔（ながくらひょうすけ）。事情があり、いまは蒼海三樹夫を名乗っている。ミキオと呼んで欲しい」
《私も故（ゆえ）あって幾つもの名を使い分けてきたので、気持ちは理解できる。ただし常ならぬ身である私は、自らを律する必要がある。かつて女王とも呼ばれていた過去を捨て、一領の劒冑として刃を輝かせるためにも、こう呼ばせてもらいたい》
一拍おいてから破邪十戒（デカログス）は続けた。
《我が御堂（あるじ）、と》
背筋を冷たいなにかが走り抜けた。俺は本当に真打劒冑と盟約を交わ
[illegible]

そうとしている。その覚悟が求められているのだ。
《そして私のことはどうか〝トトメス〟と呼んでもらいたい。それが最初に呼ばれていた名前だから》
「わかった。実は俺もまた常ならぬ身なのだ。この呪われた瞳を見てくれ」
糸目を崩すと、トトメスから感歎とも驚愕ともとれる金打声が漏れた。
《その昆虫めいた複眼は生まれつきか？　それとも後天的なものだろうか？》

「母からそのまま受け継いだ眼差しだ。俺はこのハンデを逆に自慢し、不幸の言いわけにしてきた気もする。だが、それはもう卒業だ。俺はお前を十全に使いこなすためにのみ、この瞳を使おう」

[illegible]」

《よくぞ言った。ならば御堂の求めに応じよう。この戒律の石板は、あらゆる得物に組み替えが可能だ。御堂の求める刃は？》

「弓。ただそれあるのみ。俺の複眼を用いれば矢は無限の軌道修正ができる。百発百中の技を披露するためにも弓が欲しい。命中精度より破壊力に富んだ一撃を放てる強弓が」

《よろしい。任せよ》

両腕にがっしりと抱きかかえていた石板が弾け飛ぶと、楯と一体型の巨大な石弓に変化を果たした。

《これぞ太陽神（ラー）が宿敵アポピスを射貫いたウラエウスの得物なり。あらゆる貴金属を貫通できる鏃は御堂に勝利を約束しよう。御堂に訊ねる。我らが討つべき敵は何処（いずこ）に？》

「月面だ。すでに手合わせは終えている。スカラベを模した真打の敵

[illegible]

騎と斬り合い、完膚なきまでに叩きのめされた。なんとか復讐したいものだな」

金打声の調子を少し違えてから、トトメスは告げた。

《御堂はスカラベと言ったか。つまりスカラベ（フンコロガシ）を模した剣冑（ケペシュ）なのか？　もしもそれが本当だとすれば……間違いなくあの子だ。我が息子と称した男だ。悠久の歴史が流れたというのに少しも懲りぬのか。

母として仕置きが必要だな。

御堂よ、征こうぞ。いまこそ誓句を紡ぐべき時なり。私に続き、唱和を！》

破邪十戒（デカログス）は戒めの律法であった。よって装甲（ソウコウ）ノ構（カマエ）に用いられる誓約の口上は、こうであった。

汝、殺すなかれ
汝、犯すなかれ
汝、盗むなかれ

瞬間、三樹夫の全身に妖気が駆け抜けた。分解した金属片が総身に纏わりつき、劔冑を再構成した。四肢に力が漲る。

腕を振ってみたが、実に軽やかだ。ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）とは比較にならない。重量から判断して輝彩甲鉄（オリハルコン）のみで打たれた劔冑ではなかろうか。

真打劔冑（ブラッドクルス）――〝破邪十戒（デカログス）〟が仕手と共に開眼した瞬間であった。

《御堂、どうか？　動かすのに難儀しそうなら補佐をするが？》

クルセイダーズ　ドラグーン

「任せてくれ。俺だって十字軍の竜騎兵だった男だ。太古の劒冑であっても見当はつく。操作性に違いがあっても、三〇分で馴染んでみせるさ。まずは手始めにあの箱を担いで、ここから出ようと思う。俺も命令を受ける立場でね」

《あの木箱か？　ぅむ……邪悪すぎるなにかを感じてならぬ。危険物であることは確実。仕手の安全のため、確認が必要だと判断するが》

「ならば確かめよう。別に開けても構わんと言われたからな」

破邪十戒（デカログス）を纏った三樹夫は、木箱の継ぎ目に鋭利な爪を押し込み、壊さないように注意しながら、蓋を外した。

妙な代物が中に隠れていた。

前衛芸術のオブジェだ。見たままを描写すれば、銀色の太い蛇がのたうつ様子を空中で凝固させた、とでもなるだろうか。

ンから、それが単なる邪事象でなく、ここは三樹夫もすぐ理解できた。

しかし　それが単なる邪神像でないことは三樹夫もすぐ理解できた
表面に凹みがあり、緑色の球体が埋め込まれているのが見て取れた。
それは人間の目玉だった。それも少女の眼球だ。しかも動いている！
反射的に後ずさり、拳を振り上げようとする三樹夫であったが、トト
メスがそれを強引に止めた。
《御堂、待つがよい。あれも劒冑だ。それも泣いているようだ
ぞ……》
これこそ武帝が以前から準備していた最終兵器（ジョーカー）であった。
別の時空、別の世界で鍛造雷弾（フォージド・ボム）の爆発を食い止めようとして果てた白
銀の劒冑だ。
本物の〝銀星号〟のなれの果てであった……。

第五編

月読騎

——THE TSUKUYOMI CRUZ

1

肥大化した組織に情報という血液を流すには、集中と管理が必要となる。

軍隊では特にそうだ。洪水となって押し寄せる情報をいかにして捌くか？　秒単位での判断と部隊配備が是とされる最前線では、それこそが勝敗の鍵を握る。

しかしながら、過度の情報集中は諸刃の剣でもあった。部隊が無傷でも首脳部との連絡線が切断されれば、的確な運用は叶わず、兵は各個に戦うしか方法がなくなる。

月世界に押し寄せた侵略者はそれを熟知していた。だからこそまず脳髄を狙った。単純な兵力数では劣るが、情報伝達の手段さえ麻痺させ

れば脆いと。
寡兵だが、それすら強みに転換できる。全情報を自らが管理し、自らが処理する。己が最高意思決定者であり、すべての手駒を自在に操れるとなれば、戦略と戦術の間に生じるタイムラグはゼロとなる。
長き眠りより目覚めた生械体（エジプシャー）の王子は、究極の〝指揮官先頭〟を実行しつつ、殺戮衝動を全解放していたのだった……。

遊び、踊り、犯し、殺し、そして死す。
都市が滅びる様は常にそうした光景が展開される。時代や場所が変わろうと関係ない。二一世紀の月面でも同じことだ。
地球の唯一の衛星では廃墟の美学が演出されていた。地上と言わず地下と言わず、死臭が充満している。脆弱すぎる人間は過酷すぎる外界

の環境に曝されるや、一瞬にして凍結するか焼けただれ、命を失っていった……。
《王子よ。こうまで歯応えがないと哀れみを感じるな。獅子は兎を捕まえるのにも全力を尽くすとは聞くが、実力差がありすぎる場合には、慈悲こそ礼儀を示す道たり得るのではなかろうか》
穏やかな金打声(セジェムネベウ)がツタンクアメンの耳に流れたが、ケプリ二号騎(セネウ)は自らの発言とは正反対の行動に邁進中だ。
この真打劒冑は、文字通りフンコロガシのポーズをとり、地下要塞の通路を猛スピードで駆け抜けていた。
ただし転がしているのは糞便ではない。恐ろしいまでの熱を発する光球だ。
ケプリは辰気、すなわち重力制御は神域に達していたが、同時に創気

も操れた。原子と分子を好き放題に並び替え、水素核融合を手元で発生させることなど朝飯前だ。

つまりケプリが脚部で高速回転させているのは、超小型の恒星であった……。

古代エジプトでは、スカラベは太陽を転がしていると目されていたが、その神話は悪夢となって現実化したのだ。

表面温度一万度の光球に照射された物体は燃え尽き、溶け崩れ、そして蒸発した。組織だった抵抗などできるはずもない。限りなく機械に近いケプリが人間味を示し、弱者への哀憐を示すように提案したのも無理からぬ話であった。

だが、ツタンクアメンは生械体（エジプシャー）の誇りと共に、あくまで機械的に言い放つ。

「敵に情けをかけた瞬間、僕は純粋な破壊者でなくなってしまう。父

上の期待に沿うためにも、アンケセンアメンの想いに応じるためにも、まだまだ血塗られた道を突っ走らなければならない」
《しかし永遠の破壊者たることは難しい。一服も必要だ》
「眠るのも休むのも飽いた。そんなことは死んだ後で充分にやれる」
《王子に告げる。この街から生命反応は完全に潰えた。もはや殺戮は無意味。仕手の熱量を喰らう劔冑として、このままでは戦闘不能に陥る公算大であると申し添えておく》
「まだ暴れたりないが、潮時というわけか。仕方ない。魔導太陽（ヘリィラー）を消せ」
ケプリは指示に従い、すべてを焼き尽くす光球を重力崩壊に追いやった。核融合の糧を断たれたそれは、極小ブラックホールとなり、すぐさま蒸発していく。

《王子よ。冷却器の効率が規定値を下回っている。このままでは熱暴走するかも知れぬ。いったん地表に出て、日陰に入ってはもらえぬか》

ツタンクアメンは行動をもって回答とした。安普請（やすぶしん）な天板を突き破り、ケプリは外界へと騎体を曝した。幸いにもそこは夜であり、地表温度はマイナス一三〇度にもなる。冷却にはうってつけだろう。

手近なクレーターの内部に飛び込み、呼吸を調え、小休止に入る。機動兵器は、動きを止めた瞬間に戦力が激減するのだが、いまは仕方がない。

「アテン球体の生存数は？」

《残り七九体。案外やられてしまいましたぞ。地球人類も無能ではない様子ですな》

「無能じゃないか。僕という脳髄さえ潰せば、アテン球体など放置しても力尽きるのに。なんとも進歩のない連中だ。都市国家という体系にいつまでしがみついているのだろう。陣地のように拠点防護を重視する気だろうが、裏を返せば単なる利己主義だ。自分の街さえ無事なら他はどうなってもよいという下卑な精神が透けて見えている。そんな連中を屠るに大軍など不要。小勢のほうが逆に好都合だ」

《それはちと地球人類を見くびった見方ではありませんかな。連中が各個にしか戦えないのは、我らが連絡線を念入りに切断したからだと思いまする》

ケプリの発言は嘘ではなかった。破壊はライフライン関連を軸に徹底されており、中でも通信系統を集中的に狙った。敵が援軍を繰り出してこない理由のひとつであろう。

だが、ツタンクアメンは手厳しく人類を罵るのだった。

「羽虫どもは肥大化しすぎた。三三〇〇年前のエジプトと同じだよ。数だけやたら増え、責任を取ろうとする奴は誰もいない。だから烏合の衆となる。

勇敢な剣冑など二領だけだった。弓の一撃と蹴りの一撃を僕に繰り出してきた奴らさ。両方とも事象の地平面まで陰義で追いやったから、もう会えまいが」

その時、ケプリが金打声（セジェムネベウ）を返した。

《王子よ。指向性重力波通信を確認。戦略顧問より伝言が入りましたぞ》

「あれは一方通行だろう。セダと話ができないのは辛いが、仕方ないね」

すぐに映像と音声が眼前の画面に流れた。

この時代[illegible]
『……わたしの愛しいルゥよ。戦略顧問として本星の状況を報告します。我々は里帰りの準備をすませました。王からご命令を頂戴しだい、全軍が始祖の関門を抜け、地球圏へと向かいます……』
満足げに頷くツタンクアメンであったが、画面の婚約者は意外なことを口にした。
『ただし王はこうも命ぜられました。尖兵を率いるルゥの奮闘に鑑み、第二波攻撃隊を送る準備に入ったと。もしも先遣隊が〝月神の劍冑〟を発見できぬようなら、援軍を発進させようと』
訝しむツタンクアメンであった。月面攻略などひとりでも充分なのに、どうして増派の手配などするのか？　僕の手腕を信用していないのか？　そもそも月神の劍冑の在処が不明なのがいまいましい。かつて石碑にヒエログリフで残したらしいが、経年劣化で読めなくなって

いるとは計算外だった。
『ルゥ、よく聞いて。捕虜のマルチネス・コーランドという男性体を尋問した結果、地球人類も〝月神の劒冑〟の存在は知っているらしいの。連中を抹殺するよりも、降伏に追い込んで情報を聞き出すほうが賢いと思うわ。
彼らにも知恵はついたみたいね。劒冑の性能で天地の差があることを悟れば、降参こそ生存への選択肢だと考える者も出てくるでしょう。
ルゥ。腕白もほどほどに。神に近づこうとする私たち生械体は、時として慈愛を見せる一面も必要だと思うの。わたしも程なくそちらへ行きます。再会の時まで、どうか無事でいてね……』
不快さを表情に表すツタンクアメンであった。アンケセンアメンの言

葉は〝多殺多生〟の誓願に反する行為だったからである。
《王子には最前線指揮官としての権限が大幅に認められている。しかし、これは事実上の新しい命令だと判断するが、いかに？》
ケプリからの疑念にツタンクアメンは答えた。
「命令の行間を読むのも指揮官の責務だ。降伏に追い込め？　いいとも。羽虫どもに膝を折らせてみせよう。そのためにはより多くの死を現出し、味方が次々に討ち取られていく様子を見せつけなければ。そして連中から聞き出すのだ。〝月神（コンス）の剱冑（ケペシュ）〟の在処（ありか）をな！」
結局のところ、王子はまだ子供であった。若さ故（ゆえ）のあやまちに気づいた時には、相応の代価が求められる。それは想定外に大きかった……。

2

「誰なのです！　無許可で白旗など掲げたのは！」
独立都市ハイ・ポーツマス市長のヘローデ・C・コーセィ中将は、モニターに映し出された降伏の証を凝視しながら叫んだ。
「こちらの殺戮を狙う者の良心に訴えてなんになる！　そもそも白旗の意味を相手が承知しているかどうかもわからないというのに」
H・G・ウェルズ基地防空司令官補佐アイトー・サムプラヤ少佐は、直属の上官であるコーセィ中将の鬼神ぶりに圧されていた。政治家と科学者と軍人を兼ねる女傑だとは承知していたが、まさかこれ程までとは。
「あれは第九地区ね。守備隊長のガーゲット大佐に電文を。侵略者に

一枚岩で対応すべき時に勝手をするなと言いなさい。ただちに白旗を降ろすように。さもなければ酸素と水と電気の供給を止めると！」

月世界の連盟航宙自衛軍（スターミィ）は崩壊しつつある。それを認めつつも、コーセィはまるで老いた雌獅子のように凜々しく指揮を執り続けている。

絶望的な戦況に置かれつつも、士気だけは高い。これなら最後の一兵まで戦えよう。

数分が経過し、モニターの白旗が消えた。まだ指揮系統が生きている証拠である。

だが、サムプラヤ少佐にはわかっていた。それは自己満足以外の結果には繫がらないと。

どれだけ時間を稼ごうとも、月が陥落すれば地球は滅ぶ。山脈を爆破

し、その破片を地球へとマス・ドライバーで撃ち出せば、安価で効果的な爆弾となる。制宙権喪失は、世界全土が爆撃圏内に入ることを意味しているのだ。

都市をひとつずつ潰して回るという生械体（エジプシャー）の戦術行動は、粗雑ながらも理に適っていた。つまり各個撃破の典型である。

正規軍は都市に分散配置されていた。それが集中する前に攻め込み、反撃を許さない。通信も分断されているため、機動兵力の十字軍（クルセイダーズ）も遊兵と化してしまっていた。

アテン・ボールも幾つか潰したが、大半が閉鎖区画の自爆に巻き込んだだけだ。過去に登場したそれは偵察仕様だったが、今度は戦闘モードに特化している事実を認識している者は少なかった。

また登場した新型の劒冑も規格外だ。散発的な抵抗も行われていた

が、ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）では勝負にならず、文字通り鎧袖一触（がいしゅういっしょく）でやられていた。

敵は七つ目の攻撃目標にケプラー陸戦隊基地を選び、そこを全滅に追いやった後、行方をくらましている。この僅かな間隙を利用し、コーセィ中将は通信系の再構築に注力していたが、結果は芳しくない。

だが、突如として連絡が回復した防御拠点もあった。そこから悲鳴のような音声通信が舞い込んだのだ。

『……こちらは第九地区守備隊のエリカ・コーセィ准尉候補生です。陣地内に敵騎の侵入を許しました！　ガーゲット大佐から任務放棄指示に基づき、ここを放棄……』

台詞は爆音で断ち切られた。コーセィ中将の孫娘との通信は強制終了と相成った。その生死は不明だが、過度な期待はしないほうがよいだろう。

残酷な現実に直面したサムプラヤ少佐は、絶望を額に刻むのだった。

もう駄目だ。我々に生械体（エジプシャー）を止める力はない。なにか秘密兵器でもあれば話は別だが……。

重圧に沈みかけたサムプラヤ少佐だったが、次の瞬間、再び顔を上げざるを得ない状況に追いやられた。

悲鳴が聞こえた。目線をあげると、防空司令部の内部は異様な空間に変貌していた。

全モニターに同一の顔が映し出されていたのだ。回線をハックされたらしい。

人間のそれに近いが、絶対に人間ではない。怪物だ。目、耳、鼻、口は揃っているが、髪も眉もない。馬鹿長い顔は灰褐色であり、むき出しになっている血管が無気味だった。

[illegible]

「これが……生械体（エジプシャー）か……」

コーセィが辛うじてその言葉を絞り出した直後、そいつは機械的な英語でこう告げたのである……。

『被征服民たる人類に告げる。生存か破滅か選択する時が来たのだ。我は生械体（エジプシャー）を統べるアクエンアテンなり。地球（ゲブ）の真の支配者として、冥王（オシリス）の星より汝らに告げる。

慈悲深き余は慈悲に縋る機会を汝らに与えん。〝月神の劔冑（コンスケペシュ）〟を解放し、先遣隊に引き渡すがよい。さすれば間引きの割合を全人口の九割から八割にまで下げん。

哀れなる者どもよ。汝らに勝ち目などない。我が妻ネフェルティティに導かれるという幸運に恵まれながら、統一国家の成立にすら至って

に導かれるという幸運に恵まれたから。統一国家の成立にいたって
いないとは。この三〇〇年間、汝らは豚の如き惰眠を貪っていただけか。
統一できていないのは意識下もまた同じ。余にとっては協力者であり、汝らにとっては裏切り者の声を聞かせてやろうぞ』
画面が切り替わり、今度は地球人の男女が次々に映し出された。
『第一九竜騎兵隊のチャールズ・テイラー中尉。一九四五年一二月五日、バミューダ海域にて訓練中に誘拐され……』
『プロジェクト・セルポ第一次メンバーのファルコン中佐だ。連中を信用するな。奴らは悪魔だぞ！』
『私はＦＢＩのジリアン・スカリー。奴らは存在する。モルダー、あなたは疲れてなんかいなかったわ』

『マルチネス・コーランド中佐だ。悪いことは言わん。早々に白旗を掲げよ。地球の戦力では王（ファラオ）にはとても敵わない。特にハイ・ポーツマス市長のコーセィに告げる。さっさと月神（コンス）の劍冑（ケペシュ）を渡してしまえ！』

四番目に現れたかつての上司にサムプラヤは身を固くするのだった。てっきり戦死したと思っていたのだが、よもや捕虜になっていたとは。

名指しされたコーセィ中将を見たが、冷静さを崩してはいない。こんな状況でも流石だと賞賛すべきだろう。

しかし、次に現れた人物を瞳に捉えた瞬間、コーセィの表情は激変した。

『僕はアレックス・カーター。マンダーリン財団の民間宇宙飛行士だ。先祖が被るべき祟りを総身に受けた結果、二五年も太陽系をさま

[illegible]
よい、ミイラから復活を果たした男だ。
地球の皆に言っておく。生械体（エジプシャー）に慈悲を求めるな。彼らは人外だ。人間じゃない。降伏してもどのみち殺される。どうせなら戦って滅びるべきだ。我らを羽虫と呼ぶ連中に一矢報いてくれ。

ああ……地球に帰りたいな。帰って、ヒデとナギサの子供に会いたかった。それだけが心残りだ……』

顔面蒼白で崩れ落ちたコーセィの体を、サムプラヤは危ないところで抱き起こした。
「中将！　お気をたしかに！」
脂汗を拭きながらコーセィ中将は話した。
「平気よ。ただ驚いただけ。まさかあの人が……カーターが生きていたなんて」
[illegible]

かなんて」
「先祖の祟りとか言っていましたが、王家の谷（KV）で歴史的発見をしたハワード・カーターの一族でしょうか？」
「遠戚ではあるみたいね。でも、私にとっては因縁のある相手。両親が生涯を通じて探し求めていた旧友。まさか冥王星で囚われていたとは……」
画面は再び無気味すぎる王（ファラオ）の立ち姿に戻った。古代エジプトから舞い戻ってきた怪人は、アクセントの強い英語で続ける。
『余は、彼ら捕虜たちから充分すぎる情報を得た。そして結論に至った。汝らに地球（ゲブ）を支配する資格はないと。一刻も早く我が王子に〝月神（コンス）の劔冑（ケペシュ）〟を引き渡せ。それが絶滅から逃れ得る最後の道なり……』
そこで映像は切れた。唐突に自由を取り戻した電脳が、各種情報を

ここに映像が現れ、履歴は目を取り戻した電脳が、各種情報を
ディスプレイする。サムプラヤはそのひとつを読み上げた。
「アクエンアテンとは古代エジプト第一八王朝の王（ファラオ）であり、著名な少年王ツタンカーメンの実父と目されており、世界発の宗教改革を断行した人物として……」
苛立たしげにコーセィ中将が返す。
「百科事典は過去の事実の羅列よ。未来を生きる者の羅針盤にはなり得ないわ。でも謎はひとつ解けた。やっぱり消されたファラオの一族だったか。
正史から抹殺された王の一族は冥王星に逃れていた。大英連邦がエジプトで発掘と破壊に躍起になるわけだ。探査機が行方不明になるわけだ……」
真実の洪水に耐えきれなかったのか、コーセィ中将の声は上擦ってい

た。

「そしてカーターまでもが現れるとは。月面開発の中心人物となり、基地の土台を造った両親が、死期に及んでその捜索をわたしに委ねた人物が……。

しかし親は親。私は私。恩や恨みを押しつけられる筋合いはない。ただ己の責務を遂行するのみ……」

その数秒後であった。爆発音が鳴り渡り、耐熱ドアが吹き飛んだ。熱風と一緒に恐るべき光球が司令部に乱入してきた。

「敵襲！　アテン・ボールだ！」

サムプラヤ少佐は初めて敵騎を肉眼で目撃し、恐怖に凍った。金と銀に煌めく球体から伸びた触手がうねうねと動く。それは高熱を帯びており、[illegible]の胴体は無惨にも切断されていく。[illegible]

おり、捨てられたスペースエレベーターの胴体は無惨にも切断されていく。とうとうここまで敵の跳梁（ちょうりょう）を許すとは……。

「総員任務放棄！　避難壕へ！」

コーセィ中将自らの許可と命令に、誰もが奥のシェルターへ転がり込んだ。最後の入室者となったサムプラヤ少佐は、三秒だけ待ち、後続がいないのを確認してロックする。

肩で息をしながら、コーセィ中将は命じた。

「こうなったらやむを得ません。サムプラヤ少佐。最終兵器〝神風（カミカゼ）〟の準備を。奪われるくらいであれば、いっそこの月を割ります。追い詰められた人類がなにをするか、過去からの侵略者に見せつけてやるのです！」

[illegible]（スターミィ）の上層部は[illegible]

連盟航宙自衛軍の上層部は以前から気づいていた
月という天体が抱いている恐るべき秘密を。

アクエンアテンからの通信で〝月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）〟という名称こそ初めて知ったが、その存在だけは以前から判明していた。もちろん極秘だが、コーセィ中将はそれを知りうる立場にあった。

それは想像を絶するサイズの巨大な劒冑なのだ。

部分的ながら発掘も進んでいた。誰がどの角度から見ても操縦席にしか見えない物体もティコ・クレーターの奥底にて発見されていた。

解析は遅々として進まないが、地球と月とを結ぶ〝盟約の門（トンネル）〟は、この〝月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）〟が発動する陰義（アウトロウ）に因るものとの解釈が根強い。

いずれにせよ人智を超えた存在であるのは確かだ。これが悪意を持つ者の手に渡れば、取り返しのつかない事態に陥る。最悪に備え、爆破準備が調えられていたのも当然だった。

[illegible]れたのも当然だった。

これが最終兵器〝神風〟である。具体的には赤道沿いに一〇二四発も埋め込まれた強化版鍛造雷弾（フォージド・ボム）を一斉に起爆させるのだ。

つまりは自爆兵器であった……。

月を割る。それは比喩でもなければ、大袈裟（おおげさ）でもない。本当に月という天体を砕くべく究極兵器〝神風〟は準備されていたのである。

その狙いはひとつだ。〝月神（コンス）の剱冑（ケペシュ）〟ではなく、〝月神（コンス）こそが剱冑（ケペシュ）〟という悪夢めいた現実を打破するためであった。

3

武帝と蒼海三樹夫たちが松前大島から目撃したのは、それが連環となって爆発した直後の光景だった……。

「この炎はいったい何事だ⁉」
ケプリ二号騎（セネウ）を上昇させながらツタンクアメンは怒鳴った。

眼下では地面が割け、砕け、燃えている。爆発は連鎖反応を引き起こし、勢いよく月を半周しようとしていた。
《王子よ。我らは相手をいたぶりすぎたかも知れぬ。勝てぬと察した地球人類は、月神（コンス）の劍冑（ケペシュ）を破壊する暴挙に出たようだぞ》
「おのれ羽虫どもめが！　どうあっても我らの邪魔立てをする気か。ケプリよ。〝ナイルの奔流〟の用意だ。爆発反応は赤道を巡っている。予測地点を割り出し、片端から吹き飛ばすのだ！」
《出力を絞るのが難しい。狙いを過（あやま）てば、月そのものが瓦解するかも
[illegible]

知れぬ》

「僕の狙撃を信じてくれ」

自信に満ちたツタンクアメンに、ケプリ二号騎(セネウ)は命令を遂行した。飢餓虚空(ブラックホール)の瞬時発生とプラズマ・ガスの猛射。月面へと朱色の光輝が垂直にほとばしる。

この陰義(アウトロウ)は見事に奏効した。鍛造雷弾(フォージド・ボム)は半数近くが不発のまま地面ごと抉(えぐ)られ、天高く撃ち出された。月の重力圏を脱した少女型の爆弾は、凍てつく人工惑星となって太陽系を永遠にさまようことだろう……。

重圧を切り抜け、どうやら月崩壊の窮地を回避したツタンクアメンは、

「羽虫どもの一世一代の博奕(ばくち)の結果がこれか。強き意志の力が邪悪を

砕いた。連中は無理心中に失敗し、味方を大勢殺した。そうだな」
《王子の意見に賛同する。半壊した天体では死者が生存者を上回っていよう》
「逆に好都合だな。これで安堵して〝月神（コンス）の剱冑（ケペシュ）〟の捜索に注力できる。有力候補から順に調べていこうじゃないか」

それから六時間——。
ツタンクアメンとケプリ二号騎（セネウ）は、追い求めるべき秘宝——〝月神（コンス）の剱冑（ケペシュ）〟の捜索に力を注いだ。
正確にはその脳髄部、要するに操縦席を探したわけだが、発見には至っていない。敵がよほど巧妙に隠匿したか、あるいは粉砕されてしまったのか。
若干の焦りもあった。稼働するアテン球体は残り三八体。自爆に巻き

込まれたとはいえ、戦力が目減りしたのは確かだ。生き残りは単体で探索に従事させているが、これでは充分とは言えない。

いま敵が組織的な反抗を始めたら厄介だ。一刻も早く月神（コンス）の劔冑（ケペシュ）を起動させなければ。

《王子よ。南部の超大型クレーター内部に磁性体の異常が見られるぞ。どうやら正の磁力を負の磁力で中和しているらしいが、子細はここからでは不明である》

騎を飛ばしながら、ツタンクアメンは視線を投げた。幾重にも光の筋を放つクレーターが確認できる。

地球（ゲブ）ではティコと呼ばれているそれを見つめながら、ツタンクアメンは言う。

「あんな目立つ場所に隠すはずがないと思うがな」

《堂々としているほうが逆に紛れるもの。調査する価値はあると愚考する》
「よし。ならば行くか……」
その刹那であった。ケプリ二号騎(セネウ)は新たなる脅威の襲来を告げたのだった。
《王子！　左後方四五度に飛翔体らしきもの。急速接近中！》
「ふん。本星から増援が来たか。どんな劒冑(ケペシュ)でも我らの敵ではあるまい。全部たいらげてから捜索を続けるぞ」
この時、ツタンクアメンには油断があった。地球人類が造りだした銀の劒冑(ケペシュ)は量産品に過ぎない。数打劒冑ならば、百戦百勝できる。そんな驕りがあった。
だからこそ驚いた。突出した劒冑(ケペシュ)の脚が異様なまでに速く、その色が

銀色ではなく真紅であると知った時、ツタンクアメンは初めて狼狽を示したのである。

「むむっ！　新型騎だな！　羽虫たちの言う〝真打劒冑（ブラッドクルス）〟か！」

《王子。敵騎が抜刀したぞ。砲戦ではない。接近戦を挑む気らしい》

「弓にだけは注意してくれ。射られるのはもう御免だからな」

大腿部の痛みと共に面白くない想い出が甦ってきた。

《うむ、承った。そして早速だが来たぞ。飛翔体一あり。速い！　即時回避推奨！》

4

「吉野御流堂上礼法〝飛蝗（ヒコウ）〟が崩し！　電磁擲刀（レールガン）——〝呪（カシリ）〟！」

武帝が裂帛の気合いを込めた咆哮を放つ。それと同時に勢州千子右衛門尉村正三世（えもんのじょうむらまさ）は脇差を投げつけた。

《御堂（みどう）。意気を削ぐようで悪いけれど、この距離じゃまぐれでも無理よ。宇宙だと間合いも関係ないけど、さすがに……》

三世村正の金打声に、武帝は咳き込むように応じる。

「わかってる！　もとより命中を期待しちゃいない。あれは敵騎を誘導するため。こっちの刃が届く距離に。村正！　導源（コイル）を回せ！　磁気加速（リニアアクセル）！」

《諒解――磁装（ながれ）・正極（まわる）》

深紅（あか）い巨軀が、無の空間を一文字に突き進む。

相手は脇差を間一髪でかわすと、注文どおりの場所へ逃げた。手練れの仕手であれば、そしてあの敵騎であれば、そこしかないという場所へ。

《御堂！　敵騎に陰義の発動を確認！　ファラオ・ビームが来るわ！》

蒼海三樹夫中尉から得られた証言で、敵騎の決め手が強力な光線技であることは判明していた。勝手に〝ファラオ・ビーム〟と命名したそれは、敵騎の胸部から発射され、あらゆる物質を事象の彼方に吹き飛ばす恐ろしい陰義だ。
だが、存在さえ知れば対策は講じられる。凄まじい熱量を誇る一撃だが、同じレベルでの連射は難しいはずだ。初弾さえかわせば、生き残ることはできる。
また光速に近いスピードであるがために、発射後は軌道修正ができない。つまりこちらとの位置関係を真一文字にする必要がある。

武帝と三世村正は完全に相手の動きを読み切っていた。脇差で行動を制限し、相手が反撃に出て来るコースを読み切り、理想的なポジションを確保する。

「村正！　続いて辰気加速（グラビティアクセル）！」

この世のどんな騎体でも追いつけぬほどの爆発的な加速が三世村正を押しやる。コンマ秒単位で敵騎との間合いが詰まる。相手の陰義はまだ熱量充塡中だ。

これで刃先が届く。斬れる！

だが、抜かない。まだ抜かない。

達人級の剣戟舞踏（ブレイブアーツ）であれば、最後の最後まで太刀筋を見せない。見せる時は相手を斬り捨てる瞬間だけだ。

精神集中が極まれば、時間が引き延ばされたかのような感覚が総身に

押し寄せる。ここぞという瞬間が己にもわかる。いまだ。いましかない！
「吉野御流堂上礼法〝迅雷(じんらい)〟が崩し！　電磁抜刀(レールガン)――〝禍(マガツ)〟‼」
鞘と刀身の磁気反発で、信じられぬ高速抜刀を可能とした一閃が煌めいた。ただでさえ芸術の居合切りを、至高の域へと極めた一撃だ。まずかわしきれまい。
だが、しかし――。
敵騎もさるものだった。太刀筋を看破したのか、すんでのところで体軀を入れ替えた。切っ先は届き、一撃を与えたものの、致命傷とはならなかった。
「ちくしょうめ！　無名の野太刀じゃこんなものか！」
背後に飛んだ敵を追いかけながら武帝は叫ぶ。三世村正もそれに続く。

《野太刀〝虎徹（こてつ）〟であれば真っ二つに叩き斬っていたわね。別の時間軸じゃ手にしていたこともあるらしいけれど、あれさえ手にできていれば》
「ないものねだりをしても始まらねえ。村正、奴を逃がすな。割腹するぞ！」
《待って。ま、まさか——!?》
「待たねえ！　正宗七機巧（ななつのからくり）が一！　投擲腸管（スローイングオーガン）だ！」
それは正義に生き、正義に殉じる覚悟がある者だけに可能な自暴自棄の技だった。まずは下腹を掻っ捌き、鋼鉄に変化させた腸を相手へと投げつけ、その動きを封鎖するという荒技だ。
《む、無理ッ!!　確かに私は仕方なく入道正宗（にゅうどうまさむね）の巧（からくり）を少しだけ受け継いだけど、できるのは残された右手から繰り出せるものだけで

――》

「クソが……ッ！　だったら、こっちだ。正宗七機巧が一！　無弦（むげん）・十征矢（じゅうせいし）！」
甲鉄化した仕手の五指を噴進弾（ロケット）の勢いで発射する機巧武器である。急所に命中させれば、小型騎なら一発で活動不能に追い込める威力を秘めていた。
小粒ながらもピリリと辛い指弾が、無重力に近い空間を切り裂いて進み、そして――。
《全弾命中を確認。でも駄目よ。当たり所が悪かったみたい。致命傷じゃないわ》
村正の治癒能力をもってすれば再生可能とはいえ、指を失った痛みはかなりのものだ。それを完全に無視し、武帝は叫ぶ。

ひじでつぽう　どんりゅうこう

「足を止めるにはもっと弾がいるな。ならば次だ。肘鉄炮・呑龍高炉（ろ）！」
三世村正は真紅の劔冑だが、右手だけは故（ゆえ）あって黝（あおぐろ）い。その肘が直角に折れ曲がった。途端に飛礫がガトリング砲の勢いで連射された。
なお砲弾に相当するものは仕手の骨と肉である。
「ぎぃぃいうぅぁぁぁあああああああッ!!」
激痛にさしもの武帝も悲鳴をあげたが、代償は得られた。発射された弾頭は敵騎の右足を痛打し、動きを止めたのだ。
「後続隊に……連絡を……いまなら……狙撃できるはず……」
息も絶えだえに武帝は言ったが、相手の対応が一手だけ早かった。
《御堂、敵騎が逃げるわ。驚いたわね。自分の鉄爪で、傷ついた右足を根元から切り落としたわよ》

使い物にならない部位を損切りするという捨て身の選択で自由を取り戻した敵は、彼方へと逃走していく……。

狂った仕手同士の戦いは引き分けに終わった。武帝が敵を撃退したとも言えるが、逃がしたからには敗北だと解釈すべきかも知れない。

三世村正は、仕手のあまりの無謀さに呆れながら言う。

《……奇縁で右手だけ合体したとはいえ、入道正宗の巧(からくり)はわたしの技の範疇にないわ。下手をすれば死ぬわよ。昔、投擲腸管(スローイングオーガン)で御堂にやられたこともあったけど、本当に無茶しすぎよ》

「うるさい。正宗と一緒にできたことなら、お前と一緒でもやれるはずだ。さっさと傷を塞げ」

真打劔冑には仕手の肉体を癒す機能がある。時間さえあれば手足の欠損さえ補えるが、戦闘は不能になる。ここは味方が欲しい場面であった。

《御堂。来たわ。援軍一一騎。一五度上方（みずのとのかみ）より近づく》
「騎兵隊の到着か。ワンテンポ遅れて来いとは言ったけど、遅すぎるんだよ……」

＊

「なんてこった！　あと三〇秒だけ早く突入できていれば！」
破邪十戒（デカログス）を装甲した蒼海三樹夫（そうかいみきお）は無念さを隠そうとしなかった。
「奴だ。俺を地球まで蹴り落とし、黒瀬由梨巴（くろせゆりは）を殺した生械体（エジプシャー）の劒冑だ。射殺（いころ）すには絶好の機会だったのに！」
しかし、それは無理だった。武帝はこう命じていたのだ。まずは村正

で不意打ちを食らわせる。本隊は遅れて来いと。
編隊を組めば、そのぶん発見されやすくなる。奇襲効果を考えれば、単騎で先行するのは理に適った行為とも思えた。
ただし絶対的な火力不足は否めない。トドメを刺し損なったのは、後一手の詰めが足りなかったからである。
三樹夫は命令を無視し、仲間を追い越そうとしたのだが、遣月派遣隊副長渡子柔郎（わたりしじゅうろう）がそれを許さなかった。渡は武帝に惚れ込み、盲従することを是としていたのだ。
また仮に突出していたとしても、健脚は望むべくもなかったろう。背負った木箱が恐ろしく重く、機動性は大幅に損なわれていたのだから。
無念さを噛みしめていたのは三樹夫だけではない。破邪十戒（デカログス）もまた慚

愧の念を隠そうとしなかった。
《我が御堂(あるじ)よ。生械体(エジプシャー)の王子が操る真打劒冑は〝ケプリ〟と呼ばれていた型だ。戦闘のみならず、治癒力もかなりのもの。片足を失おうと、やがて復活してこよう。
ムラマサと名乗る劒冑(ケペシュ)の威力は認めたいが、手の内が知れた以上、対策は講じてくる。次は危ういぞ。ここは後先を考えずに追い打ちをかけねば》
「トトメスよ。そうしたいのは山々だが、熱量(カロリー)に限界がきているぜ。このままじゃ追いつく前に倒れちまう。松前大島から成層圏飛行船まで直接飛んだのがキツかったな」

武帝は月面が戦場と化すことを想定しており、以前から宙（そら）に昇る準備を進めていた。

連盟航宙自衛軍（スターミイ）は国際宇宙ステーション〈グリーン・ドラゴン〉から汎用輸送艦〈エアリーズ〉を飛ばしているが、そんな大仰なことをする余裕はない。より安価でシンプルな方法が必要だった。

高度二万メートルを周遊する〈スカイラブX（テン）〉が解答だ。マンダーリン財団が保有するこの成層圏飛行船は、気嚢の中心軸に劒冑を一二騎格納できるロケットを収納していた。武帝とその部下たちは、これに乗って地球の引力圏を離脱したのである。

驚いたことに、地球低軌道に到着するや、武帝は全騎に発進命令を出した。ロケットを捨て、劒冑のままで〝盟約の門（トンネル）〟に向かい、そこを突破するというのだ。

これには三樹夫も驚いたが、待ち伏せにでも遭い、ロケットを撃破さ

れたなら、戦わずして全滅だ。隠密行動に徹するには、そのほうが利口であった。

だが、長駆の騎航は熱量(カロリー)を消費する。現に三樹夫たちは青息吐息に近い。ここは休息が必要な頃合いだろう……。

《我が御堂(あるじ)よ。一服したいのは私も同じだ。背中の箱があまりに重すぎるぞ。だが、月があの有様(ありさま)ではそれも望めぬな》

破邪十戒(デカログス)の金打声に三樹夫は半壊した天体を見下ろした。欧米では〝ザ・ガジェット〟と呼ばれる鍛造雷弾(フォージド・ボム)が猛威を振るった結果だ。

母衣(つばさ)を休ませる場所は見つかりそうにない。

「ああ。俺たちはまだマシだが、武帝と三世村正が辛(つら)そうだぜ。ここは生存している月面基地を探しあて、逃げ込みたい場面だな」

《その願いは叶えられそうにない。禍々しい物体がこちらに接近中だ。この怖気……この波動……どこかで……よもや我が背の君(せのきみ)ではあるまいか……》

5

《王子に告げる。右足の蘇生は現状では不可能。早急に味方と合流すべし》
ケプリ二号騎(セネウ)の忠告に、ツタンクアメンは早口で返した。
「まず騎体の回転を止めてくれないか。もどしそうだ」
そう告げた後で、王子は自らの台詞に慄然とするのだった。なんということだ。ツタンクアメンともあろう者が、気分が悪くて吐きそうだ

と!?
《真紅の劍冑との合戦に敗れた以上、我らに可能なのは報復の機会を待つことのみ》
「敗れただと？　その言葉を二度と使うな。僕はまだ負けていない！　あの真紅の劍冑が己の肉塊を砲弾にして撃ち出すなど、誰が予想できようか！　やはり羽虫どもは危険だ。なにをしでかすかわからん連中だ。どうあっても根絶やしにしなければ！」
駄々のような捨て台詞を放った直後、新たな金打声が耳朶を打った。
『我が吾子よ。無様だぞ。もうよい、どけ。意地の張り所を間違えた愚か者めが。子供の不始末は父たる余がやらねばなるまい』
そして亜空間を怪鳥が切り裂いて飛来する。間違いない。〝マアト〟だ。王のみが装甲を許される無敵の真打劍冑である。

胸部と脚部は藍色。嘴と翼は真っ赤。そして目玉は黄色。なんとも目立つ色彩の巨鳥は月面へと飛翔していく。

息子にはもう父を止める術はなかった。永遠に敵わぬ相手（ライバル）に嫉妬心めいたなにかを感じ取った時、ツタンクアメンは新たな報告を聞いたのである。

《王子よ。〝始祖（ラー）の関門〟の出口付近に重力震を観測。規格外の代物が姿を現そうとしているようである》

ケプリは拡大画像をツタンクアメンの網膜に投影した。距離がかなりあるため、小さくしか見えないが、球形の物体が始祖の関門を抜け出ようとしている。

子宮から赤子が産まれる場面を見ているような錯覚に溺れたツタンク

アメンであったが、金打声(セジェムネベウ)が彼を正気に引き戻す。
『……わたしの愛しいルゥ。手酷くやられたみたいね。でも大丈夫。すべてを可能とする超大型の劒冑(ケペシュ)を用意したわ。すぐこっちに来て。わたしは熱量電池の制御に手いっぱいだけど、必ず待ってるから……』

＊

重力震の異常値はＨ・Ｇ・ウェルズ基地のシェルターでも確認されていた。
冥王星と地球圏を繋ぐ〝盟約の門(トンネル)〟の出口側に、信じ難いレベルの物体が現出しようとしているらしい。子細不明。要監視対象に指定すべ

しと。
辛うじて命を繋いでいたヘローデ・C・コーセィ中将は、最後まで職務を全うすべく、データの即刻転送を命じた。
アイトー・サムプラヤ少佐がそれに応対する。
「地球にでしょうか？　それなら無意味です。こんな規模の重力震であれば、すでに各天文台が観測に成功しているでしょう」
「違うわ。転送先は上空で戦闘中の劔冑よ。あなたは黄金のフンコロガシを撃退する場面を見なかったの？」
「あれは正体不明騎（アンノウン）です。かなりの確率で武帝の軍隊かと思われます。正規兵じゃありませんし、依頼主もわかりません。本当によろしいのですか？　発信元が逆探知されれば、アテン・ボールが再来襲す

る危険もありますが」

「生械体と戦う相手はすべて味方。そう心得なさい」

「イエス・マム！　どうせなら全周波数で流しましょう。こちらH・G・ウェルズ基地。チャンネルコードCQ。異常な重力震を……」

＊

《御堂。H・G・ウェルズ基地が全周波で警告を流しているわ。慮外の重力震みたいね。新手が来るらしいわ。それもとびきり大きい奴が》

三世村正の呼びかけに武帝はこう言った。

「次から次へと忙しねぇな。こっちはまだ右手が言うことをきいてくれないってのに――

[illegible]」
この時、武帝と三世村正は半壊した月面に不時着していた。損傷部の修復に専念しようと試みていた矢先、この報告を受け取ったのである。
「仕方ねぇ。渡の隊に調査させろ。デカブツならすぐわかるだろう。それから蒼海三樹夫中尉に連絡。木箱を持ってあたしの側に来いと言え」
《諒解。命令を飛ばすわ。でも、やっぱりあれを投入するわけ？》
「燃える大鳥邸から必死の思いで回収したのはこういう場面で使うためだろ。最悪の敵を屠るには最悪の味方をぶつけるしかねえ。思えばあれが最初の〝時空召喚〟だったな」
《そうね。本当は鍛造雷弾でオブジェになる前の完全体を持ってきたかったけど、時空間設定がうまくいかなかった。あなたが方向音痴な

のは場所も時間も同じね》
「うるさい！　異世界や時空の彼方へ出かけて迷わない奴なんかいるもんか！」
《わたしの補正にも限界があるのよ。蒼海三樹夫中尉には気の毒なことをしたわ。せめて成人してからの彼を召喚したかったわね》
「奴は両親の因果を一身に集めた男だ。多少の苦難は折り込みずみだろう。それに仕手として優秀に成長してくれたのはありがたい。簡単に破邪十戒（デカログス）を説き伏せるとはな」
《あれも回収には苦労したわよね。まさか三〇〇年の間、あの劒冑を守護し続けた一族がいたなんて》
「人間万事塞翁（さいおう）が馬（うま）だ。あたしだって、まさか百年後の松前大島を活動拠点にして武帝を名乗るなんて、想像もしていなかったしな」

武帝が自嘲気味に話した時、木箱をかついだ破邪十戒（デカログス）が降下してくるのが遠方に見えた。奴に秘策を授ける暇があればよいのだが。

しかし時間的余裕は皆無だった。別方向からの刺客が襲いかかってきたのだ。

《御堂！　七五度上方（きのえのかみ）から剱冑一が突っ込んで来るわ！》

「なんだと！　重力震の原因になった奴か？」

《たぶん違うわね。割と小型だし、いくらなんでも早すぎる。そして速すぎる！　音速の二〇倍……さらに増速中！》

武帝は本能的に月面を転がった。それだけの速度を維持しているのならば、可能行動は限られる。

急降下爆撃だろう。腹に抱いた爆弾を投げつける気だ。低空からの投下になり、破壊力そのものは弱まるが、命中精度は期待できる。

もっとも、射爆軸線上から脱出すれば危険は小さい。できれば投弾を見切って回避運動に専念したいところだが、三世村正は別の結論に至った。
《御堂。おかしいわよ。突入角度が深すぎるし、速度も過剰。あれじゃ引き起こしができない。騎体が分解するわ》
相手の意志はより単純かつ効果的であった。勢いを少しも損なわず、真一文字に頭上から体当たりを仕掛けてきたのである。
三世村正は紙一重のところでかわしたが、敵騎の紅蓮の翼が合当理（がったり）を撫でた。それだけで推進機関は半壊にまで追いやられた。
衝撃を無視し、武帝は叫ぶ。
「敵は？　どこへ消えた！」
《常識で考えれば粉々になったんでしょうけど、あれは常識の範囲外

の存在よね》
三世村正の言葉は正解であった。十数秒後、敵騎は二キロほど離れた地面を抉り返して姿を現したのだ。
《まるで土竜（もぐら）ね。さっきの連続爆発で月の構造そのものが脆くなっているんだわ》
「土竜でもミミズでもない。怪鳥だ。荒鷲そのものじゃないか。得物を持っていない点から判断して、あいつは一撃離脱戦法（ヒットアンドアウェイ）にすべてを賭ける騎体らしいな」
猛禽類を連想させる敵は、ひとつ大きく身震いした。騎体に積もった砂が吹き飛ぶ。
『余の息子に敗者の汚名を着せた妖甲は貴様であろうが！』
堂々たる金打声に、警戒レベルを最高に上げる武帝と三世村正であっ

た。
『羽虫にしてはよくやったと褒めてやろう。しかし代価は払ってもらうぞ。神々に連なる系譜を汚した贖いたり得るのは、血と肉と魂のみ！』
尊大すぎる台詞を中断させたのは、敵騎に殺到した弾丸の束であった。
対竜騎兵用高速徹甲弾（ADHVAP）が雨あられとなって降り注いだのだ。やや古めかしい弾ながら、劣化ウランを用いた殺傷力にはいささかの陰りもない。
『遣月派遣隊副長渡子柔郎（わたりしじゅうろう）、ここに見参！』
砲弾を発射したのは武帝親衛隊の一派であった。数は一〇騎。全員が数打劒冑の〝キング・グレムリン〟に乗り、月軌道上から一斉射撃を

行ったのだ。
武帝の家来は真打を愛用する者が多い。しかし渡とその一派は例外であった。渡は先代から受け継いだ怪刀〝マイケルギョギョッペン〟をうまく使いこなせず、打ち棄てられた数打に代替品を求めたのだった。
彼らが纏うキング・グレムリンだが、名前からもわかるように、その母体は大英連邦製の〝グレムリン〟である。
各種実証実験に用いられた単鋭装甲の傑作だ。キング・グレムリンはその第七世代騎であり、やや鈍足ではあるものの、ステルス機能は最高レベルだと賞賛されている。
性能的には申し分なかったが、実戦配備は見送られた。調達コストがかさみすぎたのだ。
同時期に〝ズィルバー・シュテルンII〟の開発に予算がついたことと

同時期に〝[illegible]〟の開発は進んでいたこともキング・グレムリンにとって不運であった。結局一五騎が製造されたところで開発は終了し、データ収集が終わった時点で博物館送りにされてしまった。
渡は、合法と非合法の間で綱渡りしながら、それをまんまと手に入れたのだった。
『全騎拡散発振砲(ワイドヴァイブロカノン)の発射態勢へ。武帝に仇なす敵を一撃で屠ってくれようぞ！』
その主兵装は頭部に装着されている六角形の大筒(おおづつ)だ。それは装甲通信の特質を応用した兵器である。極低度に収束した金打声を発振させ、標的を一瞬で加熱するのだ。
旧型は収束させなければ効果が薄かったが、キング・グレムリンに標

[illegible]
準装備されている発振砲（ヴァイブロカノン）は拡散した状態でも致命傷を与えられる。つまり広域破壊兵器だ。それが一〇騎も同時に電撃を照射する。これでは逃げるに逃げられまい……。
その思惑はあっさりと裏切られた。怪鳥は逃げもせずに立ち竦み、発振砲（ヴァイブロカノン）の射撃をその身に受けたかに見えた。
だが……変化も異常もない。圧倒的存在感にいささかの陰りも見えなかった。逆に相手は以前に倍する金打声を響かせてきたのである。
『三三〇〇年の時間を与えたにもかかわらず、これしきの呪（まじな）いめいた攻撃しかできぬのか。貴様たちは生存競争を勝ち抜いたわけではないな。不戦勝を決め込んだだけであろうが。それではこの〝マアト〟には傷さえつけられぬ』
三世村正が叫ぶ。

《御堂。敵騎に陰義の発動を確認。双脚に辰気が集中しているわ》
すぐさま武帝は渡に装甲通信(メタルエコー)を飛ばした。
「各騎へ！　敵は飢餓虚空(ブラックホール)を推進機関に使っているぞ。発振砲(ヴァイブロカノン)はその渦に呑み込まれてしまったんだ。全騎散開。逃げろ！」
重力の壺を駆動システムとして運用しているのであれば、加減速は物理法則の最高峰に達するはずだ。恐らくは、もう……。
逃げられなかった。褐色の影が流星の勢いで流れるや、瞬時にして敵騎は一八〇度違う場所に現出した。一陣の風が砂塵を巻き上げる最中、渡隊長を筆頭とする一〇騎のキング・グレムリンは粉みじんに撃砕された。後には骨さえ残らなかった。まさに雑魚(ざこ)の死に様そのものであった。

次は三世村正の番に違いない。轍鮒（てっぷ）の急に、さすがの武帝も焦燥の色を濃くした。

すると――。

眼前の月面に木箱が転がった。頑丈なシベリア杉で拵えてあったせいか、瓦解はしなかったが、蓋が弾けて飛んだ。中で無気味に光るのは銀色のオブジェだ。

そして天空から別口の金打声が投げつけられる。

『武帝と三世村正！　運搬任務は終了させてもらう。俺はこの鳥野郎を討つ！』

蒼海三樹夫と破邪十戒（デカログス）だった。武帝の軍でも最古の真打劒冑は、強弓を引き絞り、その鏃をマアトに向けている。

敵騎も破邪十戒（デカログス）に気づいたらしい。こんな声をもらしてきた。

『[illegible]

『この気配……この妖気……いや　間違えようもないぞ　もしや貴様は、かつて余が妻に迎えたネフェルティティではないのか。なんということ！　自らを劔冑の姿に変えてまで余に楯突（たてつ）くというのか！』

三世村正がすかさず言った。

《因縁話に盛り上がってるみたいね。この機を逃す手はないわ。御堂、仕方ないから起こしましょう。銀星号（かかさま）を》

「他に方法がなさそうだな。よし、右の乳房の金神片をくれてやる。それから左の乳房の金神片も引きちぎって使うぞ。村正！　すぐ〝時空召喚（ときかけ）〟の準備を。最強の援軍を拉致（よび）しに行くんだ。そしてここへ戻る」

《無茶よ。こんな状況でいったいどんな武者を呼ぶというの!?》

「あたしみたいな代理じゃなくて、正真正銘本物の悪鬼を召喚するの

よ！」

6

マアトからの金打声（セジェムネベウ）が破邪十戒（デカログス）に飛んだ。
『我が后（きさき）よ。実に三三〇〇年ぶりの逢瀬であるな。長い暇をくれてやったが、そろそろ羽虫たちにも愛想が尽きた頃合いであろう。慈悲深き余――アクエンアテンは后であったネフェルティティに命ずる。多くは言わぬ。我が元に戻るがよい』
返事はすぐに投げかけられる。
《我が背（せ）の君（きみ）よ。答は三三〇〇年前と同じだ。わたしがお前と共に覇道を歩むことは永遠にあり得ない。地球（ゲブ）という惑星はすでに人類のも

の。生械体（エジプシャー）は家主の資格を失って久しいではないか。
我らに〝劒冑（ケペシュ）〟を伝え、宙（そら）に関門を用意してくれた始祖（ラー）も、遥かな昔に地球（ゲブ）を去った。金神という手掛かりこそ残したが、彼らもまた家主の立場を放棄したのだ。
王（ファラオ）よ。始祖（ラー）を敬い奉るのであれば、その鮮やかな引き際もまた学ぶべきだ》
『聞け。我が后よ。生械体（エジプシャー）は金星から飛来した人ならざるもの――始祖（ラー）より地球（ゲブ）を託されたではないか。彼らは去り際に劒冑（ケペシュ）の打ち方を享受し、地球を委ねてくれた。金星を溶鉱炉に変えてしまった始祖が、資格充分とみなしたからだ。
だが余は断罪するしかない。人類は地球（ゲブ）を支配する資格などない。彼らは未発達すぎる。誰かが管理し、導かなければ』

《その役目はわたしが終えた。私は人類に我が身をもって示唆した。剱冑（ケペシュ）という存在を。まがい物としての生械体ではなく、純粋な金属生命体こそが本当の主であったと。

王（ファラオ）は知らぬであろう。地球（ゲブ）でも生械体（エジプシャー）に酷似した生体甲冑（リビングアーマー）と呼ばれる生命体が確認されていることを。我らは進化の究極に位置するのではない。誤った進化の終着点に至った生命体なのだ。だからこそ人類との理解も……》

『もはや言葉で語るのは飽いた。剣にて語ろう。昔のように』

二人の金打声が脳内で英語に変換されていく現実に驚きつつ、三樹夫は強引に割り込みを試みた。

「話が弾んでいるところを悪いんだけど、冥王星から来たファラオに聞きたいんだ。黒瀬由梨巴（くろせゆりは）って女性を知らないかな。あんたのお仲間に蹴飛ばされて、宇宙の果てまで飛んで行ってしまったんだが、

に踊らされて、宦官の身でまで手んで行ってしまったんだ
ひょっとして捕虜とかになってない？」
すぐにアクエンアテンから返事があった。
『我が后よ。お前の仕手は無知蒙昧を極めた男らしいな。王侯の我らが下々の者の命などいちいち覚えておるはずもなかろう』
「答によってはあんたの命を頂戴しないといけないな。いちどは肌を重ねた女なんだよ。目の前で殺されて、なにもしないんじゃ男が廃るってもんだろ」
相手はしばらく黙っていたが、やがてこう返してきた。
『ふん。羽虫でも男女間の苦労はあるようだな。冥途の土産に調べてやるとするか。アヌビスに乗っているアンケセンアメンに聞けばわかるだろう』
数秒後。返答があったらしく、王（ファラオ）は言った。

数秒後、返答があ[illegible]、[illegible]しく[illegible]は言[illegible]

『……同じ発音の名前を持つ捕虜がいるようだ。まだ命はあるが、やがて尽き果てよう。捕虜には全員に崇高な使命を課したからな』

「そいつは殺すって意味かよ」

『我らは死を超越した種族。死ぬ死ぬなど、哀れな羽虫だけに許される世迷い言。女を守れなかった男に生きていく価値はない。恥を知るなら自害あるのみ』

「女房に逃げられた男が恥を語るなよ。未練がましいったらありゃしないぜ」

《わが御堂(あるじ)よ。王(ファラオ)は無礼な言い草を極端に嫌うのだ。そうした言葉を連ねるのは敵愾心を煽るだけだが》

冷静な奴ほどいったん怒らせると脆くなる。三樹夫はそれを知ってい

た。機械的に繰り出される刃先と、怒りで力任せに押し出す刃先を比べれば、威力は後者が強いが、精度では前者に大幅に劣るものだ。
その思惑は的中した。相手は怒りに任せた金打声を発してきた。
『我が后は愚かしき仕手に染められたやも知れぬ。まずは仕手だけを殺し、呪縛から解放してやろうぞ』
相手が動き出す様子を、もって生まれた複眼でキャッチした三樹夫は、迷わず先制攻撃に打って出た。
「トトメスよ。ウラエウスの弓だ。準備はいいな」
《いつでも。回転矢（ボルト）は装填を終えている。七発までなら連射できる》
「二の矢はいらない。俺は一矢報いることに全力を傾けるんだ」
ウラエウスは蛇型記章とも訳されるとおり、屹立したコブラを模している。王族の黄金（ラー）マスクの額によく見られる蛇の飾りがそれだ。

伝説によれば、太陽神はウラエウスを電撃もしくは火矢として用い、天敵アポピスとの戦いに勝利したという。破邪十戒（デカログス）はそれを主兵装としていた。場合によって弓に、鞭に、そして小刀にと姿を変えられる。

《御堂よ。どれほど自信があろうとも、王（ファラオ）の動きは神速。そうそう見極められるものではないが……》

「心配無用だよ。俺は弓術の秘技を極めている。心配があるとすれば、劔冑のお前が俺の複眼修正力についてこられるかどうかだ」

《ウジャトの眼力を侮って欲しくないものだ。わたしはエジプトを捨てた身だが、そこを見守る瞳まで捨てたわけではない》

「そいつは頼もしい。よし……〝林檎には永遠に突き刺さらない矢（パラドックス・オブ・テル・アンド・アップル）〟……」

その陰義は、かつて存在した神甲弓聖〝ウィリアム・テル〟や、その贋作である〝ウィリアム・バロウズ〟が得意としたものである。過去のあらゆる術技の集大成を目指したズィルバー・シュテルンⅡ(ツヴァイ)も、試験的にそれを組み込んでいた。ただし仕手に恵まれず、封印され、半ば忘却されていた。

時間を止めるほどの動体視力と、それに追随可能な認識能力。これらを兼ね備えた蒼海三樹夫という人物が操り、ようやく真価を発揮できたわけである。

また同系の術技としてのルーツは遥かな昔にも遡れる。生械体(エジプシャー)の地球携挙と同時に失われたが、エジプトでも似た技は研究されていた。百発百中の飛び道具を追い求めるのは武人の永遠の望みなのだろう。

ネフェルティティが自らの魂を初射に宿す際、それを組み込んだのは

ネフェルティティが自らの魂を劔冑に宿す際、それを組み込んだのに

当然ともいえよう……。

目標の設定。攻撃開始。射線上を疾走する一矢。敵の回避運動。中間点の設定および再射撃。射線の修正。敵のさらなる回避。中間点の再設定および再々射撃。またしても敵の回避運動。そして中間点の再々設定および……。

那由多（なゆた）の彼方へ連なりそうな物理的違法行為の末に、三樹夫の一矢は戦果を確保した。

ウィリアム・テルの矢は子供の頭上に置かれた林檎に突き刺さったが、三樹夫のそれはマアトの頭部を串刺しにした。黄色い左目にそれが突き刺さるや、怪鳥はさすがに足並みを緩め、退避に入った。

「なんて奴だよ。目玉ごと頭を射貫いたのに！」

破邪十戒（デカログス）が呪詛のような調子でそれに続く。
《痛みを捨てたか。それは神への道に非ず。生命たることを放棄する道なり》
「前言撤回だ。二の矢を撃つ！」
今度の狙いは心臓だ。翼を広げている関係上、腋がどうしても開くはず。ならば血液のポンプを鏃で切り刻んでやろう。
発射から命中までのプロセスは再現フィルムを見るかのようだった。
敵の回避能力が鈍っているのは、左目が潰され、遠近感がおかしくなっているせいだろうか。
マアトの劒冑には二本目の矢が突き刺さったが、今度も致命傷には至らない。
「なぜ死なないんだよ！」

第三の矢も放ち、頸部に命中させたが、それでも駄目だった。天空から突っ込んできたマアトは、破邪十戒（デカログス）を鉄の爪で羽交い締めにし、そのまま月面へと押し倒した。

『身の程を知れ。死を超越した者を殺せると思うでないわ。王（ファラオ）の体に傷をつけた代価は地球（ゲブ）よりも重いぞ』

嘴の一撃が胸部装甲を割った。激痛が走った。破邪十戒（デカログス）が金打声で生命の危機を叫んでいるようだが、理解は叶わない。

負けた。猛禽に啄まれるだけの未来を覚悟した三樹夫だったが、状況は激変する。抱いた惨苦のすべてを杞憂とする物体が、側面からひた走って来たのだ。

銀色の塊だ。それがマアトの劒冑を蹴り飛ばした。月面を横転するマアトの劒冑へと、耳慣れない金打声が投げかけられた。

甲高い、少女の詩（しらべ）であった。

甲高い　少女の話であった

『決闘の邪魔をする気はないが、弓を持ったほうが死ぬと情報が得られぬであろう。鳥は取りあえずそこで寝ておれ。後で相手をしてやらんでもない』

三樹夫は新参者の劒冑を凝視した。銀色の女王蟻を具現化したかのようなシルエットだ。額から角状の突起を生やし、背中に回転翼のような羽を背負っている。部分的な違いこそあるが、ズィルバー・シュテルンⅡ（ツヴァイ）によく似ていた。

はたと気づく三樹夫であった。

これはオリジナルの銀星号だ！　俺が背中に担いでいた木箱の中味だ！

「そうか。武帝は胸の金神片を使ったな。あれは聖骸断片（ラピスサギー）そのもの

だ。死さえ超越できる神の欠片を使えば、歪んだ劒冑を元の姿に戻すことなど朝飯前だろう」

銀星号は三樹夫に水を向けた。

『そこの負け犬に聞くぞ。ここは月らしいが、間違いはないか？』

「ああ。半壊しててわかりにくいが、地球の唯一の衛星だよ」

『どうしてこんな所まで運ばれたのかな。おれは六波羅の普陀楽に落下した摩訶不思議な妖弾を、辰気で食い止めようとしたんだが』

「その回答だが、想像はできるが確証はないんだ。君を目覚めさせた武帝に聞いてくれ。紅い蜘蛛の劒冑に乗った怖い奴だ」

『紅い蜘蛛だと！　景明（かげあき）がいるのか！　おれが目覚めた時には誰も側に……』

直後、衝撃波の束が押し寄せてきた。マアトが反撃に転じたのだ。天空に飛び、大きな弧を描いた直後、逆落としをかけてきた。
銀星号――すなわち二世千子右衛門尉村正は、冷静にこれを回避する。マアトの劒冑は再び月面に潜り込み、地を削り、離れた場所に登場した。
『ふむ。寝起きの運動にはちょうどよかろう。半死半生のお前と遊ぶよりも、あの怪鳥と戯れたほうが張り合いもありそうだ』
そう言うや、銀星号は宙を駆けた。駆け続けた。本物の銀の星のように。
『天下に武を布くのはこの光の宿星なり。望みとあらば目にもの見せよう。おれの正義とはこれだ。瘴熱疾走・火隕星!!』
重力障壁が展開され、紫色の漏斗状の物体が稲光と共に生まれる。触

れた瞬間に即蒸発という恐るべき光輝が走った。
しかし、マアトも辰気を扱わせたら相当な手合いである。放たれた陰義の一撃を、空間そのものをねじ曲げて回避したのには、三樹夫も笑うしかなかった。
《我が御堂よ。胸部装甲に甚大な被害が生じた。修復に移るがしばらく戦闘は……》
「ああ、無理だよ。あんな連中の間に入って行けるもんか。いまはこれ以上、厄災が増えないように祈るだけさ」
だが――厄災は増え、積まれ、重なった。
虚空に大穴が開いた。重力波で背後の星が歪んで見える。なにかがやって来る。誰かが召喚されたのだ。
姿を現したのは、呪われた武者であった。一目でそれが三世村正だと理解した三樹夫であったが、武帝の騎体では断じてない。

理解した三樹夫であったが、武帝の騎体では断じてない
そのボディは真紅。そして、その右腕もまた緋色であった。武帝の騎体であれば、右腕だけは黝(あおぐろ)いことを、三樹夫は承知していたのである――。

7

以下の台詞は連盟航宙自衛軍(スターミィ)本部情報部二課が保有していた音声ファイルより抜粋したものである（会話の間には沈黙の時間帯が存在したが、編集で省略してある）。

コメントによれば会話している二人の正体は不明。文脈から判断し、行間には真打剱冑(ブラッドクルス)の金打声が介在したはずだが、録音には残されていない。

なお本件はウルトラ・トップシークレットに指定されており、閲覧には自衛軍参謀本部の許可が求められる――。

「生意気な。おれの瘴熱疾走(ブレイジング)・火隕星(ストリーム)をよけるとは！　しかし、こうでなければならぬ。おれが一閃の刃となり、満天下に武を布くためには、これくらいの梟敵(きょうてき)と渡り合って当然ではないか。かくなるうえは伝家の宝刀を抜くのみ。高度を稼いだ後に〝天座失墜(フォーリンダウン)・小彗星(レイディバグ)〟を叩きこんでやろうぞ。うん？　なんだ？　この懐かしい気配は。これは……まさか！」

『銀星号！　銀星号ではないか！　よもや仕手は光(ひかる)なのか⁉』

「うん！　光である。お前は……景明(かげあき)だな。声色も匂いも風情も同じだ。臍の下にぐっとくるものがある。英雄の景明か、復讐の景明か、

悪鬼の景明かは知らぬが、とにかく景明に間違いないわ！」
『これはしたり。恐ろしや。そして有り難や。どうやら因果が巡って来たようだ。何処とも知れぬ時間と場所で、まさか昔日のままの妹に逢えるとは』
「持って回ったその物言いはまさに景明。光を追いかけて月世界まで達するとは見上げた根性よ。それほどしてまでおれの顔を見たかったか』
『少しばかり誤解もある。俺は大人になった、、、、、一条に拉致され、ここまで引きずられて来たのだ。こともあろうに三世村正の仕手となった一条（いちじょう）に……』
「ふむ。やっぱりあの正義馬鹿か。最初に見たのは鎌倉サーキットだったな。まだおれが長庚局（ゆうつづのつぼね）と呼ばれていた頃だ。年を食っても性

かったか？」

分に変わりはなしか。景明に訊ねる。奴の真打だが、妙なところはな

『あった。真紅の村正だが、右手だけが黝かった』

「それで合点がいったぞ。光も同じよ。あの女に誘拐され、こちら側のこの世界に連れて来られたのだ」

『にわかには信じ難いな。銀星号を纏う光であれば、一条でさえ返り討ちにできように』

「五体不満足だったのだ。天より来たる破壊の果を二世村正と共に止めようとしたが、少しばかり無茶が過ぎた。まるで前衛芸術のように体位と姿を歪められ、狭い箱に閉じこめられてしまった。景明に救いを求めた気もするが、返事をしてくれなかったな。代わりにやって来

たのは式部と名乗る[illegible]。

たのは武帝を名乗る年増女だ

景明よ。因果と言ったが、ここで相見えたのは、いよいよこの光と雌雄を決する定めだと考えるべきだろうか？」

『かも知れぬ。俺は、別の世界で眠っているお前を絞殺したかのような記憶を持っている。堀越（ほりごえ）の屋敷で、茶々丸（ちゃちゃまる）の勧めで。もしやお前（ひかる）はその償いを望んでいるのか……』

「そうか。お前は英雄たる道を選んだ景明なのか。だが、それはこの時代ではない。選択肢の数だけ過去と未来は存在するのだから。

ただし、おれを絞殺した世界などありえない。それはただの錯覚だ。たとえ眠っていたとしても、景明にくびり殺されるほどおれは脆くはないぞ。この世界でも光のほうが何枚も上手だ。

白黒をつけたいのであればつきあってやらんでもないが、その前に始末せねばならぬ敵がいる。急ぎの用件でもあるまいに、家族の対話に

割り込もうとする無粋な輩がな」
『うむ……あれが邪魔者か。怪鳥の恰好をした劍冑とは個性的だが、強そうだな』
「強い。その脚力は光速に迫る勢いだ。本気で攻められれば、回避は難しかろうが、よき兵(もの)を相手に心楽しく舞える機会を与えられたと思えば……」
衝撃音。鉄片が切り裂かれるかのようなノイズ。
『光ッ！　光ッ！　大丈夫か！』
「痛む。そして見えぬ。この光の眼力をもってしても敵の姿が見極められぬ。飢餓虚空(ブラックホール)を動力源にしているだけあって速い。速すぎるぞ」
『敵騎は背中の母衣(ほろ)をめがけてやって来たぞ。光、お前の背中は俺が守ろう。召喚されたこの異世界で、今度こそ光を守り切ってみせる』

「ふん。礼など言わん。おれは景明の背を守ってやるのだから。そして景明に正しき武を悟らせてやる。天下布武の大道へと繋がる光の夢のために！」
『また来た。今度は俺が……ぐふっ！』
再びの破砕音。悲鳴と呻き声。
「景明！　あまり無茶をするな。その紅蜘蛛では勝負にならんし、安手の野太刀で弾くのにも限界がある。おれを庇ったところでなにも出んぞ！」
『そうかも知れんが、俺とて別世界は悪鬼と言われ、武帝と呼ばれた男だ。意地もあれば誇りもある。壊れかけた月の上で死ぬわけにもいかん。うん？……光よ。あれに気づいているか？』
「当然だ。巨大な物体が来る。悪意の凝縮体だな。敵騎はその周囲を

旋回中らしい」
『よもや小惑星？　いや……衛星だな。これは驚いた。直径一二〇〇キロを超える天体がこんな場所に現れるとは。相手は時間も空間も自在に操れるらしい。
しかし、これは好機かも知れぬ。ああした手合いには術技(アーツ)ではなく、剛力(フォース)で対応せねばならんのだ。光よ。俺を村正ごと蹴り飛ばすのだ』
「こんな時に仲間割れをするほど、おれは阿呆ではないぞ」
『違う。蒐窮一刀(おわりのたち)を成し遂げるには、どうしてもお前の脚力が必要なのだ』

8

紅い悪鬼と銀の妖甲が互いにその背中を預けながら、怪鳥と戦う様子は、胸の傷の修復に努める三樹夫と破邪十戒(デカログス)からも確認できた。
あまりに規格外であり、あまりに圧倒的であった。レベルが違う。迫力が違う。なによりも風格が違いすぎる。これが真の真打劒冑(ブラッドクルス)同士の闘争なのか。
とりわけ真紅の劒冑――勢州千子右衛門尉村正三世(せいしゅうせんごうえもんのじょうむらまさ)の動きには目を瞠った。武帝が操る同名同型の劒冑に酷似しているが、機動性は別格だ。仕手と劒冑が完全なる心甲一致を成し遂げているのだろう。
長い野太刀を巧みに扱い、傷つきながらも致命傷だけは回避している。そしてその切っ先は銀星号を庇うために揮(ふる)われていた。
まるで妹か、あるいは実子でも守らんとする慈愛の剣であった。
異世界から召喚された騎体だ。恐らく武帝が金神片を用いて無理やり呼んだのだろう。俺が拉致された時みたいに……。

三樹夫がそう思った刹那、二騎に動きがあった。マアトの劒冑がいったん距離を取った瞬間、銀星号がその場で縦回転を始め、凄まじい蹴り技を放ったのだ。

マアトにではない。三世村正にである。

それが〝逆転・江ノ島大蹴撃〟と呼ばれる技であることを三樹夫は知らなかった。重力という足枷を寸断する一撃で爆発的加速を得た三世村正は、三樹夫の複眼でさえ完全には見極められない速度で上昇し、そして——。

信じられない光景が現出した。裸の男が劒冑から飛び出たのだ。右の手首だけは装甲が施されているが、他は全裸である。

のちに三樹夫は知ることになる。それが究極の電磁抜刀であることを。

三世村正の仕手は、劒冑すべてを鞘とし、自分の肉体を刃として撃ち放ったのだ。磁気を巧みに操れる三世村正だからこそ可能な最後の一撃であった。

これが絶妙に決まった。惑星すら打ち砕ける破壊力を頂戴したマアトの劒冑は、翼をもがれ、片足を失い、無様に高速回転しながら墜落していった……。

行き着く先は月でも地球でもない。そこにあるはずもなかった天体だ。遠すぎて確認はできないが、マアトが不本意な接吻を余儀なくさせられたのは確からしい。

「トトメスよ。あの星はいったいなんだ？　敵騎はどこに墜ちた？　小惑星がこんな場所まで出張って来るとも思えないぜ……」

《確証はない。だが、冥王(オシリス)の星の第一衛星(アヌビス)と考えて間違いないと思う。地球ではカロンと呼ばれている[illegible]》

う　地球では[illegible]ロンと呼ばれているはず》

「冥王星の月がどうして地球圏まで迷い込んだ？　そいつは物理法則への叛逆だろう」

《解答はひとつ。第一衛星(アヌビス)は天然の衛星ではない。あれは巨大な劒冑なのだ。地球の月がそうであるように……》

聞き逃せない返事に戸惑う三樹夫だったが、異変はさらに続いた。

空間に異変が生じた。極光(オーロラ)を連想させるそれに、真紅と銀の二騎の劒冑が吸い込まれていくではないか……。

《正史の時間には修正力があ(ヽ)る(ヽ)。異質な者を正しい時間的位置へ、引き戻そうとする自然の力が働く。あれらの劒冑(ケペシュ)はそれに巻き込まれたのだろう》

破邪十戒(デカログス)の独白に頷くしかない三樹夫であった。どのみち、頼もしす

ぎる援軍がいなくなったのは事実だ。

その代償というわけでもないが、別の劒冑が落下してきた。大破状態だが、三樹夫にはそれが武帝の三世村正だと一目でわかった。

騎体を起こし、不時着予測点に走る。落下してきた武帝と劒冑を、三樹夫は両腕でしっかり抱き留めるのだった。

『時空の彼方からもうひとりの装甲悪鬼を呼んだが、うまくいったようだな……』

「凄まじい闘いだったぜ。劇場公開すりゃ全米が泣きそうな勢いだ」

『軽口を叩ける余裕はできたってことか。こっちにはそのゆとりがない。畜生め。痛い。胸に埋め込まれた金神片を二つとも抜いたのはこたえる。心臓が破れそうだ。

しかしのんびりしちゃいられない。別の時間軸で恐ろしい光景を見たんだ。地球に巨大な天体が降りてくるのをな。

墜落じゃない。降下したんだ。地中海の東側、エジプトとトルコは踏み潰されて壊滅し、生態系にも大きな影響が……ってあれがそうじゃねえか！』

で、武帝は天の一角を指さして叫んだ。三樹夫は戦況を簡単に語った後

「直径一二〇〇キロ超の物体だ。間違いない。冥王星の衛星カロンだ。弱ったのは、もうあれを撃破する手段も余裕もないってことかな」

と言った。暫しの間、武帝は沈黙したが、やがてこう告げたのであった。

『まだ方法はある。〝月神（コンス）の劔冑（ケペシュ）〟を起こすんだ。蒼海三樹夫、お前にならできる。いや、お前にしかできないだろう。勝手にこの世界に

召喚して悪かったが、あの女の直系でなければ暗黒物質砲を使いこなせまいよ』

「武帝。あんたの発言は趣旨がわからんよ」

『理解よりも行動だ。すぐティコ・クレーターに飛べ。その奥底にコックピットがある。あたしは昔――人類が基地を造る前にあそこで試したけれど、拒否されちまった。その時に罰として金神片を埋め込まれたんだけどね……』

9

第一衛星（アヌビス）の北極の地下深くに設けられた仕手の間には、ツタンクアメンが無表情のまま陣取っていた。

人類との闘いに敗北し、宇宙を漂流中に婚約者から通信を受け、アヌビスに不時着を果たしたツタンクアメンであったが、新たな劔冑（ケペシュ）を授けられ、復讐に燃えていた。右足を失ったが、現在は放置してある。後で組織再生を施せばどうにでもなるからだ。

アヌビスの劔冑――それは生械体（エジプシャー）が造ったものではない。支配者たる〝始祖（ラー）〟が太陽系を離れる際に残した置き土産であった。

衛星そのものが劔冑（ケペシュ）であり、劔冑（ケペシュ）こそが衛星だった。自らが生み出した〝始祖（ラー）の関門〟を自らが抜け、地球圏まで姿を現したのだ。

さすがに人型に変形はできず、球形のままだが、劔冑（ケペシュ）である事実に変わりはない。図体そのものが兵器となり、攻めも受けも鉄壁を誇る。

直径一二〇〇キロを超える物体を操る興奮に酔いしれるツタンクアメ

ンは、内部に乗り込む一万八千名の部下に対し、こう命じたのであった。

「戦士諸君。我らは来た。三三〇〇年の眠りを経て、地球(ゲブ)に戻った。アヌビスはこのまま降下を続け、エジプト北部の地中海に軟着陸を果たす。その直後から間引きを始めよう。美しいこの惑星を汚す羽虫どもを始末し、支配者の再臨を宣言するのだ！」

喝采は聞こえないが、きっと誰もが感極まっているはずだ。彼らのためにも作戦を成功に導かなければ。

功を焦るツタンクアメンだが、気になることがあった。

まずアヌビスの降下だが、これはツタンクアメンの独断だ。本来の攻撃案では、地球の月を支配下に置いた後、アヌビスもまた地球の衛星となり、月軌道上から爆撃を繰り返して人類の淘汰と降伏を求める手筈

とし「月軌道」から爆撃を繰り返して人類の消沈と降伏を求める計算だった。

残念ながら〝月神（コンス）の劔冑（ケペシュ）〟の確保に至らなかったため、それは諦めざるを得ない。羽虫に動かせる道理はないが、あれが真価を発揮すれば、どんな攻撃を繰り出してくるかなどわからない。

ここは領土の確保を優先するべきだ。エジプトに近い地中海に降ろし、そこを埋め立てれば母の祖国たるアトランティスの再現にもなるだろう。あるいは母上もお考えを改めるやも知れぬ。

仕手の間には誰もおらず、ツタンクアメンに忠告する者はいなかった。もちろんアンケセンアメンの姿も見えない。愛しい女の不在に、ツタンクアメンは傍らで控える劔冑へと語りかけた。

「ケプリ二号（セネウ）よ。お前は仕手がいなくても動けるな。アンケセンアメンを探してきてくれないか。熱量電池の制御をやってるらしいが、で

きれば顔を見たい」

破損部を自分自身で修繕しながら、スカラベを模したケプリは言った。

《諒解した。だが、王子も約定を守って欲しい。アヌビスには吾(あ)が定めた真の仕手がいるようだ。話をさせてもらえぬか》

「つまり捕虜のなかに盟約した者がいるということか。よかろう。羽虫とよりを戻したいのであれば、好きにするがいい。アヌビスという新しい劒冑(ケペシュ)を手に入れた以上、僕はお前を必要としていない。短いつきあいだが、御苦労だった」

思いやりのない台詞を背に、ケプリ二号(セネウ)は沈黙したまま退出した。ツタンクアメンは眼前の情報端末に視線を落としたまま、報告を待つ。

数分後、異変が生じた。アヌビスの統御機能が高速で飛来する物体を発見したのだ。

それは大破した劒冑（ケペシュ）だ。すでに制御不能らしく、アヌビスの赤道付近へ墜落し、衝撃が全域を揺らした。観測に出向いたアテン球体がすぐに画像を送ってきた。

「あれはマアトの劒冑！　まさか父上が敗れたのか！」

すぐにケプリ二号（セネウ）を救援に向かわせようとしたが、ツタンクアメンは思いとどまった。どのみち父上も僕も死を超越している。遺骸さえあれば再生は可能だ。

そして……万が一に身罷（みまか）られていたとしても、それはそれで構わない。

男はいつか父を超えなければならないのだから。

この瞬間がきっとその時なのだろう。

この瞬間がきっとその時なのだろう
身勝手な思いに脳を委ねていた頃合いであった。ケプリが畏怖すべき報告を寄越したのである。
《王子よ。アンケセンアメン女史を熱量電池薬室で発見した。しかしながら、映像転送は自粛したく思う。作戦完了まで王子は采配に専念されたい》
好奇心と不安を煽る報告を聞き流せるほど、ツタンクアメンは大人になってはいない。彼は先を求めた。
「ケプリよ。これは命令だ。映像を転送せよ」
《諒解した。後悔は人生の常だが、望みとあれば》
映し出されたのは大乱交であった。数百数千の羽虫たちが全裸で交わりあう修羅の宴であった。
死を前にした捨て鉢の性行為ではなかった。これは強制されてのもの

だ。正気を失わせるほどの媚薬を穴という穴から投入し、老若男女関係なく、ありとあらゆる組み合わせが試されていた。
理由はひとつ。熱量（カロリー）の確保である。
人間は生命体として保有する熱量が半端ない。冥王（オシリス）の劒冑を動かすエネルギー源としては最適だ。そのレベルが最高に達するのは性行為の最中である。よって捕虜に媚薬を与えるのは理に適った行為と言える。
だが、その中心に座し、精液を浴びているのがアンケセンアメンその人だとすれば尋常ではあるまい。
淫らな行為に自らを埋没させているのは、熱量を確保するためのプロフェッショナルな根性ゆえだろうか？　そうだと信じたいところだが、いまのツタンクアメンにそこまでの余裕はなかった。

絶句している彼に緊急の報告が飛ぶ。
《……〝月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）〟に熱源を探知。危険。発射反応の可能性大なり……》

10

武帝に言われたとおり、三樹夫はティコ・クレーターの奥底で操縦席らしきものを探し当てた。発見に苦労はなかった。以前から核廃棄物処分場の掘削調査、という名目で発掘が行われていたのだ。
「こいつ動くぞ！」
破邪十戒（デカログス）ごと月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）の操縦席に滑り込んだ蒼海三樹夫は、数万年近い時を経て起動する超巨大な人工物に、ただただ驚愕するのみで

あった。
これはいわゆる『劒冑が着込む劒冑』だ。超大型の劒冑を稼働させる手段として、過去に考案されたこともある。大和で試験運用されたと聞く竜騎兵用強化外装・荒覇吐（あらはばき）はその一例であろう。
しかし、太古の昔から人類を見つめてきた月そのものが劒冑であったとは……。
《我が御堂（あるじ）よ。統御機能との同調に成功した。火器管制はすべて我が掌中にあり》
妙に冷静な調子で破邪十戒（デカログス）が報告した。
「へえ。月そのものが半壊しかけていたというのにずいぶんスムーズだな」
《割れたのは表層のみ。月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）の中核は地下深くにある。そして

月神の劍冑を造りしは始祖なり。またわたしは生械体の一翼を担う者。最初から互換性を見越して設計されている》

「じゃあ、いちばん破壊力が大きいのをぶちかましてやろうぜ。奴が地球に降りる前に。本当ならロシュの限界で壊れるとは思うが、陰義という魔法がある以上、物理法則は通用しないだろうからな」

《諒解した。暗黒物質砲（ダークマターキャノン）が相応しいと判断する》

「物々しい響きだな。秒読みと発射のタイミングは任せるぞ」

《いつでも大丈夫だ。仕手として命令を寄越して欲しい》

「よし！　暗黒物質砲（ダークマターキャノン）発射五秒前。衝撃に備えよ。四……三……二……一……発射！」

《発射確認。すべて異常なし》

「ちょっと待てよ。衝撃もなにも感じなかったぞ。本当に撃ったのか？」

《問題なし。命中まであと八分一七秒》
その数字で三樹夫はすべてを理解した。
暗黒物質砲（ダークマターキャノン）の砲身は月にはない。太陽にあるのだ。
暗黒物質（ダークマター）は太陽核から大量に放出されている。それを陰義でかき集め、一点に集約して虚空を焦がす光線とする。それがこの兵器の真骨頂であった。
その速度は光と同じだ。だからこそ八分一七秒もかかるのだ。地球まで太陽光線が届くのに、それだけの時間を要するのだから。
「待てよ。それは相手が回避する時間も八分以上あるってことだろう？」
破邪十戒（デカログス）は機械的に返答した。
《そのとおり。ここで考えられる策はふたつ。まずは命中するまで乱

射を繰り返すこと》
「トトメス。それは却下だ。冥王星の第一衛星（カロン）は地球に落下してるんだぞ。時間的な余裕はない。もうひとつの策は？」
《我が御堂（あるじ）の複眼にすべてを賭けること》
「腕前を見せろってか！」
自暴自棄の要素が皆無だったとは言えない。破邪十戒（デカログス）とはすでに得意の陰義を炸裂させているが、同じことが月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）で可能だろうか？
《御堂よ。月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）の統御機能の解析が終わった。暗黒物質砲（ダークマターキャノン）の弾道変更は不可能ではない。ただし仕手への負担は凄まじいことになろう。よくて失明、悪くすれば落命すら覚悟してもらわねば……》
「上等じゃねえか！　一世一代の〝林檎には永遠に突き刺さらない（パラドックス・オブ・テル・アンド・アップル）

矢〟を見せてやろう。俺がこのいかれた世界に召喚されたのは、どうやらこの一瞬のためらしい。トトメスよ、地球を愛するお前ならできるはずだぞ。いや、お前と俺なら必ずできる」
しばらくの沈黙の後、破邪十戒（デカログス）は金打声（セジェムネベウ）を飛ばしてきた。
《御堂（あるじ）よ。では始めましょう。……汝、殺すなかれ。汝、犯すなかれ。汝、盗むなかれ……》
唱和が脳内に流れると同時に騎体が揺れ始めた。月全体が、すなわち月神（コンス）の劒冑（ケペシュ）が未曾有の経験に打ち震えているのだ。
蒼海三樹夫は、脳細胞と複眼を焼き尽くす勢いで陰義を発動させた。無限に中間点を刻み、無数に再発射を行った結果、暗黒物質砲（ダークマターキャノン）の弾道は数多に違えられた。
アキレスは亀を余裕で追い抜き、そして――。
時は来た。永遠とも思える四九七秒が過ぎた。

宇宙の再創造さえ可能なエネルギー量を浴びた冥王星第一衛星カロンは、震え、燃え、砕け、瓦解し、ここに天体として、そして劒冑としての生涯を終えた。
この星は幾千、幾万、幾億の欠片となり、やがて地球の静止軌道近辺を回る巨大な輪を形成したのである——。

終章

母なる地、母なる人

——THE MOTHERLAND, MOTHER…

1

松前大島(まつまえおおしま)から夕暮れの空を見上げる。
半壊した半月が天空に昇らんとしている。辛うじて丸みは保っているが、盆のようだと唄われた姿はもうそこにはない。地球の衛星は傷つき、美貌を損ねていた。
しかしながら、それをカバーして充分に釣りがくる天体が南の空に見える。
地球の輪(ザリング)だ。
冥王星の衛星カロンのなれの果てである。それが爆砕されてからまだ二週間しか経過しておらず、完全な円形に落ち着いたわけでなかったが、天の川など歯牙にもかけない見事な白金、ま、見る者に無限の感動

な、天の川など歯牙にもかけぬ見事な色合いは、見る者に無限の感動を与えていた。

「美しいな。そのうち赤道付近に集結すれば、北曾（えぞ）からは見え難くなるだろうけど」

五体満足のうちに地球に戻った蒼海三樹夫は、隣の武帝に語りかけたが、彼女は冷たくこう返すのだった。

「宇宙開発には邪魔でしかないな。天然のデブリが増えただけじゃないか。お前が調子に乗って粉々にしたからだぞ。地表の被害も大きい。地中海と大西洋、そしてオーストラリアには一〇〇メートル単位の破片が落下し、十数万の死傷者が出た。お偉さんは責任のなすり合いで大忙しだ」

「ああでもしなければ地球人類が滅んでいたかも知れないでしょう

に。まあ、残念だったのは生械体（エジプシャー）の親玉の遺体を発見できなかったことですね」

武帝は黙ったまま、ブレスレットを振った。空間に写真がディスプレイされる。

「辛うじて生き残ったカグヤ姫天文台が撮影した一葉だ。デジタル補正をかけてもそれが限界だが、見覚えがあるだろう」

「もちろん。こりゃ怪鳥（マアト）だ。残骸だけど間違いない。それを曳航しているのは……こいつは驚いた。破邪十戒（デカログス）じゃないか」

「三樹夫はティコ・クレーターで破邪十戒（デカログス）と別れたのだったな」

「そうだ。暗黒物質砲（ダークマターキャノン）を撃った一時間後だったよ。帯刀の儀を結んだ相手だから、俺としても名残惜しかった。地球まで連れて来たかったが、ひとりでやらなきゃならんことがあるそうでな」

「夫だった存在と、息子であった者の回収か？」
「ああ。認めないと宇宙空間へ強制排除されかねなかったぜ……」
瞳を瞑ると、漆黒の闇に溶け込んでいく劒冑の姿が瞼（まぶた）に浮かぶ。
永遠（とわ）の別れには早すぎる。引き留めようとはしたが、相手の決意が固すぎた。三樹夫を御堂（あるじ）と呼んでくれた破邪十戒（デカログス）だが、行きずりの相手よりも、骨肉を重んじる感情が色濃く残っていたらしい。
それでいいと思った。帯刀の儀を交わした劒冑と仕手の関係は、死に到るまで続くことも珍しくないが、一期一会の間柄があっても構わないじゃないか。
我らはすでに一生分の偉大な闘いを終えたのだから……。
向こうも同様の心持ちかも知れなかった。三樹夫は見たのだ。去りゆく破邪十戒（デカログス）が右手に抱えている石版を左右に振った瞬間を。それが最

後の別れを示す合図ではないと、誰が断言できよう。
さらば破邪十戒（デカログス）よ。この身がいかなる時空の果てに彷徨しようとも、お前のような劒冑を装甲（まとう）することは、二度とあるまい……。
哀愁の瞳を浮かべた三樹夫へと武帝は語りかけた。
「それに関して責めはしない。破邪十戒（デカログス）の性質（たち）はあたしもよく知っている。シナイ山から回収した時にさんざん話したからな。あたしの婆さんと同じくらい頑固だったけど、同じくらい律儀でもある。さっき、彼女からこんなメッセージが届いたぞ」
ポケットの電子ペーパー端末が着信音を奏でた。三樹夫がそれを開くと、こんな字句が躍っていた。

地球はヒトに託す。太陽系は人類に託す。ただし冥王星に近づくこと能わず。

破邪十戒(デカログス)の名に賭けて、王(ファラオ)と王子の御魂は私が鎮めん。

両名の復活は、これを永久に封印せん。

「そうか。彼女はエジプト神話のイシスに自分をなぞらえているのだな。夫の亡骸を探し求めた貞淑な妻のように……」

「そのメッセージを受信したのは月だ。ハイ・ポーツマスのコーセィ市長が便宜を図ってくれた。冥王星から生還した捕虜の中に彼女の両親と因縁のある男がいたらしい。それに孫娘も負傷してはいるが、無事だったそうだ。今後も武帝傭兵団とは長く誼(よしみ)を結びたいと言ってく

れた」
「捕虜だって？　じゃあ噂は本当だったのか。熱量電池薬室とかいう乱交ルームで……」
「それ以上は言わなくていい。ともかく捕虜が押し込められていたブロックは頑丈でね。救助も素早かったため、ほぼ全員が生還できた。あたしが脚を切り落としてやったケプリという真打劒冑が、その回収に協力的だったらしい。いずれそいつもこの島に呼び、我が一員としたいものだな」
「武帝。俺をこの時間帯に呼びつけたのは、そんな楽しい話ばかりをするためじゃないんだろう。きっと面白くない話があるはずだ」
「……察しがいいな。早速で悪いが、一緒に宝物殿まで来てもらお

う」
かつて破邪十戒（デカログス）と再会した間には、生械体（エジプシャー）の捕虜が繋がれていた。女性体だが、体毛はなく、肌は銀色で血管と筋肉が浮き出ている。全裸だが、無気味すぎて性欲は一切湧かない。聞けば、光合成だけで生きているらしい。小声で念仏のような言葉を喋っているが、内容はわからない。
「コプト語っていうらしい。直訳すれば『ルゥは私を捨てた。ルゥは助けに来なかった。ルゥは母君に抱かれて消えてしまった……』となるんだと。こっちからの呼びかけには答えず、そればかり繰り返してる」
「精神に重い傷を負っているんだろうけど、いったいどこから？」
「月だ。コーセイ市長から押しつけられた。処分は武帝に一任すると

さ」
三樹夫は素早く思考を巡らせた。
「なるほどね。月に置いておけばいずれは知られる。拷問の末に解剖され、見せ物にされるだろう。それが冥王星に知れれば復讐の火種にもなりかねない。ことが大きくなる前に武帝に丸投げし、最悪の場合には責任を取らせると……」
「連盟航宙自衛軍(スターミイ)の考えそうなことだ。きっとこっちが飼い殺しにすると思ったんだろうが、そうはいかないぜ。村正！」
即座に現れる紅い蜘蛛。それに流れる口上が重なる。
『鬼(オニ)に逢うては鬼を斬る。仏(ホトケ)に逢うては仏を斬る。ツルギの理(ことわり)ここ

に在り！』

場違いにも装甲した武帝は、問答無用で野太刀を抜いた。三樹夫は驚いて静止する。

「待て。殺すのが慈悲だと？」

『違う。殺すのが正義なり！』

三世村正をまとった武帝は、大声で宣言する。

『悪に報いは必ずある。人知れぬ場所でも〝善悪相殺〟の鉄則を崩すわけにはいかない。地球と月を崩壊直前に追い込んだ帳尻を合わせるには、捕虜ひとりの命ではとても足りないがな』

後ろから足音が響く。三樹夫が振り返ると、懐かしき女性が立ってい

た。
黒瀬由梨巴（くろせゆりは）その人であった。
「久しぶりですね。蒼海中尉。まずは地球を守ってくれたあなたの武威に敬意を示します。最期に逢えて本当によかった……」
武帝は無慈悲に由梨巴へと言い放つ。
『黒瀬よ。〝武帝〟の掟を言え！』
「善悪……相殺……」
『ならばどうする？』
「殺めた敵と同数の味方を殺すべし」
武帝がやろうとしていることに気づいた三樹夫は、大声で抗議する。
「やめろ！　せっかく生きて戻って来たんじゃないか！　殺すな。命を奪うのであれば俺の命を取れ！」
由梨巴は少しだけ笑うと、

由梨巴は少しだけ笑うと

「その言葉だけで嬉しいわ。私の曾祖母は岡部党の一員。そして曾祖父は破戒僧で、かつて武帝と刃を交えたこともある。血塗られた家系を絶やし、武帝の役に立てるのなら本望でございます。さようなら、三樹夫……」

野太刀が舞った。

まずは生械体(エジプシャー)の女の首が飛び、返す刀で由梨巴の首が飛んだ。

呆然として立ち尽くす三樹夫に武帝の声が飛んだ。

『盟約完了を宣言する。それから蒼海三樹夫よ。お前とは約束をしていたよな。すべてが終われば元の世界に戻すと。

それも叶えよう。両親が健在で、愛の存在が実証される世界へ戻してやろう。ただし、完璧は期待するな。人間は誰しも道に迷うものなのだから』

ガス[illegible]』
発した。
歴戦の勇士でも怯むこと必定の金打声（きんちょうじょう）だったが、なんと叫んだかはわからない。耳元に届くべき声音（こわね）は歪んでいた。黒き穴に吸い込まれる感覚。時間と体が無理やり引き延ばされ、熱と氷の感触が喉元を流れる。
そして、そして、そして——。

2

「貴様もそこで、羽虫のように死ぬがいい！」

「獅子吼（ししく）ッッ!!」
「戯け。射線は見切った！　悪しき血脈をここで断つ！　父のもとへ行け、香奈枝（かなえ）！」
殺し合いの台詞が流れる狭苦しい通路で、三樹夫は意識を取り戻した。
二領の劒冑が睨み合っている。真打の珍しい型らしく、その名はわからない。暗殺者を思わせる黒い武者と、巨大な弓を装着したオリーブグリーンの騎体だ。
「こ、こいつは敵わん！」
そう叫びながら、巻き込まれまいと下がったが、二騎は共にストップモーションのまま微動だにしない。まるで三樹夫が見えていないかの

ようだ。
そこで彼は気づいた。この世界は内的時間と外的時間が乖離した空間らしいと。つまり傍観者の運命を課せられたというわけか。
「おやまあ。このボイド空間にお客さまとは珍しゅうございますわねえ」
場違いな声に振り返ると、小柄で品のよい老婆が立っていた。
「お婆さんは誰かな？　俺は蒼海……じゃなくて永倉(ながくら)という者だが」
「これは奇遇な。わたくしも永倉と申しますのよ。もしかしてですが、お名前は豹輔(ひょうすけ)と呼ぶのではありませんか？」
「……どうしてそれを知っている？」
「ああ、やっぱりですわねえ。その糸目を広げてはくださいませんか。わたくし、見慣れておりますので驚きはいたしませぬ。

しかし　このさよをお忘れとは情の薄い　大鳥という家名では　成人する前に殺されること必定ゆえ、さよの名字をお貸ししましたのに。

もっとも、赤子の頃しかお世話をしておりませんから、仕方ないかも知れませんけどねえ」

どうやら父母に繋がる手掛かりらしい。この時空間に放り出してくれた武帝の慧眼には驚くしかない。

「豹輔さま。事情はどうあれ、斯くも長き不在を、さよは悔しく思います。あなたが行方不明になった結果、ご両親の不和は決定的なものとなりました。そして遂には殺し合いにまで行き着いたのです。きっと愛の高まりの場所を目指して来られたのでしょうが、それと同様に殺しの瞬間も感情が高まるもの。間違いとはいえ、あなたには酷であったやも知れませんわねえ」

[illegible]」

『The paradox of "Tell and apple"』

陰義の発動を意味する女（はは）の呪文が流れ、そして、男（ちち）は、羽虫のように、死んだ。

死線を潜り抜け勝利を得た劒冑は、やがてコントラバスの独立形態に落ち着いた。その陰から女性将校が現れた。

背が高く、髪は長く、そして糸目であった。

「さよ。背の君は斃したわ。屋敷に火を放って逃げましょう。あら、そちらの青年将校はどなたかしら？　知らない軍服だけど」

どこかの時間軸で自分を産んでくれた女性へと、彼はこう述べるのだった。

「自分は蒼海三樹夫と申します。階級は自衛軍中尉です」
「自衛軍？　聞いたことないわ。中国軍閥の一派かしら？　それにしても不思議な雰囲気をお持ちね。なんだか他人とは思えないし、どこかでお会いしました？」
「イエスでもありノーでもあります」
「妙な返事ね。あなたも劒冑を操るの？」
「はい。嗜む程度ですが、冥王星の衛星を吹き飛ばしたこともございます」
甲高い声で笑ってから、相手は続けた。
「面白いホラ吹きさんね。それに免じて殺すのはやめてあげる。またお会いしましょう」
「いいえ。もう二度と……」

かつてエジプトの地を統べ、そして忽然と姿を消した生械体(エジプシャー)という種族がいた。
その後に我が世の春を謳歌した人類という種族がいる。
望まれぬ激突が如何なる形で終わろうと、それは単なる勝ち負けにすぎない。
地球を抜け、太陽系を離脱し、銀河の果てに到ろうとも、やはり因果は巡るのだ。
装甲された悪鬼がその軛(くびき)を逃れることは、永遠にあるまい……。

装甲悪鬼村正　宇宙編　了

設定集

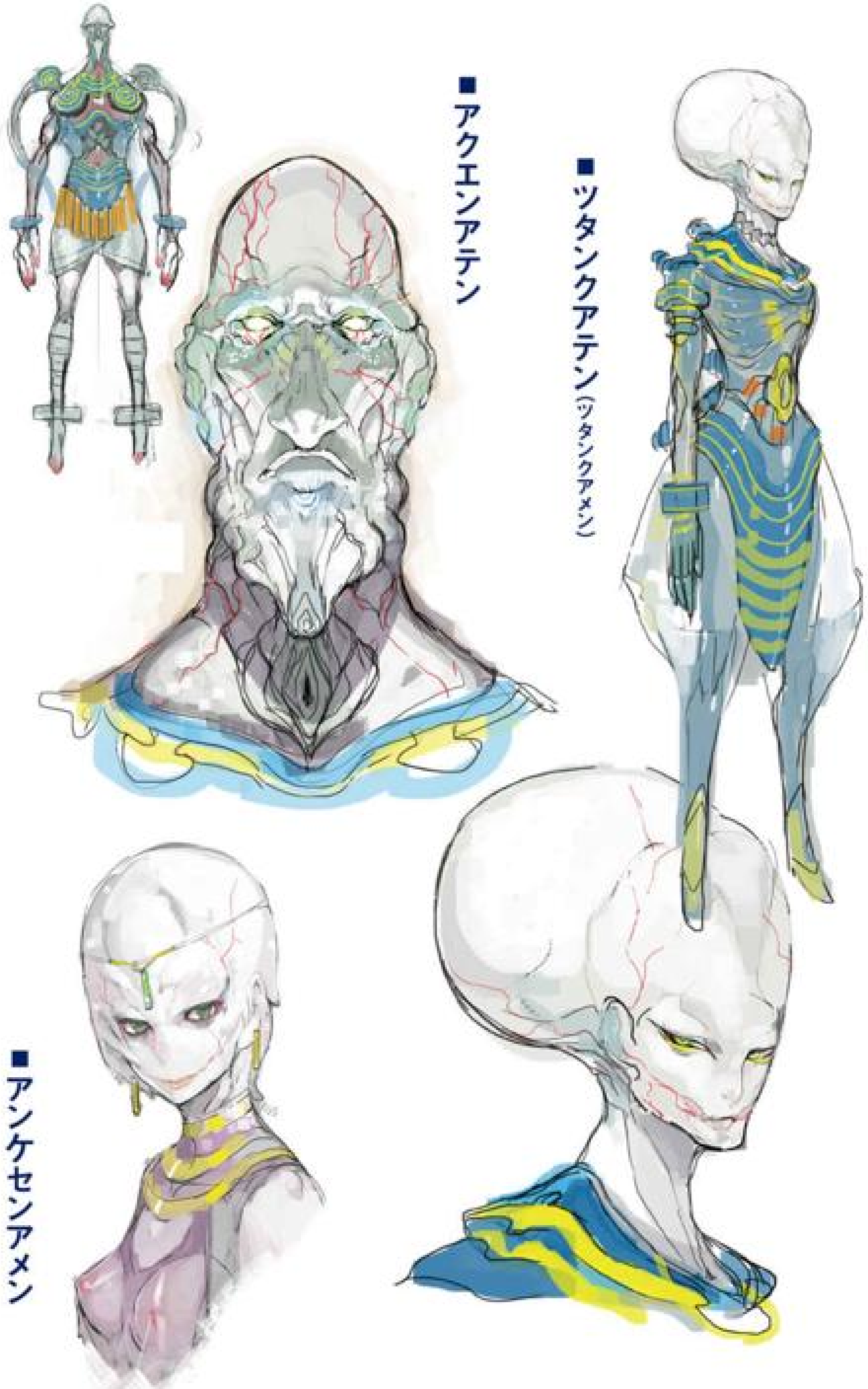
■蒼海三樹夫

キャラクターデザイン（なまにくATK）

■黒瀬由梨巴

■綾弥一条

■イリーナ・チェーホフ


■アクエンアテン
■ツタンクアテン（ツタンクアメン）
■アンケセンアメン

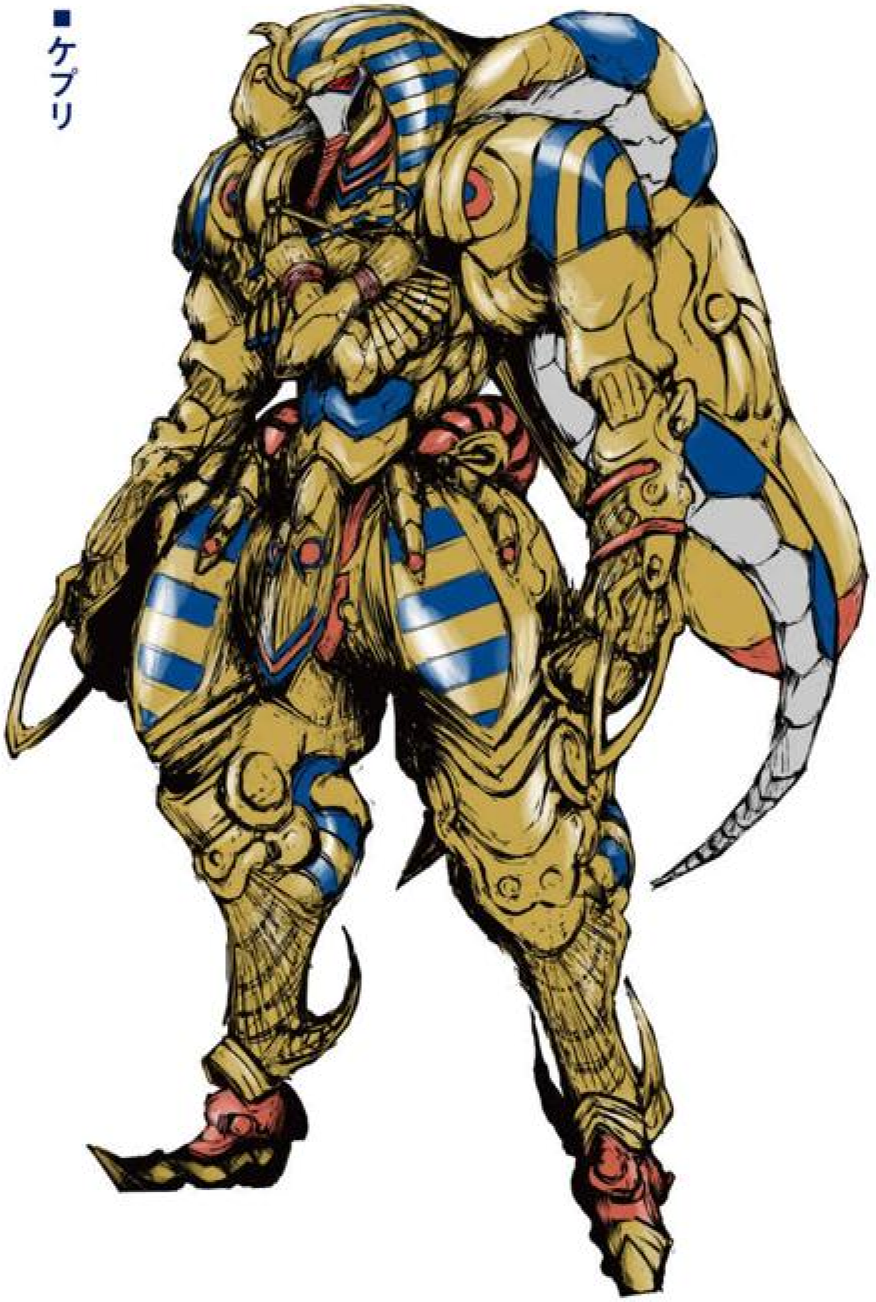
劒冑デザイン（石渡マコト）

■ズィルバー・シュテルンⅡ

■破邪十戒（デカログス）

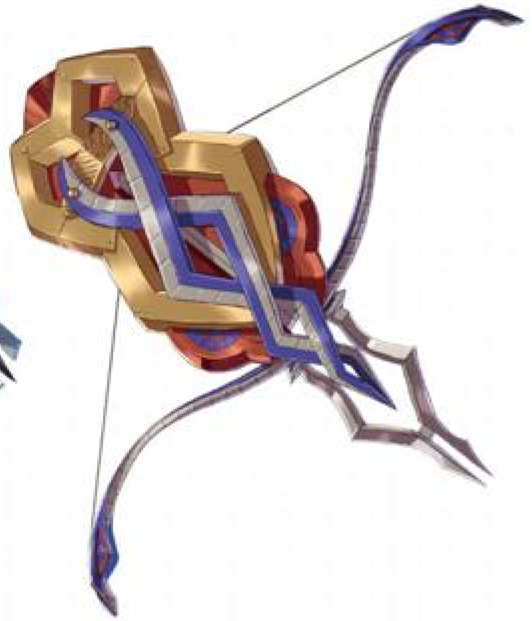
■マアト

■ケプリ



三樹夫騎 武器デザイン（IsII）

■ズィルバー・シュテルンⅡ



■破邪十戒（デカログス）

星海社 FICTIONS
SI-01
装甲悪鬼
村正
宇宙編
吉田親司
ニトロプラス
宇宙を舞台に新たな"善悪相殺"の死闘が紡がれる！
吉田親司
なまにくATK
石渡マコト

星海社FICTIONS
装甲悪鬼
村正
宇宙編
吉田親司
ニトロプラス
FullMetalDaemon-
MURAMASA
Series;Space
星海社
装甲悪鬼 村正 宇宙編
吉田親司
ニトロプラス
星海社

星海社 FICTIONS
91-01
装甲悪鬼村正 宇宙編
吉田親司
ニトロプラス
宇宙を舞台に新たな"善悪相殺"の死闘が紡がれる！
nitro+
ニトロプラス最新作 死者再臨ADV
凍京NECRO
トウキョウ・ネクロ
2016年1月29日発売予定
日本語版 Windows 専用
星海社

星海社FICTIONS
装甲悪鬼村正 宇宙編
吉田親司
ニトロプラス
Isll
FullMetalDaemon-MURAMASA Series:Space
星海社FICTIONS
31-01
装甲悪鬼村正 宇宙編
吉田親司
ニトロプラス
星海社
宇宙を舞台に
新たな
"善悪相殺"の
死闘が
紡がれる

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・出来事などとは一切関係ありません。

収録されている内容は、作品の執筆年代・執筆された状況を考慮し、初版発売当時のまま掲載しています。

キャラクターデザイン　なまにくATK（ニトロプラス）
劒冑デザイン　石渡マコト（ニトロプラス）
監修　嶋流（ニトロプラス）
版権窓口　ＯＫ間

ブックデザイン　相京厚史・大岡喜直（next door design）

編集担当　岡村邦寛

フォントディレクター　紺野慎一
電子書籍ディレクター　松島 智
オペレーションチーム　阿万 愛＋三本絵理

校閲　鷗来堂

フォント制作協力　字游工房＋リアルタイプ＋凸版印刷

制作協力　新藤慶昌堂

本作品は、2015年12月、小社より星海社FICTIONSとして刊行されたものをe-FICTIONSとして電子書籍化したものです。
e-FICTIONSでは、訂正部分や図版点数などが異なる場合があります。

ご利用の端末によっては、リンク機能が制限され正しく動作しない場合があります。また、リンク先のWebサイト、メールアドレス、電話番号は、事前のご連絡なく削除あるいは変更されることもございます。ご了承ください。

装甲悪鬼村正 宇宙編

2020年12月1日発行（01）

著 者　吉田親司
©Chikashi Yoshida 2020
原 作　ニトロプラス
©Nitroplus 2020

発行者　太田克史

発行所　株式会社星海社
〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル4F
https://www.seikaisha.co.jp

発売元　株式会社講談社
〒112-8001
東京都文京区音羽2-12-21
https://www.kodansha.co.jp

本電子書籍は、購入者個人の閲覧の目的のためにのみ、ファイルの閲覧が許諾されています。
私的利用の範囲をこえる行為は著作権法上、禁じられています。